

靈界物語 第五八卷 眞善美愛 西の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第五八卷』愛善世界社

2007(平成19)年02月03日 第一刷發行

『靈界物語 第五十八卷』天聲社

1971(昭和46)年01月10日 第二刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。
図表などのレイアウトは完全に再現できないので適宜変更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

）
）
）
）
）
）
）
）
）

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇

玉石混淆 ぎよくせきこんかう

第一章

神風 しんぷう 〔一四七六〕

第二章

多數屍 たすうけつ 〔一四七七〕

第三章

怪散 くわいさん 〔一四七八〕

第四章

銅盃 あかがねだらひ 〔一四七九〕

第五章

潔別 けつべつ 〔一四八〇〕

第二篇

湖上神通 こじやうじんつう

第六章 茶袋ちやぶくろ (一四八一)

第七章 神船しんせん (一四八二)

第八章 孤島こたう (一四八三)

第九章 湖月こげつ (一四八四)

第三篇 千波萬波せんばんばんば

第一〇章 報恩ほうおん (一四八五)

第十一章 欸乃ふなうた (一四八六)

第十二章 素破拔すつぱぬき (一四八七)

第十三章 兔耳うさぎみみ (一四八八)

第十四章 猩猩島しやうじやうじま (一四八九)

第十五章 哀別あいべつ (一四九〇)

第十六章 聖歌せいカ (一四九一)

第一七章 怪物くわいぶつ 〔一四九二〕

第一八章 船待ふなまち 〔一四九三〕

第四篇 猩猩しやうじやうけつぱく 潔白

第一九章 舞蹈ぶたふ 〔一四九四〕

第二〇章 酒談しゆだん 〔一四九五〕

第二一章 館歸くわんき 〔一四九六〕

第二二章 獸婚じうこん 〔一四九七〕

第二三章 晝餐ちうさん 〔一四九八〕

第二四章 禮祭れいさい 〔一四九九〕

第二五章 萬歲樂ばんざいらく 〔一五〇〇〕

〔 〕

序文
じよぶん

本巻も又例の如く三日の間に口述編纂を終りました。着手（三月廿八日）以来、天候險惡にして、夜見の濱に打寄する激浪怒濤の響きや、硝子戸を暴風の揺る音、春雨の聲、竝に東北隣の旅亭に聞こゆる三味線、安來節の聲等に合せ口述の拍子を探りながら諄々として進み行く。

出雲富士ほど苦勞はしても

末を松江で氣は安來

この歌の文句を栞となし乍ら、末の代のため松の神世、五六七の神代の教草の一端にもと、油の渴きし口車、湯茶をガブガブ呑みながら、口述臺に安臥して神の儘に儘に述べ終る。筆者は加藤、北村兩氏にして前巻も同様なり。アア惟神御の恩賴を謹み感謝し奉る。

大正十二年三月三十日午後三時

聖言に曰ふ「神は最も弱き者、小さき者、及び愚なるものに眞理を覺し玉ふ」とあり。大本神諭に曰く「生れ赤兒の混りの無い心にならねば神の誠の大精神は判らぬぞよ」と示されあり、佛敎には「難問する所あれば小乗の法を以て答えざれ、但大乘を以て爲に解脱して一切種智を得せしめよ、云々」菩薩は常に安穩ならしめむことを樂ひて法を説け、云々」とあり。大乘に非らざれば覺り得ざる如き學盲者は只その種智を得るに過ぎない。決して天國の愛と善、信と眞との光明靈德に浴する事は出來ないものである。安穩にして法を説けとは老幼婦女子にも解し易きやう極めて卑近の例を引き、平易簡單にして直ちにその精神を諒解し得らるるやうに説けとの意である。この物語も亦神示に従ひ可成的平易なる文句にて説き、卑近なる言語を使用して神明の深き大御心を悟らしめむと努めたるを以て、學者紳士の讀物としては適當しないものたるは素より覺悟の前である。一人なり共多數の人々に解し易く徹底し易からしめむと欲する至情より口述せしも

のであります。又またほんものがたり本物語はどくしや讀者をけつ決して今日こんにちの所謂いはゆる知識階級ちしきかいきふにもと求めやうとするの
では有ありませぬ。愚者ぐしや無學むがく者弱者じやくしやのため編著へんちよしたものであります。

大正十二年三月卅日

第一篇 玉石混淆

第一章 神風〔一四七六〕

青葉を渡る夏風の

清き音彦宣傳使

心の玉國別司

御空も清き眞純彦

伊太彦司を伴ひて

稲田のそよぐ田圃道

彼方此方に花蓮葉

所斑咲き亂れ

いと芳しき香をば

送り來るぞ床しけれ

御伴の神と仕へたる

三千彦司の行方をば

尋ねむものと三人連れ

草鞋を濡らす田圃道

彼方此方と飛び越へて

やうやう來るテルモンの

山の麓ふもとに着つきにけり
空打そらうち仰あふぎ眺ながむれば

テルモン山ざんの中腹ちゅうぶくに
靉たなび靄わたき渡る紫むらさきの

八重やへ棚雲たなぐもは神人しんじんが
集あつまり居ゐます象徴しやうぢやうぢか

但ただしは神かみの出現しゆつげんか
何なには兔ともあれバラモンの

大黒主おほくろぬしの發祥地はつしやうち
つと立たち寄よりて様子やうすをば

探さぐらむものと勇いさみ立たち
爪つまさき先あが上ありの山道やまみちを

平野へいやを後あとにスタスタと
息喘いきはづまして登のぼりつつ

アンブラツク川がはの邊迄ほとりまで
やうやく進すすみ來きたりけり

ここにも一ひとつの平野へいやあり
數多あまたの稲田いなだは東西とうざいに

いと廣ひろらかに展開てんかいし
所々ところどころに蓮花はぢすばな

そよ吹ふく風かぜに翻ひるがへり
天國てんごく淨土じやつどの高原かうげんを

進すすむが如ごとき思おもひなり
こここゝに三み人の宣傳使せんでんし

アンブラツク川がはを打涉うちわたり
いよいよ靈地れいちに着つきければ

俄にはかに起おこる鬨ときの聲こゑ
聞きこゆる間まもなく數百すひやくの

荒くれ男が現はれて

棍棒打振り石を投げ

三人に向つて攻め来る

其光景ぞ凄じき。

玉國別一行はアンブラック川を渡り一二丁前進する折しも悪酔怪の會長ワツク

スは數多の無頼漢を引率し、

ワツクス「三五教の魔法使三千彦の同類現はれたり。今此時彼を亡ぼさざれば此

聖地は三五教に蹂躪されむ。今が千騎一騎の場合だ。進め進め」

と采配振つて下知をなす。

岩窟の中へ閉ぢ込められて居たエキス、ヘルマンは之亦驢馬に跨り味方を三方

に配置し、歌を歌つて僅か三人の敵に向つて潮の如く鶴翼の陣を張り遠巻に巻い

て居る。そして小石を掴んで各自に投げつける。三人の身邊には石の雨篠つく如

く寄り來り其危険名状すべからず。玉國別一行は突き出た巖の下陰に身を忍び、

一生懸命に天津祝詞を奏上し、天の數歌を聲を揃へて唱へ上げた。一同は遠巻に

巻き乍ら相變らず石の雨を降らして居る。伊太彦は尖つた石礫を向脛に負はされ

アツと云ふより早くその場に倒れた。此有様を見た敵は益々勢を得、一生懸命に雨霰と石を投げつける。玉國別は泰然自若として頻りに數歌を奏上して居る。眞純彦は伊太彦を介抱し乍ら岩陰に伊太彦の體を忍ばせた。數百人の荒くれ男は太鼓を拍ち、擦鉦を鳴らし乍ら、チクチクと引網の如くに近寄り来る。伊太彦は餘りの痛さに顔を顰めて聲をも得さず苦しんで居る。敵はおひおひ迫つて來た。流石の玉國別も進退維谷まり運を天に任し、眞純彦の背に伊太彦を負はせ危険を犯して敵の重圍を解き、血路を開いて逃げむと覺悟を極め敵中に野猪の如くに突進した。衆寡敵せず、三人は瞬く間に打据ゑられた。かかる處へ宙を飛んで驅け來る猛犬スマートは、『ウー、ウワツ　ウワツ』と二聲三聲叫ぶや否や、スマートに荒肝を取られた一同は、『強敵ムんなれ』と三人を捨て驀地に館をさして兵士の應援を受けむと驅けり行く。

玉國別はスマートに向ひ一應謝辭を述べ、且頭を撫で背を撫で等して好意を謝して居る。スマートは嬉しげに尾を振り乍ら、伊太彦の傷所を見るより直に擦り寄つて傷所を嘗めた。忽ち血は止まり苦痛は頓に去り、漸くにして立つ事を得た。

これよりスマートと共に三人は神館を指して意氣揚々と宣傳歌を歌ひ乍ら急坂を登り行く。逃げ去つたるワックスは館の前のバラモン軍の前に現はれ、頭を下げ手をつき涙を流して云ふ。

ワックス「バラモン軍の軍人様、お願いがムいませす。只今三五教の魔法使が又もや三人現はれました。さうして猛悪なる狂犬が此靈地に横行しますれば何卒貴方等のお力を以て退却を、……否殲滅する様お取計らひを願ひませす。此神館は先日來三五教の魔法使が只一人忍び込み種々雑多の悪事を致し、吾々バラモン信者を苦しめる事、一再ならず、然るに今亦三人の魔法使がアンブラック川を涉り、此方へ参りました以上は如何なる事を仕出かすか分りませぬ。事の大きくならぬ中、何とか軍隊の力を以て殲滅させて下さい。吾々悪酔怪員一同はお後に従ひ充分の應援を致します」

バラモン軍の軍曹イールは直ちに承諾の旨を答へ、ニコラスの承諾も得ず、五十の軍人を引き率れ、ワックスの一隊と共にテルモン山を下り、アンブラック川の邊に向ふ事となつた。

伊太彦は道々行軍歌を歌ひ乍ら進み行く。
伊太彦の歌、

伊太彦 神が表に現はれて 善と悪とを立分ける

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

只何事も人の世は 直日に見直し聞き直す

三五教の宣傳使 玉國別に從ひて

心の色も眞純彦 足の傷所も伊太彦が

神の使のスマートに 危き處を助けられ

バラモン信徒の重圍をば 苦もなく解いて進み行く

ああ惟神々々 神の力の偉大なる

恵みの露のいや深き 今更乍ら有難く

感謝の涙に咽返る 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

誠まことの力ちからは世よを救すくふ

誠まことの道みちの宣せんでん傳し使し

誠まこと一ひとつを守まもり行ゆく

大和やまと男子をとこのこの益ます良す夫らに

敵てきする曲まがのあるべきぞ

進すすめよ進すすめいざ進すすめ

テルモン山ざんは高たかくとも

敵てきは幾いく萬まんありととも

何なにか恐おそれむ三あ五なの

誠まことの道みちの宣せんでん傳し使し

神かみの試ためしに會あひ乍ながら

心こころを磨みがき魂たまを練ねり

獅し子し奮ふん迅じんの勇ゆう氣きをば

完う全まに委つ曲ばらに發はつ揮つきして

神かみの依よさしの神かむ業わざに

仕つかへまつらむ吾わが使し命めい

アア勇いさましし勇いさましし

夏なつ野のを渡わたる涼りやう風ふうは

吾わが身みの汗あせを拭ぬぐひつ

蓮はちすの花はなの香かをば

交まじへて横よこぎる芳かんばしさ

山やま時ほととぎす鳥す遠をち近こちに

姿すがたを隠かくし啼なき立たてる

神かみの教をしの三み千ち彦ひこが

行ゆく衛ゑを尋たづね探さぐらむと

吾わが師しの君きみに從したがひて

廣ひろ野のを渡わたり川かはを越こえ

此こ方なたに進すすむ折をりもあれ

俄にはかに聞きこゆる関とぎの聲こゑ 何事なにごとならむと岩いは蔭かげに
 潜ひそむ間まもなく四方しほうより 現あらはれ來きたる敵てきの影かげ
 棍こんぼう棒ぼう打うちふり石いしを投なげ その勢いきほひの凄すさまじさ
 石いしの礫つぶては雨あめと降ふり 進すすまむ由よしもなき儘ままに
 岩いはをば楯たてに戦たたかへど 衆しゅう寡くわ敵てきせず吾わが脛すねは
 敵てきの矢や玉たまに破やぶられて 無む念ねん乍ならも打うち倒たふれ
 痛いたみに堪たへず苦くるしめば 弱よわ目めにつけ込こむ敵てきの勢せい
 チクリチクリと近ちか寄りて 早はやくも危き殆たいに瀕ひんしけり
 眞ます純みの彦ひこに助たすけられ 吾わが師しの君きみと諸もろ共ともに
 血け路つろを開ひらき進すすまむと 群むらがる敵てきの眞ま中なかに
 危き険けんを犯をかして飛とび込こめば 何なん條でうもつ以もつて堪たまるべき
 瞬またたく間うちに倒たふされて 無む念ねんの齒は嚙がみなす時ときゆ
 現あらはれ來きたるスまーとが 天てん地ちも揺ゆるぐ唸うなり聲こゑ
 その言こと靈たまに辟へき易えきし 流さ石がの敵てきも雲くも霞かすみ

吾等を見捨て逃げて行く
アア惟神々々

神の力の偉大さよ
吾等は神に何事も

任せまつりし身なれども
油斷大敵中々に

心の綱は弛め得ず
四邊に眼配りつつ

神の館を目當とし
スマートさまと諸共に

何處々々迄も進むべし
神は吾等と俱にあり

神に仕へし此體
假令命は失するとも

神素盞鳴の大神の
任さし玉ひしメツセージ

盡さにや置かぬ益良夫の
心の鏡はテラテラと

三千世界に輝きて
如何でか曇らむ大和魂

アア勇ましや勇ましや
大黒主が發祥の

靈地と高く聞えたる
テルモン山の神館

一人も残さず三五の
誠の道を説き諭し

歸順させねば措くものか
進めよ進めいざ進め

又もや敵の現はれて

勢ひ猛く攻め來とも

神の恵みに包まれし

吾師の君やスマートの

あります限り幾百の

強き仇をも恐れむや

ああ面白し面白し

神の恵みを願ぎ奉る

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

誠の力は世を救ふ

ああ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と歌ひ乍ら無人の野を行く如く、ドシドシと館を指して進み行く。

宮町の十字街頭なる鐘路に着いた。俄に左右の家の中より矢を射かけ、三人は

進退維谷まつて街頭に佇立し、一生懸命に數歌を歌つて居る。前方よりはバラモ

ンの兵、長槍を扱き乍ら進み來る。後よりは老若男女がワイワイと鬨を作つて押

寄せ來る。スマートは「ウワツ ウワツ」と吠猛る。その聲は狼の如く戸障子を

震動させ、一同の肝を麻痺させ、俄に矢の玉はピタンと止まつた。鬨の聲も一時

聞えなくなつた。バラモン軍の兵士は何思ひけむ、館の馬場をさして一目散に駆けり行く。

スマートは何處ともなく又もや姿を隠した。玉國別一行はバラモン軍の後を追ひ進み行く。

ワックスは又もや驢馬に跨り大音聲を張り上げ悪酔怪員を鞭撻して、三人の後を追つ駆け来り、馬場の前にて大衝突を初め遂には敵味方の區別もなく入り亂れ、バラモン軍とワックスの率ゆる悪酔怪員との争鬪となつて了つた。

忽ち阿鼻叫喚の聲、劍戟の音、見るに忍びざる惨状を呈した。玉國別は二人の宣傳使と共に表門を悠々と、此争ひを後に眺めて進み入る。スマートは何處ともなく現はれ来り、門口より一生懸命に「ウワツ　ウワツ」と喚き立てて居る。

（大正一二・三・二八　舊二・一二　於皆生温泉濱屋　北村隆光録）

第二章　多數尻（一四七七）

奥の一閒には小國姫、ニコラス、三千彦、其外一同が打解けて神徳話に餘念なく、茶を啜り乍ら懇親を結んでゐる。

かかる處へ門前俄に騒がしく猛犬の叫び聲、合點行かぬと何れも耳を欬てたが、三千彦は一同に向ひ、

三千「皆さま、どうやら悪酔怪員の暴動と見えます。私が一寸調べて参りますから御休息して居て下さいませ」

といひ捨てて表に駆け出す。

ニコラスはハンナに命じ三千彦と共に表門に向はしめた。表門に行つて見れば三千彦が晝夜念頭を離れざりし戀しき師の君玉國別、良友の眞純彦、伊太彦が莞爾として門内に潜り来るにパツと出會した。三千彦は倒れぬばかりに且つ驚きかつ喜び、アツと云つたきり暫らくは言葉も出なかつた。

伊太「やア、お前は三千彦ぢやないか。俺等はお師匠様と共に、どれ丈けお前を探して居つたか知れないのだ。處もあらうにバラモン教の聖場に納まりかへつて居るとは合點が行かぬ。これは何か様子があるのだらう。さア早くお師匠様に申

上げぬか」

三千彦は胸撫で下し、涙を流し乍ら、

三千「御師匠様、よう無事で居て下さいました。貴方の所在を尋ねむものと、バ

ラモン教の聖場に入り込み、種々雑多と苦勞を致しました。斯様な所でお目にか

かるとは全く神様の御引合せでムいます。さア奥へお通り下さいませ」

玉國「あ、三千彦殿、まア結構だったな。随分吾々三人はお前の身の上を案じて

居ただ。只今無事な顔を見て、こんな嬉しい事はない。然し此通りバラモン軍

と無頼漢との同士打ちが初まつてるが、もとは吾々一行に對しての挑戦であつた

が、何時の間にか相手が變つて味方の同士打ちとなつた。實に氣の毒だから之を

一先づ鎮撫せなくてはなるまい。緩り奥で休息する譯にも行かぬぢやないか」

三千「決して御心配なさいませぬ。スマートさまに一任して置けば大丈夫ですよ。

アハハハハ」

眞純「うん、そらさうだ。吾々四人の宣傳使よりも餘程神力が備はつて居るのだ

からな、四足だつて餘り馬鹿に出来ぬぢやないか。吾々はスマート大明神のお蔭

で命が助かつたのだ。アハハハハハ
と笑ひ乍ら三千彦に案内されて奥の間を指して進み入る。

ハンナは部下の兵士が無頼漢と入り亂れて戦つて居るのを見逃す譯にも行かず、直ちに驢馬に跨り兩方混戦の中に駆け入つて聲を囁らし、「鎮まれ鎮まれ」と厳しき下知を傳へた。

此聲を聞くより敵味方ともに水を打つたる如くピタンと戦闘は停止された。ス
マートは忽ち駆け來り、ワックス、エクス、ヘルマン、エルの四人を探し索めて
引倒し、ハンナの前に一々引き來りワンワンと叫んで、之を縛れよとの意を示し
た。ハンナは四人を手早く縛り上げ、馬場の前の大杭にシカと縛りつけた。弱き
を挫き強きに従ふ惡酔怪員は、會則を遵守して一人も残さず、コソコソと己が家
路に歸り行く。トンクは驢馬に跨つた儘、十字街頭の鐘路に現はれ、臆病風に誘
はれた數多の老若男女を集めて一場の訓戒演説をはじめて居る。
トンク「御一同様の中には惡酔怪員も水平怪員も、其他町内有志諸君も居られま
すが、よくまあ會則を遵守し、一人も残らず退却して下さいました。實に幹部た

る吾々は、諸君の行動に對し、欣幸措く能はざる所でムいます。今日迄は神館には只一人の魔法使三千彦と云ふ大先生、並びに求道居士の二人の魔法使、それ故吾々一同に比較すれば先方は弱者でムいました。併し乍らもはや今日は新に三人の魔法使の大先生が御出現遊ばされ、又武器を携へたニコラスキャプテンが五十の兵士を引率して館を固くお守りになり、三五教の魔法使と同盟遊ばした上は、忽ち地位轉倒して先方は強者となり、吾々は弱者の地位に立たねばならなくなりました。加ふるにスマートと云ふ、あの猛犬大明神は中々の強者でムいます。併し乍ら弱者は弱者として獨立する譯にはゆきませぬ。會則にある通り、弱きを挫き、強きに従ふのが吾々の本領でムいます。それ故吾々一同は神館に至り心から歸順致し、馬場に繋ぎあるワックス等に大痛棒を加へ天晴融通を利かし、三五教及びバラモン軍に歸順の誠を現はし、身の安全を圖るを以て第一と心得ます。皆さまの御意見は如何でムいますか」

と呼はつた。悪酔怪員を初め、その他の連中はトンクの詭辨に何れも感心し、一も二もなく手を拍つて賛意を表した。トンクは此態を見て威猛高になり、

トンク「皆さま、早速の御承知、トンク身にとり満足に存じます。就てはワツクスの會長を皆様より免じ、新に強者を會長に任命されむ事を希望致します。その強者とは申す迄もなく私はトンクだと思ひます。トンクに御賛成の方は手を拍つて下さい。不賛成の方は背を向けて尻を捲つて下さい。何事も多数決でムいますから」

手を拍つもの半分、尻を捲つて背をそむけるもの半分、トンクは馬上より之を眺めて、

トンク「皆さま、手を拍つて下さる方が半分、尻を捲つて反対を表する方が半分と見えます。これでは「ハンケツ」がつきませぬ。何とか、も一度考へ直して頂き度うムいます」

此聲と共に今度は一人も残らず黒い尻を捲つてトンクの方に向けた。さうして群集の中より「即ケツ否ケツ」と叫ぶものがある。トンクは馬上より齒ぎしりをし乍ら、

トンク「エー、尻太異な事だな」

斯かる所へ驢馬に跨りチヨク チヨクと此場に現はれ来たのはタンクであつた。タンクはトランクの口を開き、金銀の小玉を掴んでは投げ、掴んでは投げ、タンク「皆さま、私が悪酔怪の怪長の候補者でムいます。今黄白を斯くの通り撒き散らしますから十分拾得競争をやつて下さい。拾得された方は其方の所有でムいます。其代り神聖なる一票を此タンクにお與へ下されむ事を希望致します」
と掴んでは投げ、掴んでは投げ、前後左右に駒を進めて残らず萬遍なく撒き散らして了つた。トランクも手早く馬から下り、矢庭に金銀の小玉を拾つては懐中につつ込み、再び馬上につつ立ち選挙の様子を觀望して居る。タンクは全部黄白を撒き散らし、もはや缺けたカンツも無くなつて居た。タンクは馬上より雷聲を張り上げ、
タンク「皆さま、私を怪長に選挙して下さいませいか。賛成の方は手を拍つて下さい。萬一不賛成の方は尻を捲つて尻を一發手向けて頂き度い。何程お尻を捲られても、尻の出ない方は賛成と認めます」
とうまく孫呉の屁法で豫防線を張つて了つた。ここに半分は手を拍ち半分は尻を

捲まくらず、手ても拍うたず、茫ぼう然ぜんとして控ひかへて居ゐる。タンクは怪訝けげんな顔かほして馬ば上じやうより様やう子すを窺うかがつて居ゐた。此この時ときタンクはタンクの撒まいた金銀きんぎんを馬ば上じやうより見みせびらかし乍ながら、タンク「皆みなさま、最前さいぜん手を拍うつて下くださつたお方かたは私わたしの贊成さんせい者と認みめます。今いまタンクさまに對たいして手てを拍うたず、尻しりを向むけない方かたは中立ちゅうりつ者と認みめます。その方かたに對たいして此この黄白くわつぱくを撒まざる考かんがへですから贊成さんせいの方かたは手てを拍うつて下ください。今いまここで撒まき散ちらしますと、二重にぢう取りされると折角せつかくの贊成さんせい者しやの手てに入いりませぬから、私わたしの宅たくでお渡わたしませう。少すくなくとも千兩せんりやうの金かねはありますから百ひやく人に分ぶん配ぱいしても十兩じふりやうづつは確たしかでムいます。さア一いち、二に、三さんで願ねがひます」

今こんど度は如何どうしたものか、一人ひとりも残のこらず尻しりを捲まくつて口屁くちべをプウプウと鳴ならして居ゐる。中なかには尻けつから黒くろい湿しめつぱい輪廓りんくわくの不ふ完全かんぜんな煙けむりを吐はき出だす奴やつも少すこしはあつた。タンク「然しからば拙者せつしやが副怪長ふくくわいちやうとなり、タンクさまを怪長くわいちやうに選えらんで下ください。さうすれば雙方さうほう共顔ともかほが立たちますから」

大勢おほせいの中なかから、

「オーイ、タンク、貴様きさまの今持いまもつてる金かねは皆みんなタンクさまの撒まいた金かねだ。副怪長ふくくわいちやうに

任じて欲しけりや皆バラ撒くのだ。そしたら副怪長にしてやろう」
トंक「成程然らば皆さまに撒き散らしますから、よう拾はない人は運命だと締めて下さい。兔も角半數者以上の賛成があれば可いのです」
と懐より一つも残らず取り出し、前後左右にまき散らして了つた。此潮時を見濟まし、トंकは大音聲、
トंक「皆さま、私を怪長に選んで下さつた事を有難く感謝します。何と云つても運動費が無くては今日の世の中は駄目です。墓標議員の事故議員、妥協議員にならうと思つても、五萬や十萬の金が入る時節ですから、無一文で議員にならう等とは餘り蟲が良すぎます。私は副怪長なんかは必要はないと思ひます。官の爲人を選むのではなく、人の爲に官を作ると云ふ事は最も不利益且つ不經濟、秩序紊亂の端緒を開くもの私は副怪長の必要はないと思ひます。皆さま、必要と認めの方は手を拍つて下さい、不必要と認めた方は、も一度尻を捲つてトंकさまの方へ見せて下さい。それを以て貴方等の意志を明かに致します」
一同は一人も残らず眞黒の尻を捲つてトंकの方へ尻をさし向け、御叮嚀にピ

シヤ ピシヤと黒い臀肉を叩いて見せた。トシクはスゴスゴと驢馬の尻を無性矢鱈に叩き、業腹煮やして何處ともなく姿を隠した。

これよりタンクは大勢の前に立ち凱旋歌を歌ひ乍ら神館をさして練り込んで行く。大勢は擦鉦を叩き、歌に合せて拍子をとり跟いて行く。

叩ても悪酔怪員は

弱きを挫き強者には

恐れて従ふ卑怯者

平安無事が第一だ

強い奴にはドツと逃げ

弱い奴にはドツと行け

これが軍の駆引だ

チャンチキ チャンチキ チャンチキチン

いやいや軍のみでない

萬事萬端その通り

どんな商賣致しても

小さい店を踏み倒し

小さい資本の會社をば

片ツ端から押し倒し

大きな奴には尾を巻いて

暫らく忍び時を待ち

いつとはなしに強くなり

大きくなつたその時に

己おのが所信しよしんを貫徹くわんてつし

世界せかいの強者きやうしやと崇めあがられ

優勝劣敗いうしやうれつぱい経たてとなし

弱肉強食じやくにくきやうしよくぬき緯きとして

此世このよを渡わたるが利口者りこうもの

チヤンチキ チヤンチキ チヤンチキチン

神かみの館やかたに現あれませる

三五教あななひけうの魔法使まはふつかひ

三千彦みちひこさまは弱よわいとは

云いへど其實そのじつ強つよい人ひと

神變しんべん不思議ふしぎの魔法まはふをば

使つかつて吾等われらを苦くるしめつ

何處どこ々々こ迄までもやり通とほす

こんなお方かたに逆さからうて

どうして吾身わがみが立たつものか

チヤンチキ チヤンチキ チヤンチキチン

弱よわきを挫くじき強つよきをば

助たすける吾々われわれ怪員くわいゐんは

ワックス、エクス、ヘルマンや エルの司つかさを虐しへたげて

惡醉怪あくすゑくわいの至誠しせいをば

現あらはし館やかたに立向たちむかひ

そこはそれそれ都合つがふよく

頭あたまを下さげて胡麻ごまを摺すり

身みの安全あんぜんを圖はかるのだ

こんな神謀鬼策しんぼうきさくをば

もしもトンクが怪長くわいちやうなら どうして捻ひねり出だされよか

智慧ちゑの袋ふくろのタンクさま

神謀しんぼう鬼策きさくの妙案めうあんは

胸むねの袋ふくろにタンク山さんに

藏しまつて△ごまるぞ皆みなさまよ

心こころを丈夫ぢやうぶに持もつが良よい

チヤンチキ チヤンチキ チヤンチキチン

早はやくも馬場ばんばに近ちかづいた

皆みなさま聲こゑを打揃うちそろへ

三五あななひけつ教けつやバラモンの

神かみの司つかさの萬歳ばんざいを

ここから唱となへ上あげませう それに續つづいてスマートの

犬いぬ大明神だいまやうじんの萬歳ばんざいを

三唱さんしやうし乍ながら進すすみませう

チヤンチキ チヤンチキ

チヤンチキチン ああ惟かむながらかむながら神かみ々々

叶かなはぬから叶かなはぬから

目玉めだま飛とび出だしましませよ

朝あさ日は照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも

強つよきを助たすけ弱よわきをば

挫くじくが天地てんちの道理だうりぞや

大魚たいぎよは小魚せうぎよを吞のみ喰くらひ

大獸たいじうは小獸せうじうを噛かみ喰くらひ

強者きやうしやは弱者じやくしやを虐しへたげる

富者ふうしやは貧者ひんしやをこき使つかひ

役人やくにんさまは平民へいみんを

奴隸どれいの如ごとく足あしにかけ 腮あごをしやくつて使つかふのだ

これが天地てんちの道理だうりぞや 必かならず迷まよふぢやならないぞ

チヤンチキ チヤンチキ チヤンチキチン

と勝手かつてな熱ねつを吹ふき悠々いういうとして驢馬ろばに跨またがり、先頭せんとうに立たち早くも門内もんないに進すすみ入いる。

(大正一二・三・二八 舊二・一二 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第三章 怪散くわいさん〔一四七八〕

清きよき心こころの玉たま國くに別わけは 夏なつの御空みそらの眞純ますみひこ彦

足あしを傷きずづく伊太彦いたひこの 二人ふたりの弟子でしを伴ともなひて

天津日影あまつひかげもテルモンの 珍うづの館やかたの表門おもてもん

神かみの使つかひのスマートに 守まもられながら進すすみ入いる

老らう若じやく男女なんにょの叫さけび聲こゑ 矢やさ叫けびの音ねに驚おどろいて

立たち現あらはれし三み千ち彦ひこは 表おもての門もんの入口いりぐちに

焦こがれ慕したふた師しの君きみや 二ふたり人の友ともに廻めぐり會あひ

嬉うれしさ餘あまり胸むね迫せまり 何なんの應いら答へも泣なく許ばかり

漸やうやく心こころ取とり直なほし 奥おくの一ひと間まに静しづ々と

三み人たりを伴ともひ進すすみ入いる 小をくに國に姫ひめを初はじめとし

デビスの姫ひめやケリナ姫ひめ バラモン教けうの神かむつ司かさ

ニコラスキャプテン初はじめとし 求きう道だう居う士こじやヘル司つかさ

マリス、リーベナ、ルイキン、ポリト バットを初はじめ四し五ご人にんの

僕しもべと共に控ひかへ居ゐる 小をくに國に姫ひめは三さん人にんの

姿すがたを見るみより喜よろこびて 其その坐ざを下くだり手てを支つかへ

よくこそお出いで下くださつた 貴あなた方は三みち千ち彦ひこ宣せん傳でん使し

救すくひの神かみの師し匠やう様さま まあまあこれへと請しやうずれば

玉國別は目禮し 其言の葉に従ひて

設けの席につきにける。

小國姫「此處はバラモン教の神館、大黒主様の發祥の地、其お館を守る吾々夫婦、いろいろと禍の神に見舞はれ、煩悶苦惱の最中へ貴方のお弟子三千彦様がお出下さいまして、吾々一同の難儀をお救け下さいました。其膽力と義侠心に對し、感謝の涙を零して居ります。何卒今後はお見捨てなく宜敷くお願い致します。又、この求道居士は元は、バラモン教のカーネルさま、治國別様のお言葉に感じ比丘となり三五教のお道をお開きなさる道すがら、私の娘二人の危難をお救ひ下さつた御恩人でムいます、何ともお禮の申やうがムいませぬ」

玉國「それはそれは、結構なお神徳を頂かれました。お目出度う存じます。そして貴方は求道居士様ですか、よくまあ入信なさいました」

求道「ハイ、私はバラモン軍のカーネル、エミシと申すもの、鬼春別、久米彦將軍に従ひ浮木の森迄進軍致し、河鹿峠の味方の敗戦によりビクの國迄退陣致し、

此處を又立ち出て、猪倉山の岩窟に要塞を構へ、難攻不落と誇つて居る所へ治國別様がお越になり、神様の道をお諭し下さいましてから、翻然として悟り、今は三五教の信者となり、御神業に奉仕さして頂いて居ます。足はぬ某、何卒厚き御指導をお願ひ申ます」

玉國「お互に手を引き合つて、御用に立てさせて頂きませう」

求道「此處に見えて居る七人の方は、バラモン軍の、ニコラスと云ふ、キャプテンでムいます、其他の六人は何れも下士官でムいますが、鬼春別將軍の變心及び其後の模様を調査すべく、先刻この館に御出張になり、吾々の話を聞いて、漸く贊成下さつた所です。何卒宜敷く御指導を願ひ上げます」

玉國「何分お互に宜敷く願ひませう。ああ、貴方がニコラス様でムいますか。や、御一同様初めてお目にかかります。世の中には敵もなければ味方もムいませぬ、同じ神様に育まれて居る吾々人間は互に仲よくせねばなりませんア」

ニコラス以下六人はハツと頭を下げ、

「何分宜敷くお願ひ申ます」

と心の底より挨拶をする。斯る所に門前俄に騒がしく擦鉢の音、大聲に歌ふ聲聞え来る。三千彦はツと立つて何事ならむと表門に出た。スマートは嚴然として門を守つて居る。惡酔怪長タンクは先に立ちて進み來り、三千彦に向ひ搦手をしながら、米搗バツタのやうにピヨコピヨコと腰を折り頭を下げ、媚を呈し乍ら、タンク「エエ、これはこれは、三五教の大宣傳使、神力無雙の三千彦様でムいませるか。まアよく遙々と神館にお出下さいまして、館の危難をお救ひ下さり、これの館の黒雲を除き、天下泰平にお治め下さいました段、宮町一同は申すに及ばず、國民一同の感謝措かざる所です。私は天下の無賴漢、イヤ、オツトドツコイ無賴漢を懲す、惡酔怪の怪長タンクと云ふ「ケチナ」野郎でムいます。怪員一同に代り、貴方の御高德を感謝する爲に罷りつん出しました。スマート様にもそれはそれは何とも云へぬ御盡力に預りまして有難う存じます。ワックス、ヘルマン、エキス、エルの惡人輩が集まりました、如意寶珠の玉を盗むやら、家々の寶を盗むやら騒動をおつ始め、どうとも斯うともならない難儀でムいましたが、貴方様のお出以來、風塵治まり、天下泰平の端緒を得ましたのは、私等の拵舞措く能はざる

所ところです。何卒なにとぞ吾々の至誠しせいをお認めみと下さいまして、今後こんご御鼻肩ごひいき下さるやうお願ねがひ致します。此この通り數多あまたの町民ちやうみんが参まゐりましたのも皆みな、貴方あなたの御高德ごかうとくを感謝かんしやせむ爲ために参上さんじやう致いたしましたので、何卒なにとぞ宜敷よろしく可愛かあいがつて頂いたき度たうごままします。三千みち、ヤア夫それは結構けつこうだ。吾々われわれに對たいする誤解ごかいが解とけましたかな。今後こんごは互たがひに手てを引ひきやうて、お館やかたのため、お國くにのため協け力りよく一いつ致ち、誠まことを捧ささげられむ事ことを祈いのります。然しかし乍ながら、かう大勢館おほぜいやかたへ入はいり込こまれましたは小國別様をくにわけさまも御病中ごびやうちうなり、御迷惑ごめいわくをせられませうから、門前もんぜんの馬場ばんばにてお目めにかかりませう。』

とスマートを引き連れ門を出で、階段を下り草青き馬場に出立ち見れば、五十の兵士は列を正し、ワックス外四人を縛したまま警護して居る。軍人側と、惡酔怪側とはいつしか和睦が出来たと見えて互にニコニコ笑つて居る。タンクは再び驢馬に跨り、ワックス外三人の前に馬を留め大音聲にて演説を初めかけた。三千彦は麗しき赤、白、黄、紫のデリケートの花の咲き満ちた青芝の上に腰を下ろし、スマートの頭を撫で乍ら、ニコニコとして控へて居る。

タンク□ そもそも此處ここに繋つながれし テルモン山さんの神館かむやかた

荒あらし廻まはりしワツクスや 其外そのほか三人みたりの惡漢わるものは

大黒主おほくろぬしの御寶おんたから 如意にょいの寶珠ほうしゆを横奪わうだつし

館やかたの主あるしを苦くるしめて ギウギウ云いはせ吾戀わがこひの

野望やばうを甘うまく達たつせむと 所在あらゆる手段しゆだんを廻めぐらして

惡あくの限かぎりを盡つくしたる 極惡ごくあく無道ぶだうの癡漢しれものぞ

三五教あななひけうの神使かむつかひ 三千彦みちひこさまの威ゐに打うたれ

如何いかんともする術すべもなく 首くびも廻まはらぬ苦くるしさに

魔法使まはふづかひと布令ふれ廻まはし 吾々われわれ一同いどう町民ちやうみんを

甘うまく偽いつはり暴動ばうどうを 起おこさせたるぞ憎にくらしき

此宮町このみやまちの町民ちやうみんは テルモン山さんの靈地れいちをば

堅磐かきはと常磐ときはによく守まもり 天地てんちの神かみの御惠みめぐみに

報むくひむ爲ために赤誠まじこころを 力ちから限かぎりに盡つくすのみ

知らぬが佛ほとけの町民ちやうみんは 家令かれいの悴せがれワツクスが

企みの罫におとされて

神力無雙の神人に

刃向かひ奉りし愚さよ

悪に長けたるワックスは

吾身の罪を蔽はむと

茲に一計案出し

悪酔怪を組織して

弱きを挫き強きをば

助けむものと主張しつ

數百餘人の團體を

造りて誠の神人を

惱まし奉り神館

占領せむと企みたる

其惡計ぞ怖ろしき

天罰忽ち報ひ來て

己が率ゆる怪員に

手もなく體を縛られて

これの馬場に萬世の

恥を晒すぞ可笑しけれ

ああ惟神々々

誠の神はいつ迄も

惡の企みを許さむや

吾等はタンクと云ふ男

六百人の町民に

やつと選まれ長となり

今又茲に惡酔怪の

頭とおされ町民を

代表なして三五の

神かみの司つかさの御前おんまへに 誠まことの心こころを顯彰けんしやうし

御國みくにの爲ために盡つくさむと 衆しゆうを率ひきつれ來きたりたり

赦ゆるさせたまへ惟神かむながら 神かみかけ念ねんじ奉たてまつる

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

唯何事ただなにごとも人ひとの世よは 直日なほひに見直みなほせ聞きき直なほせ

身みの過あやまちは宣のり直なほせ 三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

三千彦司みちひこつかさの前まへなれど これに繋つなぎし四人連よにんづれ

これこのの聖地せいちを朝あさ夕ゆふに 搔かき亂みだし行ゆく曲者くせものぞ

必かならず許ゆるし給たまふ無なく 嚴きびしき答むちを加くはへつつ

これこのの聖地せいちを追おひ出いだし 懲こらしめたまへ惟神かむながら

六百ろくびやくにん人にんになり代かはり 更あらため願ねがひ奉たてまつる

ああ惟神かむながらかむながら々々 御靈みたま幸倍さちはへましませよ

かかかる惡魔あくまの聖場せいぢやうに 姿すがたを見みする其内そのうちは

如何いかなる神かみの御惠みめぐみも 如何いかなる誠まことの御教みをしへも

如何いかで開ひらけむ常闇とこやみの
世よは追おひ追おひと曇くもるのみ

ああ願ねがはくば三千彦みちひこの
誠まことの教をしへの宣せんでん傳し使し

吾等われらの願ねがひを逸いち早はやく
聞きき取とりたまひ片時かたときも

早はやく聖地せいちを追おひ出いだし
これの靈地れいちの禍わざはひを

除のぞかせ給たまへと願ねぎまつる
ああ惟かむながら神かむながら々々

御靈みたま幸さち倍はましませよ」

と歌うたをもつて演説えんぜつに代かへ、且かつ三千彦みちひこに向むかひ、是等これら四人よにんの惡黨あくたうを一いち時じも早はやく此聖このせいと
場やうより追放つめほうされむ事ことを祈いのつた。惡醉あくすめくわい怪員かいん一同いちどうは、一齊いつせいに手てを打うつてタンクの説せつに
賛成さんせいの意いを表へうした。三千彦みちひこは歌うたをもつて之これに答こたふ。

三千彦みちひこ 世よは常闇とこやみとなり果はてて
惡魔あくまは天下てんかを横行わうかうし

吹ふき來くる風かぜは腥なまくさ
絶たゆる間まのなき人馬じんばの音ね

拂はらはむよしもなきままに
難なやみ苦くるしむ宮町みやまちの

老若男女の心根は

今更思ひ知られけり

テルモン山の峰清く

蓮華の花の四方八方に

芳香薫じ夏風に

揺られて御代の泰平を

謳へど神の御館

日毎夜毎に憂愁に

包まれたまひ神柱

小國別や姫命

其外二人の乙女達

其身の不覺を歎きつつ

家令の悴ワツクスが

醜の猛びに敵し得ず

持ち倦みます時もあれ

神の御言を蒙りて

救ひの神と現はれし

三千彦司は身を碎き

心を痛め種々の

難みに會いて漸うに

神の館を包みたる

醜の雲霧吹き拂ひ

旭の豊坂登ること

漸く生れ代りけり

ああ惟神々々

神の御稜威の著く

恵の露の深きをば

喜び祝ひ奉り

玉の所在も漸くに
現はれまして神館

上を下へと歡ぎつつ
元の姿となりけり

さはさりながら團體の
長とあれますタンクさま

惡酔怪の綱領は
弱きを挫き強きをば

助くるよしに聞き及ぶ
惡魔に等しき團體は

天地の神の御心に
背反したる暴擧ぞや

いと速に改めて
此團體を解散し

誠一つの三五の
教の道に歸順せば

吾等も共に手を引いて
これの聖地を守るべし

顧りみたまへ惟神
神の御前に赤心を

捧げて茲に願ぎまつる
旭は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも

誠の力は世を救ふ
誠の道に皆來れ

惡酔怪の目的は
決して世の爲め人の爲め

利益りえきとなるべきものでなし
否々いないながへつ却て世よを汚けがし

大混乱だいこんらんの種たねぞかし
顧かへりみ給たまへタンクさま

其外そのほかくわいあんごいちどう會員御一同
三五教あななひけうの三千彦みちひこが

心こころを籠こめて宣のりまつる
ああ惟かむながらかむながら神々々

御靈みたま幸倍さちはへましましてよ
』

タンク『いざさらば君きみの教をしへに従したがひて

これの集團つどひを解とき放はなちなむ。

この集團つどひ吾等われら一同いちどうの心こころより

出いでしに非あらずワツクスの胸むね。

ワツクスの百ももの企たくみの現あらはれし

上うへは尚なほ更さら何なんの要えうなき。

弱よわきをば挫くじき強つよきを助たすくるは

曲津の神の仕業なるらむ』

三千彦 健氣なるタンクの君の言の葉は

誠の神の御聲とぞ思ふ。

いざ早く曲の集團を解きほどき

神の御前に赤心ささげよ』

かく歌を取り交し、和氣霽々として茲に惡酔怪の解散をなし、町民一同打ち揃ひ、神館に恭しく詣でて感謝祈願の言葉を奏上した。中空には微妙の音楽聞え、天津乙女の姿二つ三つ嬉しげに舞ひ狂ひ、優曇華の花辨風に翻り、各人の頭にパラパラりと落ち來る。ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・三・二八 舊二・一二 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

第四章 銅盃（一四七九）

タンクの會長は三千彦と相談の結果、惡酔怪を解散し神館の神殿に一同參拜し感謝祈願の祝詞を奏上し了つた。日は已に暮れて暗の帳はボトボトとテルモン山の麓より下ろされて來た。數百の會員竝に町民一同はワックス以下の惡漢に誤魔化され、思はぬ暴動をつづけ大神の道に背きたる事を悔ひ、且つ懲戒の爲ワックス以下四人に笞を加へ追放せむ事を主張して止まなかつた。三千彦は種々言葉を盡し、其不合理を責めた。併し乍ら此町の昔からの不文律、俄に破る譯には行かぬと云ふので三千彦も止むを得ず笞刑を許した。笞打つ役はトンク、タンクの二人が當つた。ワックスには一千の笞、其外の連中には五百づつの笞を加へて放逐する事となつた。四人は杭に後向きに繋がれ、竹の根節の笞にて力限りに打たれる事となつた。三千彦は暗夜を幸ひ、四人の尻に銅の金盃を括りつけ、素知らぬ顔して居た。タンク、トンク兩人は少しも覺らず松明をドンドン焚き乍らソロソロ笞を打ち初めた。一同は拍子をとつて之に和す。銅の盃の上には着物がかつて

居るから何程松明の火が明くても容易に誰の目にもつかかなかつた。タンクは答を振り上げ一節歌つてはワックスの尻をピシヤと殴る。其度毎にカンと妙な音がする。タンクはエキスの尻を目蒐けてピシヤと打つ。これ亦カンと鳴る。

☐ テルモン山の神館

珍の聖地に仕へたる

ヨーイ ヨーイ ドンと打て カーン カーン

アイタタアイタタアイタタツツ 家令の悴ワックスは

古今無雙の悪黨者 エクス、ヘルマン、エルの奴

うまく騙かし如意寶珠 館の寶を盗み出し

ヨーイ ヨーイ ドンと打て カーン カーン

アイタタアイタタアイタタツツ 小國別の御夫婦に

あらぬ難題塗りつけて せつぱつまつたその擧句

自分のラブした姫さまを うまく手に入れ御養子と

ならうと致した悪漢だ ヨーイ ヨーイ ドンと打て

カーン カーン アイタタアイタタアイタタ

此世このよに神かみのます限りかぎ 悪あくは何時いつ迄までつづかない

蜴とがけの様な面やうつらをして 色いろの戀こひのなん何なんの事こと

色いろと欲よくとの二道ふたみちを かけた家令かれいのこせがれ小悴せがれ奴め

馬鹿ばかを盡つくすも程ほどがある ヨーイ ヨーイ ドンと打うて

カーン カーン アイタタアイタタアイタタ

此奴こいつの尻しりはどうしてか 笞打むちうつ度たびにカンカんと

怪體けたいな音おとがするぢやないか 面つらの皮かはまで厚あつい奴やつ

お尻けつの皮かはまで厚あついのか ヨーイ ヨーイ ドンと打うて

カーン カーン アイタタアイタタアイタタ

三千彦みちひこさまの神司かむつかさ 野蠻やばんな事ことは止やめにいちおうして

助たすけてやれと仰有おつしやつた それも一應いちおう尤もつともだ

さはさり乍ながら昔むかしから きまつた所刑しおきを今いまとなり

どうして廢止はいしがなるものか 打うたねばならぬ四人よにん連づれ

お尻けつの皮かはが剥むけるまで　　ヨーイ　ヨーイ　ドンと打うて

カーン　カーン　　アイタタアイタタアイタタ

こりやこりやワツクス初はじめとし　　エキス、ヘルマン、エルの奴やつ

もう斯かうなれば是非ぜひがない　　十分じふぶん覺悟かくごを相定あひさだめ

お尻けつの肉にくが取とれる迄まで　　打うつて貰もらつて俺等おれたちを

今迄いままで騙だまし苦くるしめた　　罪つみの償つぐなひするがよい

ヨーイ　ヨーイ　ドンと打うて　　カーン　カーン

アイタタアイタタアイタタ　　お前まへがここを去さつたなら

テルモン山ざんの神館かむやかた　　宮町中みやまちぢうは餅搗もちいて

ポンポンポンと勇いさみ立たち　　平和へいわに其日そのひを送おくるだろ

悪醉怪あくすゐくわいを組織そしきして　　吾等われら一同いちどうを抱いだき込こみ

神かみの使つかひの三千彦みちひこを　　苦くるしめまつりお館やかたを

占領せんりやつせむとの悪企わるたくみ　　いつ迄まで神かみは許ゆるさむぞ

ヨーイ　ヨーイ　ドンと打うて　　カーン　カーン

アイタタアイタタアイタツツ 此奴のお尻は澁太いな

観音さまでもあるまいに カンカンカンと音がする

餘程因果な生れつき 家令の悴と生れ來て

水平會や町民に 聲を揃へて唄はれて

笞刑の恥を曝すとは 憎い乍らもお氣の毒

これも規則だ仕様がな 涙を呑んで辛抱せよ

ヨーイ ヨーイ ドンと打て カーン カーン

アイタタアイタタアイタツツ ほんとに厄介な者だなア

デビスの姫やケリナ姫 尊い尊いお姫様

生命を助けて下さった 求道居士の修驗者

狐に狸の化物と うまく俺等を騙かして

鳩の岩窟に放り込んで 夜な夜な自分が通ひ込み

種々雑多と辭を設け 二人の姫の歡心を

買つて天晴色男 鼻毛をよまれ涎くり

目尻めじりを下さげて出いでて行ゆく そのスタイルがみ見たかつた

ヨーイ ヨーイ ドンと打うて カーン カーン

アイタタアイタタアイタタツツ 二人ふたりのナイスに肱ひぢてつ鐵てつを

喰くつた其上そのうえスマートに 腕うでをば咬かまれ足あし嚙かまれ

半死はんしはんしやう半生はんしはんしやうと成なり果はてて 血ちまぶれ姿すがたの憐あはれさよ

自業自得じごふじとくと締あきめて 町民ちやうみん一同いちどうの志こころざし

きつい笞むちをば受うけなされ 俺等おいらもヤツパリ人間にんげんだ

痛いいた苦くるしい其味そのあじは 決けつして知しらぬ者ものぢやない

それでも以い後の懲戒みせしめだ 涙なみだを吞のんで尻叩しりたたく

止やむに止やまれず尻叩しりたたく ヨーイ ヨーイ ドンと打うて

カーン カーン アイタタアイタタアイタタツツ

斯かうなりやお前まへも金盃かなたらい 叩たたいた様な音やうおとがする

餘程よつほどお尻けつが腫はれただる 痛いたいとて辛抱しんぱうするが宜よい

たつた五百ごひやくや一千いつせんの 笞しもとを受うけてメソメソと

吠面ほえづらかわく奴やつがあるか お前まへも一度いちどは團體だんたいの

頭かしらとなつた男をとこぞや 男をとこの中の男なかぞと

誇ほこつてムこぼつたワツクスよ それに従したがふ三人みたりづ連れ

相あひも變かはらず無賴ならずもの漢 お氣きの毒どくだがもう暫しばし

規則きそく通りにカンカんと 神妙しんめうに打うたれて置おきなされ

萬劫まんごふ末代まつだい名なが残のこる ヨーイ ヨーイ ドンと打うて

カーン カーン アイタタアイタタアイタタツタ

惡醉あくすめくわい怪くわいの會長ちやうみんしよくんと 町民ちやうみん諸君しよくんに選えらまれた

神力しんりきむさう無雙むさうのタンクさま 此方こなたの腕うでには骨ほねがある

あんまり強きつう叩たたかねど 力ちからが充みちて居をると見みえ

軟やらかい尻けつを叩たたくのに カンカンカんと音おとがする

こりや又また如何どうした事ことだらう ヨーイ ヨーイ ドンと打うて

カーン カーン アイタタアイタタアイタタツタ

落選らくせんしたるトンクさま ヤツパリ俺おれと同じおな様やうに

竹の根節を振り上げて

エキスの尻を打叩く

ヤツパリこれも腕力

備はり居ると見えまして

打つ度毎にカンカンと

怪體な音が響いてゐる

尻觀音が知らねども

何程カンカン云つたとて

最早貫目は保たれぬ

カンカラカンのカンカラカン

カンツクカンツク

カンツクカン

カンカンベラボウ、ボンボラボウ

ボンボラ坊主の四つの尻

ヨーイ　ヨーイ　ドンと打て

カーン　カーン

アイタタアイタタアイタタツタ

何程尻を叩いても

痛い痛いと言ふ計り

涙一つも零さない

クスクスクスと笑つてる

餘程肝の太い奴

これを思へば神館

思ふが儘に占領して

天下無雙の美人なる

デビスの姫に目をかけて

思惑立てたは當然

ホんに圖太い奴だな

此奴の尻は不死身だらう

何程打つてやつたとて　　チツとも往生致さない

打てよ打て打て確り打てよ　　ヨーイ　ヨーイ　ドンと打て

カーン　カーン　　アイタタアイタタアイタタツタ

トンク　「さあエキスの分は済んだ。これからヘルマンだ。おい、ヘルマン無情な奴と怨めて呉れな。これも貴様の心から出た錆だから仕方がないわ。尻の結目の合はぬ事するから、シリが来るのだ。それだから俺もお前等のシリ合だけれど此町の規則によつて尻を打たねばならぬ破目となつたのだ。悪い事をするなら何故もつと尻を結んで置かないのだ。シリ滅裂の計畫をやるものだから到頭終ひの尻は町民に笞刑五百と判ケツされてこんなケツい目に會ふのだ。然しまあケツ構と思へ、命とられぬ丈ケツ構だから。お姫様をケツねだの、狸だのと吐した酬いでケツ構な目に遭はなならぬのだから觀念するがよいわ。いやもうカン念してるに相違ない。エキス、ワツクスはカン念カン念と云つて居る。何分尻迄物云ふ時代だから馬鹿にならぬわい。これから俺が音頭とるのだ。さア辛抱せい。ワツクス

はまだ半分残つてる。これを思へば貴様は半分で済むのだからケツ構だぞ。

ヨーイ　ヨーイ　ドンと打て　カーン　カーン

アイタタアイタタアイタタツタ　家令の館へ押掛けて

チヨコ　チヨコ　サイサイ金銀の　小玉をドツサリ強請りとり

うまい汁をば吸ひよつた　その證にや尻迄が

ブクブク太つてケツからア　さアさア痛うても辛抱せよ

俺も涙は零してる　現在互に識つた仲

こんな役目を勤むるは　俺も嬉しうはないけれど

止むにやまれぬ此場合　ヨーイ　ヨーイ　ドンと打て

カーン　カーン　アイタタアイタタアイタタツタ

此奴の尻も亦不思議　又々カンカン唸り出す

顔に被つた鐵面皮　此奴は尻迄鐵面だ

手詰になつた此場合　いやでも打たねばならうまい

宮町中の怨靈が　お前の尻に集まつて

此ケツ斷になつたのだ　お前も決心するが宜い

打たねばならぬ此場合　ヨーイ　ヨーイ　ドンと打て

カーン　カーン　アイタタアイタタアイタタツタ

これから此處を立出でて　荒野ヶ原を打渉り

テルモン山を後にして　運も命も月の國

デカタン高原さして行け　お前によく似た悪人が

澤山集つて居ると云ふ　此靈場に置くならば

又もや悪事を企み出し　吾等一同に難儀をば

必ず掛るに違ひない　氣の毒乍ら打つてやらう

ヨーイ　ヨーイ　ドンと打て　カーン　カーン

アイタタアイタタアイタタツタ

漸くにして規則通り四人は數百人に聲を揃へて噓され乍ら尻を打たれた擧句、

縛いましめを解とかれて、夜陰やいんに紛まぎれ逃にげ出だす途端とたん、金盃かなだらひはガラランガラんと音おとをして芝生しばふの上うへに仰天ぎやうてんしてキラキラと篝火かがりびに輝かがやいて居ゐる。

トンク「やア、餘あんまり強ひどく打うつたので尻けつに血ちが凝かたまつたので、斯こんな大おほきな肉塊にくくわいを落おとして行いつた」

とよくよく見みれば四よつつの金盃かなだらひが大おほきな口くちを開あけて天てんを眺ながめて居ゐる。

トンク「ハハア、皆みなさま、これ御覽ごらんなさいませ。何なにがカンカン云いふかと思おもへば四よに人の奴やつの尻しりは此この通とほり金かねになつて了しまりました。ヤツパリ餘あんまり金かねを使つかつた天罰てんばつでせう」

一同いちどうは、タンク、トンクの兩りやうにん人が兩方りやうほうの手てに金盃かなだらひを一ひとつづつ捧ささげて來きて見みせるのを不思議ふしぎさう相さうに「ワイ ワイ」と叫さけんで、

「溜飲りういんが下さがつた、胸むねがスツとした。これで飯めしがうまい。歸いんで一いつ杯ぱいやらうかい」と口々くちくちに囁ささやき乍ながら各吾家おのおのわがやを指さして歸かへり行ゆく。タンク、トンクの兩りやうにん人は無事ぶじ答刑ちけいの

濟すんだのを報告ほうこくすべく金盃かなだらひを四よつつ、各めいめい自じに抱かかへて神館かむやかたの大だい神しん殿でんに進すすみ入いり、恭うやうやしく呈上ていじやうした。三千彦みちひこは此場このばに現あらはれ來きたり、

三千みち「タンクさま、トンクさま、御苦勞ごくらうでムいました。四人よにんは無弱さぞよわつたでせうな」

タンク「はい、何だか知りませぬが餘り打つたものですから、此通り尻が硬くなり、血が滲んで尻の凝固を落して逃げました。然し随分元氣よく何處かへ逃げましたよ、アハハハハハ」

タンク「三千彦の神の司の慈み
尻に鎧を着せ玉ひけり」

トンク「金盃とは知り乍ら大神の
惠嬉しみ打据ゑにける」

三千彦「大神の惠の露を負ひし身は
如何でか人を損ひ得べき。」

皇神も二人の司の誠心を
さぞ喜びて諾ひますらむ』

(大正一二・三・二八 舊二・一二 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第五章 潔別(一四八〇)

テルモン山の神館 青葉の茂る庭園に
咲き誇りたる花菖蒲 青紫や白黄色
所狭まで燕子花 咲き匂ひたる床しさよ
パインの枝は涼風に 吹かれて自然の音楽を
奏でて舞踏を演じつつ 至治泰平の瑞祥を

現はし居るこそ目出度けれ
常磐の松の青々と

緑ものびて玉の露
風吹く毎にバタバタと

金砂銀砂の上に落つ
三五教の宣傳使

恵の露を浴びながら
進んで来りし玉國の

別の命を初めとし
比丘の姿の求道居士

バラモン教のキャプテンが
伴ひ来る下士官と

膝を交へて奥の間に
涼しき風を入れながら

天地の恵を嬉しみて
心の隔て相はづし

語り出づるも神ながら
誠の道の教より

外に言葉は荒風の
青野を渡る有様に

天國浄土の真相を
今目の當り見る如し

ああ惟神々々
神の恵の幸はひて

三五教やバラモンの
教の區別を取り拂ひ

旭も清くテルモンの
山の麓に樂園を

築き初めしぞ尊けれ

茲に三千彦宣傳使

神の館に仇なせる

ワックス、エクス、ヘルマンや

エルの司を追放し

タンク、トンを伴ひて

悠々歸り坐につけば

玉國別は聲をかけ

汝三千彦神司

館の前の馬場にて

老若男女の叫び聲

御空を焦す篝火の

その顛末を詳細に

宣らせたまへと促せば

三千彦兩手をつき乍ら

恭しくも答へける。

月の都に現ませる

大黒主の神柱

古此處に在しまして

バラモン教の御教を

開き給ひし靈場の

記念となして如意寶珠

珍うつつの寶たからを奉齋ほうさいし

館やかたの主人あるじ二柱ふたはしら

教司をしへつかさに相命あひめいじ

固かたく守まもらせ給たまひしが

オールスチンの悴せがれなる

頑迷ぐわんめい愚鈍いぐどんのワックスが

野心やしんを充みたす其その爲ために

エクス、ヘルマン兩人りやうにんを

使し喚そうなしつつ奥殿おくでんに

忍しのばせ玉たまを竊取せつしゆして

深ふかく吾家わがやの床下ゆかしたに

土つちをば被おほひ隠かくし居をる

其その心根こころねの醜みにくさよ

館やかたの主人あるじは村肝むらきもの

心こころを痛いため給たまひつつ

重おもき病やまひの身みとなりて

命旦夕めいたんせきに迫せまる折をり

神かみの命みことを畏かしこみて

これこのの館やかたにいり来きたり

小國をくにの姫ひめに頼たのまれて

玉たまの所在ありかを探索たんさくし

館やかたの難儀なんぎを救すくひつつ

少時しばし留とどまる折をりもあれ

色いろと欲よくとに迷まよひたる

ワックス司つかさはじ初はじめとし

其その外ほか百ももの惡漢わるものが

教をしへの道みちの三千彦みちひこを

魔法使まはふつかひと云いひ觸ふらし

このれいぢやう　　とこしへ
 此靈場に永久に　　住める男女を嗟かし
 あくすめくわい　　そしき
 惡酔怪を組織して　　館を目宛に攻め來る
 そのきほひ　　すさま
 其勢の凄じさ　　吾は僅かに身をもつて
 よ　　まが　　う　　むか　　ちからかぎ　　たたか
 寄せくる曲に打ち向ひ　　力限りに戦へど
 みかた　　ひとりてぎん　　うんか　　こと　　いきほひ
 味方は一人敵軍は　　雲霞の如き勢に
 やみやみ敵に捉へられ　　アンブラック河に投げ込まれ
 せいしふめい　　きやうがい　　おちい
 生死不明の境涯に　　陥りたるぞ腑甲斐なき
 かか　　ところ　　あら　　きた　　ねもころ
 斯る所へスマートが　　現はれ來り懇に
 いづ　　ことたま　　いだ　　しみづ　　くち　　ふく
 嚴の言靈のり出し　　清水を口に含みつつ
 わ　　いくたま　　よ　　ふたた　　もと　　み
 吾が生魂を呼び生けて　　再び元の身となしぬ
 ゆうき　　ひじろ　　ひやくばい　　かみ　　やかた　　わざはひ
 勇氣日頃に百倍し　　神の館の災を
 と　　のぞ　　いさ　　た　　いろいろざつた　　み　　こが
 取り除かむと勇み立ち　　種々雑多と身を焦し
 こころ　　くは　　やっせ　　わるものども　　ほばく
 心を配り漸くに　　惡漢共を捕縛して
 さだ　　ま　　むち　　あ　　タンク、トングの兩人が
 定めめ儘に鞭を當て

答しもとの下もとに悪漢わるものは 雲くもを霞かすみと逃にげ去さりぬ

ああかむながらかむながら惟神たふと々々 貴かみき神おんめぐみの御おんめぐみ恵

危あやふき命いのちを助たすけられ 館やかたの主人あるじの重ぢつびやう病びやうも

日ひに夜よに快方くわいはうに相向あひむかひ デビスひめの姫ひめやケリナひめ姫

目出度めでたく茲ここに歸かへりまし 親おや子こ對面たいめん恙つつがなく

濟すまして喜よろこぶ折をりもあれ 玉國たまくに別わけの師しの君きみが

眞ます純みの彦ひこや伊太彦いたひこを 伴ともなひ來きたり嬉うれしくも

師弟していの對面たいめんなし遂とげぬ ああかむながらかむながら惟神たふと々々

神かみの御前みまへに赤心まごころを 捧ささげて感謝かんしゃし奉たてまつる

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも

空そらおち星ほしは失うするとも 千尋ちひろの海うみは涸かるとも

神かみの依よさしの熱誠ねつせいに 盡つくさにやおかぬ三千彦みちひこが

心こころを察さつし師しの君きみが これの館やかたを立たち出いでて

吾等われらと共にとも月の國つきくに ハルナみやこの都みやこにスクスクと

進すすませ給たまへ惟かむ神ながら 猶いっよ豫よもならぬ今日けふの空そら

昨日きのふに變かはり四方よも八方やもに 霞かすみ棚たな引き風かぜ荒あらく

雨あめさへ交ましる夏なつの日ひの 行ゆく方へ定さだめぬ人ひとの身みは

片かた時ときさへも空くう費ひせず 神かみの御おん爲ため世よの爲ために

進すすませ給たまへと願ねぎ奉まつる デビスの姫ひめは吾わが前まへに

百ももの言こと靈たま宣のり給たまひ 妹いも背せの道みちを契ちぎらむと

心こころせつなき談か判あひに 吾われは言こと葉ばも返かへしかね

躑ためらひ居あたる時ときぞかし 吾わが師しの君きみの出いでましを

これ幸さいと逸いち早はやく 館やかたを出いでて月つきの國くに

一ひと日ひも早はやく進すすむべし 眞ます純みの彦ひこよ伊いた太た彦ひこよ

神かみの教をしの三み千ち彦ひこが 生いく言こと靈たまを諾うべひて

吾わが師しの君きみと諸もろ共ともに 膝ひざの栗くり毛りげに鞭むちちて

青あを野のが原はらを打うち渡わたり 暑しよ熱ねつと戦たたかひ雨あめを浴あび

風かぜに髪かみをば梳くしけずり 進すすみて行ゆかむいざ早はやく

早く早く』とせき立てる

眞純の彦は立上り

大神前に打ち向ひ

恭しくも拍手して

玉國別に打ち向ひ

言葉も低う腰屈め

吾師の君と仕へたる

玉國別の宣傳使

三千彦司の言の葉を

諾ひまして片時も

早く此場を立ち出でて

悪魔の征途に上りませ

如何なる曲の攻め來とも

如何でか怖れむ神の道

千里の山川打ち越えて

浪風猛る湖や

濁水漲る大川を

神の恵に打ち渡り

嶮しき坂を攀登り

道々悪魔を言向けて

進み行かなむ惟神

許ゆるさせたまへと願ねぎ奉まつる
』

玉たま國くに別わけ 』 テルモンの山やまの嵐あらしもをさまりぬ
いざ立たち行ゆかむ月つきの御み國くにへ
』

三み千ち彦ひこ 』 師しの君きみの宣のりのまにまに出いでて行ゆく
行ゆく手の道みちは安やすけからまし
』

デビス姫ひめ 』 三み千ち彦ひこの神かみの司つかさよ若わか草くさの
妻つまを伴ともひ進すすませ給たまへ
』

三千彦みちひこ 大神おほかみの宣のりのまにまに出いでて行くゆく

三千彦みちひこ司つかさど如何いかに苦くるしき。

師しの君きみの許ゆるさせ給たまふ事ことあらば

伴ともなひ行ゆかむ月つきの御國みくにへへ

デビス姫ひめ 玉國たまくに別わけ神かみの命みことに物もの申まをす

妾わらはを印ツ度キにつれて行ゆきませせ

玉國たまくに別わけ 垂乳根たらちねの許ゆるしありせば連つれ行ゆかむ

唯ただ何事なにごとも神かみのまにまにに

小國姫をくにひめ「デビス姫ひめ三千彦みちひこ司つかさの妻つまとして
連れさせ給たまへ神かみの司つかさよ」

玉國別たまくにわけ「垂乳根たらちねの母ははの許ゆるしのある上うへは
如何いかで拒こぼまむ旅たびの伴ともづ連れ」

眞純彦ますみひこ「永久とこしへの花はな開ひらくなる春秋はるあきの
喜びよろこ胸むねに三千彦みちひこの君きみ」

伊太彦いたひこ「いたいのけのデビスひめの姫つまを妻つまとなし
旅たびに出いでます君きみぞかしこき」

三千彦みちひこ 言ことの葉はの綾あやをかざりて若草わかぐさの
神かみの使命しめいを相果あひはたすまで〆

眞純彦ますみひこ 言ことの葉はの綾あやをかざりて若草わかぐさの
妻忌つまいみがてにのるぞ可笑をかしき〆

求道居士きうだうこじ 三千彦みちひこの神かみの司つかさの心根こころねは
三五さんごの月つきの如ごとくなりけり。

いざさらば吾われは此家このやに止とどまりて
二人ふたりの親おやに厚あつく仕つかへむ〆

ニコラスニ玉國たまくにの別わけの命みことに物申ものまをす
これの館やかたを如何いかに治めをさむ

玉國たまくに別わけ「バラモンあななひけうや、三五教へだの隔へだてなく

齋いつきたまはれ大本おほもとの神かみ。

さりながらこれの館やかたはバラモンの

神かみをば捨すつる譯わけにはゆかず。

三五あななひの神かみを齋いつきてバラモンの

皇大神すめおほかみに厚あつく仕つかへよ

ニコラスニ隔へだてなき君きみの言葉ことばに従したがひて

齋いつき奉まつらむ百ももの神達かみたち。

バラモンの軍の君を今日よりは

離れて厚く神に仕へむ

玉國別 『いざさらば百の司よ心安く

いとまめやかに世を過ごしませ

小國姫 『懐しき教の君に遇ひ乍ら

いま別れむとする胸の苦しさを

ケリナ姫 『皇神の教の道を傳へ行く

玉國別よやすく出でませ

玉國別たまくにわけ 時の間ときまは早くも移うつりケリナ姫ひめ
親おやに仕つかへて清きよくましませ

と、互たがひに離別りべつの歌うたを歌うたひ和氣わき靄々あいあいとして杯さかづきを取とりかはし玉國別たまくにわけ、眞純彦ますみひこ、伊太彦いたひこ、
三千彦みちひこ、デビス姫ひめの一行いっかうは、後事こうじを求道きうだう居士こうじに一任いちにんし置き、宣傳歌せんでんかを歌うたひながら、
欣々いそいそとしてテルモン山さんを南みなみに下くだり、青葉あをばの影かげに隠かくれ行ゆく。ああ惟かむながら神靈たま幸倍ちはへ坐世ませ。
(大正一二・三・二八 舊二・一二 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

第二篇 湖上神通こじやうじんつう

第六章 茶袋ちやぶくろ〔一四八一〕

三千彦は先に立ちテルモン山の中腹を南へ南へと下り行く。比較的峻峻な坂道で足許に少しも目放しが出来ぬ。金剛杖を力に指の先に全身の重味を集中し乍ら拍子をとつて下り行く。

三千彦 三五教の宣傳使 如何なる敵も恐れねど

板を立てたる坂道の 又ルリ又ルリと迂るのは

誠に閉口仕る 玉國別の師の君よ

デビスの姫よ氣をつけて 轉倒せぬ様になされませ

月の都に立向ふ 神力無雙の宣傳使

其首途に過つて もしも轉倒したならば

それこそ前途が氣にかかる 御幣を擔ぐぢやなければ

今日は大切の出陣も 變らぬ様な旅の空

天津御空に目をやらず 暫らく足の爪先に

眼を注ぎ氣を配り ウントコドツコイ、ズウズウズウ

云ふより早く足滑り
ドスンと搗いた尻餅は

吾等が前途を祝すべく
空に輝く望月の

瑞の御靈の御守り
前途必ず吉祥と

直日に見直し宣り直し
足もワナワナ下り坂

面白をかしく脛笑ふ
今日の旅出の勇ましさ

朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも

梢に蝉は吠るとも
汗は何程出るとても

頭の上からカンカンと
日の大神が照らすとも

神に任せし此體
岩より固い魂は

常磐の松の岩の上に
生茂りたる如くなり

ウントコドツコイ ドツコイシヨ
よくまあ迂る坂だなア

赭土許りがピカピカと
光つた上に濕りをば

帯て居るのでよく迂る
誰が通つたか知らないが

こりや又えらい磨けよう
流石のスマートさまでさへ

四つよつの足あしをも持ちも乍なら

體からだをは斜すにか構まへつつ 下くだつてゆくのをなが眺ながむれば

餘程よつほどきつい坂道さかみちだ これさからさ先きはテルモンの

音おとにな高たき湖みづうみだ 吾等われら一いつかうせんでんし

この湖みづうみをわたらねば 月つきの御國みくににや行ゆかれない

ウントコドツコイ、ズウズウズウ ほんきにけんなにり坂ざか

坊主頭ぼうずあたまをへ瓢箪たんで 撫なでてるやう様あしぐあひ

うつかりするとてんたう轉倒てんたうし 天狗てんぐの面めんやお多福たふくの

玉たまの御舟みふねをあまざらし せなくちやならぬ恐こい道みち

氣きをつけなされ皆みなさまよ ウントコドツコイ ドツコイシヨ

どうさやら坂さかがゆるなつた 此ここで油斷ゆだんをしちやならぬ

バラモン教けうの惡神あくがみが 吾等われら一いつかうの前ぜん途とをば

擁ようしてま待まちさうな處ところだぞ 何程なにほど敵てきがき來きたるとも

腕うでにおぼえのあるうへは 決けつしてひるまぬやまとだま大和魂

ああ惟神々々かむながらかむながら

神かみのまにまに下くだり行ゆくら

眞純彦ますみひこは亦また歌うたふ。

☐ テルモン山ざんの南坂みなみざか

鰻うなぎのやう様にすべにみち道

三千彦みちひこさまが先さきに立たち

吾師わがしの君きみと若草わかくさの

妻つまの命みことのデビス姫ひめ

二人ふたりの名なをば呼よび乍ながら

眞純彦ますみひことも伊太公いたこうとも

仰おつしや有あらないのは何事なにごとだ

ほんにお前まへは水臭みづくさい

玉國たまくに別の師しの君きみの

御名おんなを呼よんで親切しんせつに

注意ちういをしたのは表向おもてむき

實地誠じつちまことの腹はらの中なか

新婚旅行しんこんりよかうのデビス姫ひめ

その身みの上うへが氣きにかかり

義理ぎりか妬やくかで師しの君きみの

お名なを呼よんだに違ちがひない

アハハハハツハ、アハハハハ

現銀至極げんぎんしごくの男おとこだな

それだによつて宣傳せんでんの

途中とちゆうに於おいて若者わかものに

女房にようばうを持もたすと魂たましひが

碎くだけて誠まことの間に合あはぬ

女をんなに心こころ引ひかされて

大切だいじの大切だいじの使命しめいをば

怠おこたる事ことがあるものだ

さはさり乍ながら三千彦みちひこの

神かみの使つかひは格別かくべつだ

案あんずる事ことはなけれども

第一だいいち女をんなに氣きをとられ

魂たまは中有ちゆうちゆうに飛とび散ちりて

肝腎要かんじんかなめの足許あしもとが

目めにつかないか二度三度にどさんど

スウ スウ スウと迂すべりよつた

肝腎要かんじんかなめの先さきに立たつ

道案内みちあんないの三千彦みちひこが

迂すべつて轉こけて吾々われわれが

無事ぶじに此坂下このさかくだるの

何なにか一つの原因げんいんが

なければならぬ道理だうりぞや

省かへりみ玉たまへ三千彦みちひこよ

ああ惟神かむながらかむながら々々

神かみに代かはりて氣きをつける』

伊太彦いたひこは亦歌またうたふ。

伊太彦いたひこ ウントコドツコイ ドツコイシヨ 悪魔あくまは出るとも逃にぐるとも

憑物つきもの皆みんな驅かけ出すも 此坂道このさかみちになつたなら

どうしても體からだが草臥くたびれる さはさり乍ながら最愛さいあいの

女房にようばうを連つれた三千彦みちひこは 嘸さぞや樂たのしい事ことだらう

元氣げんき日頃ひころに百倍ひゃくばいし 意氣いき揚やう々と肱ひぢを張はり

六方ろくばうを踏ふんで坂道さかみちを 八王神やつかみ歩あゆみそのままに

エンヤラ エンヤラ エンヤラと そのスタイルは蝟螂かまきりか

但ただしは蛙かはうの手踊てをどりか 又またも違ちがふたら山猿やまざるの

ステテコ踊をどりと云いふ様なやうな さても怪あやしきスタイルだ

アハハハツハ、ズウズウ オツトドツコイ足あし迂すへり

お尻しりをドンと打うちました 天狗てんぐの面めんも茶袋ちやぶくろも

神かみの御蔭おかげで御安全ごあんぜん 二ふたつの玉たまは完全くわんぜんに

お腹なかの中なかへ舞まひ上あがり 大急行だいきふかうで洋行やうかうした

ああ惟かむ神な々々ながらかむながら 目玉めだまのとび出でるきつい坂さか

土蟹ぢやないが横歩き

正面に足が運べない

三千彦さまの御夫婦は

轉けよと倒れよと構はぬが

吾師の君よ眞純彦よ

何卒用心遊ばして

此坂無事に下りませ

夏の木立に鳴く蝉の

聲はミンミン眠たげに

寢言交りに歌ふて居る

そんな陽氣な事かいな

此坂道は命懸け

どうして之が眠られよか

足のこぶらがブクブクと

酒徳利の様になつた

ズウズウズウ アイタタツタ

ヤツパリ坂を下るのは

口を嚙へて俯向いて

下らにやならぬと云ふ事を

初めて體得致しました

三千彦司が先に立ち

くだらぬ歌を喋る故

眞純の彦も伊太彦も

つひ釣り出されウツカリと

退屈紛れに喋つたが

それが吾身の仇となり

デツカイお尻を打ちました

ああ惟神々々

こんな事だと知つたなら
ワツクスさまが馬場にて
笞刑を受けた時のやうに
銅盃を尻につけ
下つて来れば宜かつたに
下司の知識は後からと
人が云ふのも無理は無い
ああ惟神々々
これこれデビスのお姫さま
お前も一つ附合ひに
此坂道を下りつつ
下坂の歌を歌ひませ
三千彦さまの機嫌のみ
とらず吾々一行の
チツとは心を慰めて
平和の女神の本領を
發揮し玉へ惟神
神の使の宣傳使
伊太彦さまが頼みます
ああ惟神々々
御靈幸はひましませよ
』

デビス姫
『妾は三千彦宣傳使

夫に持つたデビス姫

神のお道に仕ふ身は 夫婦ありては肝腎の

御用が出来ぬと聞きました 兔は云ふものの玉の緒の

命を助け下さつた 大恩深き神司

悪魔の猛り狂ふなる 荒野ヶ原を打渉り

雲霞の如き敵軍の 中に向つて進み行く

その雄々しさを思ひ出し 女乍らもジツとして

どうして館に居られませう 婦は夫に従ひて

力を盡し身を庇ひ マサカの時が出て來たら

命を的に吾夫の 使命を全く遂げさせて

女の道を盡さねば 濟まぬ事だと覺悟して

住み心地よき吾館 後に眺めて遙々と

踏みも習はぬ旅枕 苦勞を覺悟で行きまする

陽氣浮氣で斯んな事 どうして纖弱き女の身

出來そな事がありませうか 椰揄ひなさるも程がある

妾の心は眞劍だ

人が笑ふが譏らうが

一旦夫に魂も

體も共に任したら

決して中途に怯まない

女乍らも天晴と

貴方に劣らぬ功績を

立てて御目にかけます

玉國別の師の君よ

眞純の彦の神司

伊太彦司も諸共に

妾の心の清きをば

眞面目に覺らせ玉へかし

決して色や戀のため

菊石の出來た宣傳使

三千彦さまに惚れませう

何程顔は醜ても

肝腎要の魂は

三五の月の姿より

百倍増して美しく

心の鏡に映りしゆ

神の御爲世の爲に

かかる健氣な武士と

一度腕に撚かけて

世界の爲に盡さむと

思ふばかりの眞心が

凝り固まりし今日の旅

笑はせ玉ふ事もなく

纖弱き女の身なれども 許させ玉へ何處迄も

吾等夫婦を従へて 進ませ玉へ惟神

神の御前に誠心を 誓ひて告白仕る

ああ惟神々々 御靈幸はひましませよ

と歌ひ了り流石の坂道も賑々しく笑ひ興じ乍ら、擲掬ひ半分の下り行く。漸くに
して下り三里の急坂を越えテルモン湖の邊に着いた。坂道で絞った汗は湖面を吹
く涼風に吹き拂はれ、得も云はれぬ爽快の氣分に漂ふた。東西百里南北二百里の
大湖水は金銀色の魚鱗の波を湛へ、洋々として靜かに横たはつて居る。

(大正一二・三・二八 舊二・一二 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第七章 神船(一四八二)

玉國別の一行はテルモン湖の邊に着いた。萬波洋々たる紫の水面を或は高く或は低く、アンボイナが翼を逆八の字に擴げて「大鳥は羽を急がぬ」と云ふやうな、鷹揚ぶりを見せ滑走して居る。信天翁、鵜の群は東西南北に或は百羽、或は二百羽密集して羽を忙しさうに一直線に飛んで居る。水面は凧だとは云へ、名に負ふ大湖水、幽かに吹く北風に煽られて七五三の浪が磯邊に鼓をうつて居る。遠く目を放てば、白砂青松の濱、左の方や右の方に輪廓正しく線を揃へて斷りたてやうに竝んで居る壯絶快絶、心膽を洗ふが如く、一つ島の諏訪の湖もかくやと思ふ許りであつた。玉國別は萬波洋々たる湖面を眺めて、

玉國別 打ちよする波の鼓の音も清く

響き渡れり玉國別の耳に。

湖面を右や左に飛びかひつ

魚を漁るか鵜の鳥幾群

三千彦 湖の岸邊に匂ふ燕子花

打つ白浪に擬ふべらなり

眞純彦 大空も湖の面も澄みわたる

潮三千彦の合せ鏡か

伊太彦 見渡せば雲か霞か白浪の

彼方に見ゆる珍の松原

デビス姫 水の面に浮びて遊ぶ鴛鴦の

姿眺めて心轟く

眞純彦ますみひこ 千代迄ちよまでと契ちぎる言葉ことばも口籠くちごもる
鴛鴦をしの番つがひの若夫婦わかふうふかな

玉國別たまくにわけ 齋苑館いそやかた立ち出いでしより山野原やまのはら

のみ涉わたりたる目めには珍めづし。

この湖うみの廣ひろく深ふかくて清きよらけき

姿すがたは瑞みづの御靈みたまなるらむ。

素盞鳴すさのをの神かみの尊みことに今いま一度いちど

これの景色けしきをお目めにかけたし。

村肝むらぎもの心こころのままになるならば

この湖みづうみを家苞いへづとにせむ。

皇神すめかみの惠めぐみは深ふかし八千尋やちひろの

底そこひも知しれぬこれの湖みづうみ

デビス姫ひめ 如何いかにして此湖水このみづうみを渡わたらむか

頼たよる船ふねなき今日けふの旅立たびだち 〇

眞純彦ますみひこ 唯一ただひとり人玉たまの御船みふねを抱かかへつつ

現あれます女神めがみのデビス姫ひめあはれ 〇

デビス姫ひめ 〇 此船このふねは世人よびとを乗のする船ふねならず

吾背わがせの君きみの専有物せんいうぶつぞや。

湖みづうみの邊ほとりを漁あさり烏貝かじすがひ

拾ひろひて船ふねにかへむとぞ思おもふ 〇

三千彦「アンボイナ翼に乗りて易々と
神のまにまに過り行かまし」

伊太彦「いつ迄か心を苦しめ悩むとも
渡る術なし遠き浪路を」

かく一行五人は湖畔に立つて下らぬ歌を詠み乍ら、如何にしてこの湖水を渡らむかと稍當惑の體であつた。かかる處へ一艘の漁船、矢を射る如く走り來る。一行は救ひの船の到來と、望みを抱いて船の此方に到着するを待つて居た。船頭は、拍子の抜けた聲で、
船頭「オイ、お前達は三五教の宣傳使と見えるが、此湖を渡る積りか。ハルナの都の大黒主の神様から、吾々は澤山のお手當を頂いて……三五教の宣傳使が此處へ來たならば決して渡してはならない……と厳しき命令を受けて居るのだ。渡し

度うても渡してやる事は出来ない。ぢやと云ふて一枚の紙にも裏表があるものだ。海には船、水には空気、男には女だ、鑿には槌、硯には墨と昔からちやんと定つて居る。お前の出やうによつては渡してやらぬ事もない事もない。どうする積もりだ。いつ迄も溺死よけの石地藏のやうに湖水を眺めて永久に立つて居る積か。返答が無ければこの船を又彼方に持つて行くから、何とか考へたがよからうぞ。伊太彦「オイ船頭、そんな事云つても要領が分らぬぢやないか。表向渡す事は出来ないが、澤山の金を呉れたら、渡さうと云ふのだらう、そんなら分つて居る。幾何でもやるから向岸迄早く渡して呉れ」

船頭「何と云つてもこの湖水は南北二百里もあるのだから、ちよつと一寸渡る譯には行かぬ。お前達を乗せた以上は、飯も食はしてやらねばならず、何程急いでも十日はかかるのだから、餘程澤山貰はなければ引き合はないのだ。後の喧嘩を前にして置かなくつては、向ふへ着いてから、高いの安いのと云はれては詮らぬからのう」

玉國別「幾何でもやるから、早く船を出して呉れ」

船頭せんどう「そんなら百兩呉れますか、五人さまと犬一匹だから平均二十兩にもなりませぬ。安いものでせう」
玉國たまくに「一兩出せばお米が一石あるぢやないか、百兩とはちと高いぢやないか」
船頭せんどう「高けりや止めとこかい、左様なら」
と早くも櫓を漕いで立ち去る勢を見せる。デビス姫は逃げられては大變と氣を焦ち、

デビス「船頭さま、望み通り百兩上げます。何卒早く向へ渡して下さい」
船頭せんどう「ヤ有難い、お前は神館のお姫さまだな。こんな好い男と、どこかへ驅落をするのだらう。百兩は安いものだ。もう百兩出しなさい。さうすれば、お前さまがこの湖を渡つて驅落をしたと云ふ事を隠して上げる。口止料として百兩は安いものだらう」

デビス「エエ仕方がムいませぬ、望み通り上げるから早く乗せて下さい」
船頭せんどうはニコニコし乍ら船を横付にした。五人はスマートと共に早くも飛びのつた。

折しもそよそよと吹く北風に白帆をあげ、少時湖面をスルスルと迂つて行く。
船頭は艫に立ち櫓を手に握りながら、風に破った太い喉から、透通るやうな聲を
出して歎乃を唄ひ出した。

此處はアーエー

天竺のーテルモン湖水

渡るもー嬉しいーやあ、夫婦連れエー

月のオーエー

國にはア、名所がアームるウー

ハルナーアのーエー

都のオーー、蓮の池

浪はアー、うつつうつつ、鼓のオー音か

但し龍宮のオー、乙姫かアー

と唄ひ乍ら、追々岸を離れて、南へ南へと一直線に進んで行く。次第々々に乗り場の老松は姿小さくなり、テルモン山の頂きは却て高く見えて来た。此時船の底より現はれ出でた四人の荒男、體一面網襦袢や網ズボンを着し、大刀を提げて五人の前に進み来り、嫌らしき笑を浮べ睨めつけて居る。これはワツクス、エキス、ヘルマン、エルの四人がこの湖上にて恨を晴らさむと、故意とに船頭に澤山の金を與へ湖水の中央にて五人の男女を斬り殺さむと企んだ仕事である。ワツクス「ヤア珍らしや三千彦、其外三五教の魔法使、竝に吾々に恥を搔かしたデビス姫の阿魔つ女。よくまあ吾々の計略に釣られよつたな。最早此處迄釣り出した以上は、如何に神變不思議の魔法を使ふとも逃るる事は出来まい。サア是から吾々四人が汝等を青龍刀の錆となし呉れむ。又この犬畜生も湖の上では如何ともする事が出来まい。何れも觀念を致したがよからう。此船底には數十人の荒男が隠してあれば、チタバタ致してももう駄目だ。デビス姫を潔く此方に渡して、其方はこの湖水に身を投げて往生いたすか。左もなければ氣の毒ながら吾々が刀の錆にして呉れる。ても、さても鈍馬野郎だなア」

玉國別は平然として些も騒がず、天の數歌を奏上し始めた。如何はしけむ、俄に暴風吹き來り、山嶽のやうな浪猛り狂ひ、船は木の葉を散らすが如く、前後左右に動揺し初めた。遠のワックス以下の悪人も身の置所なき船の動揺につれて右にコロコロ、左にコロコロ、きねぐそを糠にまぶしたやうにごろつき初めた。遠の玉國別も餘り激しき船の動揺に眼眩みむかづきさうになつて來た。敵味方の區別なく一生懸命に叶はぬ時の神頼み、口の奥にて祈つて居る。船頭は船の動揺した機に櫓の「つか」に撥られ、もんどり打つて荒狂ふ荒浪の中にドンブと許り投げつけられ、石の地藏を投げ込んだやうに、ブルブルとも何とも云はずに湖底深く沈んで仕舞つた。斯る所へ一艘の船、七八人の若者一生懸命に權を漕ぎながら、此方を目蒐けて馳來る。見れば三五教の宣傳使初稚姫が、斯くあらむ事を豫期し、島陰に隠れて待つて居たのである。初稚姫は舷頭に立ち現はれ、初稚「玉國別さま、御一同さま、サア早く此船にお乗り下さい、此船なれば如何なる荒浪も大丈夫です」

一同は、救ひの船と拍手感謝し乍ら手早く乗り移つた。八人の水夫は荒浪を乗

り切り、驀地にすうすうと進み行く。スマートはザンプと許り飛び込んだ。初稚
姫も亦ザンプと許り飛び込み、スマートに跨り湖面を泳ぎ出した。忽ち荒波は鎮
まり、油を流したる如き鏡の湖と化して仕舞った。初稚姫は矢を射る如くスマー
トに跨り、見る見る其姿は一行の視線を離れて仕舞った。ワックスの乗つて居た
大船は肝腎の船頭を失ひ、櫓を操る事を知らず、齒がみをしながら水面にキリキ
リ舞をひをやつて居る。三千彦、伊太彦は舷を叩き愉快げに歌ひ乍ら舳を南に向
け微風に帆を孕ませ走り行く。

三千彦 此處は名に負ふテルモン湖 東西百里南北は

二百里ありと聞き及ぶ 神の使の宣傳使

テルモン館を後にして 足許にる坂道を

漸う下り来て見れば 金波銀波の漂へる

大海原の右左 パインの林は立ち並び

金砂銀砂は日光に 輝きわたる麗しさ

静かな浪は舷に 押し寄せ來り鼓打つ

ああ天國か樂園か 譬がたなき風景ぞ

待つ間程なく一艘の 老朽船が現はれて

吾等一行を乗せながら 南へ南へと進む折

忽ちワツクス船底より 現はれ來り大刀を

引き抜き吾等一行を 力限りに脅迫し

暴逆無道の手を下し 戀の恨を晴らさむと

湖の如き巻舌を 竝べてゴロつく折もあれ

俄に吹き來る湖嵐 前後左右に吹きまくり

小山のやうな浪を立て 瞬く中に船體は

風に木の葉の散る如く 危さ刻々増來り

櫓を操りし船頭は 撥ね飛ばされて無慙にも

湖の藻屑となり果てぬ 遠無道のワツクスや

其他三人の惡漢も 激しき颯風に敵しかね

右や左にヨロヨロと 轉げ廻りしおかしさよ
吾師の君を初とし 吾等一行も船體を
揺られて苦しむ時もあれ 左手に浮ぶ島の陰
現はれ来る一艘の 船は此方に龍の如く
進み来るぞ不思議なれ 吾等は愁眉を開きつつ
こは何人の船なると 瞳を据ゑてよく見れば
豈計らむや三五の 教の道に名も高き
初稚姫の御姿 吾等が危難を救はむと
目無堅間の御船をば 用意遊ばし玉ひしと
聞くより嬉しさ限りなく 感謝の涙止めあへず
ヒラリと船に飛び乗れば 今迄吾等を助けたる
神の司のスマートは ザンプと許り浪の上
身を躍らして飛び込みぬ あはやと思ふ暇もなく
初稚姫は忍ちに 其身を湖面に投げながら

スマートの背に跨りて 矢を射る如く出でたまふ

ああ惟神々々 神の變化か神人か

唯しは誠の三五の 初稚姫のお姿か

合點の行かぬ御救ひ 嬉しく感謝し奉る

後振り返り眺むれば 今迄乗り來しぼる船は

肝腎要の船頭を 浪に吞まれて操縦の

機關を失ひ浪の上 クルクルクルと回轉し

進みなやむぞ可笑しけれ 旭は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

如何なる嵐が吹くとても 誠一つの三五の

神に任せし吾々は まさかの時の救け舟

天より下し玉ふなり ああ尊しや有難や

神は汝と共にあり 人は神の子神の宮

恐るるためしは要らないと 諭し給ひし三五の

をしへ
教を今更目の當り
知るぞ嬉しき湖の上
ちひろ
千尋の深き御恵
かなら
必ず忘れまつらむや
ぐぜい
弘誓の船に帆を上げて
すず
涼しき風に吹かれつつ
なつ
夏の央と云ひ乍ら
なかば
ハルナの都に進み行く
かむながらかむながら
ああ惟神々々
みたまさちはへ
御靈幸倍ませよ

と歌ひ乍ら意氣揚々として際限もなき湖水を進み行く。
ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・三・二八 舊二・一二 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

第八章 孤島(一四八三)

テルモン湖水の真中に

波に漂ふ一つ島

全島巖に包まれて

少しばかりの笹草が

彼方此方に點々と

僅かに生えしツミの島

周回一里磯邊に

いつも荒波噛みつきて

さも凄惨の氣に充ちぬ

そも此島は罪人を

自ら命終るまで

食物さへも與へずに

流し捨つべき地獄なり

此鬼島に現はれし

憐れな人は磯邊の

逆捲く波に飛び込みて

貝をば拾ひ蟹を採り

僅かに露命をつなぎつつ

骨と皮とになり果てて

恰も餓鬼の如くなり

折から來るバラモンの

四五の勇士は船を漕ぎ

傍の沖を通る折

忽ち吹き來る荒風に

無慙や船を暗礁に

突き當て忽ちパリパリと

木端微塵に船體を

打挫きたる悲しさに

五人の男はツミの島

目當に漸く泳ぎ着き

二人は水に吞まれてつつ どころもなしに隠れける

後に残りし三人は ハール、ヤツコス、サボールの

バラモン教で名も高き 荒くれ男のヤンチャ者

漸くここに來て見れば 殺人罪の廉により

此ツミ島に捨てられし ダルとメートの兩人が

巖の穴に身を潜め 衣も着けず眞裸

髯蓬々と猿の如 髪は鳶の巢の様に

纏れからみし穴棲居 かかる所へ船を割り

漂ひ來りし三人は 先づ第一に食糧を

探らむものと磯邊を 彼方此方と探せども

寄せては返す荒波の 危ふき状に辟易し

空しき腹を抱へつつ 島の遠近ウロウロと

尋ね道遙ひ漸くに 此岩窟を見付け出し

二人の男の姿をば 見るより早く三人は

此罪人を打殺し 當座の餌にせむものと
顔見合して嫌らしく 笑を漏すぞ恐ろしき。

三人の男は漸く此島に命からがら辿り着いた。往來の船も少く、いつ迄待つても大陸へ歸る見込がない。山一面岩だらけで草の根を掘つて喰ふ事もならず、磯邊の貝や蟹を漁らむとすれども、ここは殊更湖中の波荒き所、到底一匹の蟹も一芥の貝も手に入れる事が出来ぬ。三人は餓死する外なき破目に陥つた。何か獲物もがなと、彼方此方と小さき島を隈なく探し廻り、漸く此岩窟の中に二人の罪人が瘦こけて忍んで居るのに氣がついた。三人は空腹に堪へ兼ね此二人の男を當座の餌にせむものと恐ろしき心を起し、二人の前にツカツカと立寄り、矢庭に一人を引掴み、雙方より兩の腕を以てメリメリと力限りに「むしり」取らうとした。一人の男は岩窟に隠しあつた鋭利な石刀を揮つて一人の友を救はむと立向ふた。三人は此權幕に恐れてパツと手を放した途端に、さしもに險峻な岩山を兔の如く逃げ登り、頭上より岩石の片を拾つては三人目蒐けて投げつける。三人は止むを

得ず、此危険を免れむために二人の潜んで居た岩窟の中へ身を隠した。二人の男は、最早三人の人喰ひ人種が吾が投げ下す數多の岩石に打たれて一人も残らず倒れたるならむ、久振りにて人肉の暖き奴を鱈腹喰つて元氣をつけむものと色々廻り道して、稍緩き山腹を下り磯邊を傳ふて吾住ひたる岩窟の側へ寄つて來た。見れば三人は少しの怪我もなく穴の中に鼎坐となつて胡床をかき、何事か話して居る。二人はこれを見るより「やア、まだピチピチして居る。こりや大變だ」と磯端を傳ひ、一生懸命に逃げ出す。その足音にハツと氣がつき三人は「さア、今の間に取り掴まへて口腹を充たさむもの」と一生懸命に二人の後を追ふた。二人は小石を拾ひ投げつけ乍ら逃げて行く。三人は「己れ逃がしてなるものか、山へ上げては大變」と一生懸命に追ふて行く。メート、ダルの兩人は磯端の簫を立てた様な岩の前に追ひ捲られ、進退維谷まり、死物狂となつて三人に向ひ組みついた。ここに三人の空腹者と、瘦た乍ら蟹や貝に腹を拵へ、饑餓に慣れて居る二人の男と組んず組まれつ、磯端に餓鬼同士の大活劇を演じて居る。

玉國別の乗れる船は四五丁許り沖の方を白帆に風を孕ませ乍ら走つて居る。舳

に立つて居た伊太彦は不思議な島が湖中に浮かんで居ると、よくよく見れば磯端に四五人の男が明瞭り分らねど、何か格闘をやつてる様に見える。直ちに苦葺の中に潜り込み、

伊太「もし先生、彼處に不思議な島が浮んで居ます。そして人間の影らしい者が磯端で大喧嘩をして居る様ですが一寸御覽なさいませ」

玉國「うん、大方有名なツミの島の側へ近寄つて來たのだらう、彼處には大罪人が押込めてあると云ふ事だ、可憐さうなものだな」

伊太「どうでせう、一つ船を寄せて罪人ならば尚の事、大神様の教を説き諭し、助けてやらうぢやありませんか。現在人の難儀を見て通り越すと云ふ事は吾々宣傳使の勤めではムいませぬがな」

玉國「うん、さうだ。助けてやりたいものだ。おい船頭、どうか彼の島へ船を着けて呉れまいか」

船頭の一人「はい、仰せとあれば近く迄は船を寄せて見ませうが、彼處には大變な悪人ばかりで、うつかり船でも寄せやうものなら喰はれて了ひますよ。先繰り

先繰り送られて行く奴が食物がない爲、弱い奴から喰はれて了ひ、後に残つて居る奴は手にも足にも合はぬ人鬼ばかりだと云ふ事です。上陸さへなさらねば近く迄船を寄せて見ませう」

伊太彦は又もや舷頭に立ち現はれ、

伊太「おい、船頭大變な活劇が演ぜられて居る様だ。一つ見物して行かうぢやないか」

船頭「そんなら近くまで寄せて見ませう。随分恐ろしい處ですよ」

と云ひ乍ら八挺櫓を漕いで矢を射る如く島の近邊まで船を寄せた。島の近く四五十間の間は、どうしたものが非常に波高く且つ暗礁點綴して實に危険極まる場所である。船頭は巧に暗礁をくぐり、漸くにして十間ばかり磯端の手前に近づいた。五人の男は何れもヘタヘタになつて息も絶え絶えに倒れて居る。

玉國「やア、船頭、御苦勞だがソツと船を着けて呉れ。どうやら五人の男が互に争ふた結果、息も絶え絶えになつてる様だ。何とかして助けてやらねばならぬ」

船頭「もし、お客様、あの様な者を助けやうものなら大變、此方が罪人になり、

此島へ數多の兵士に送られて永遠に捨てられねばなりません。それはお止しになつたが宜しういませう」

玉國「何、構ふものか。人の難儀を見て吾々は見逃す譯には行かぬ。さア早く船を着けて呉れ。萬一お前が船を着けた爲、罪人になる様な事があつたら、私が辨解してやらう。そして屹度助けるから安心して磯端に寄せて呉れ」

船頭の一人「そんなら仰せに従ひ、兔も角船を着けて見ませう」

と稍灣形になつた波の低き岩蔭に船を寄せた。ここに船頭は船を固く磯端の岩に縛りつけ、波に攫はれて漂流する憂ひなき様、幾筋も綱を曳いて繋ぎつけた。

玉國別一行は磯端を傳ひ乍ら、五人が倒れて居る側に荒石を跳び越え跳び越え進み寄つた。五人は宣傳使の姿を眺めて怪訝な顔して居る。

伊太彦は先づ五人の側に寄り、

伊太「お前達五人は斯んな離れ島に何をして居るのだ。見れば各自に顔から血を出して居るぢやないか。斯様な島へ罪あつて流された上は、互に仲良く暮したら如何だ」

バラモン軍のヤツコスはムクムクと起き上り、顔の血糊を手にて拭ひ乍ら、ヤツコス「私はハルナの都の大黒主様から或使命を帯びて此湖水を渡り、北に向つて進む折しも暴風に遭ひ暗礁に衝突し船體は木端微塵となり、二人の同僚は逆巻く波に吞まれ行衛不明となり、吾々三人此島に漸く漂着致しました。別に怪しいものでは無いませぬから、何卒お助けを願ひます」

メート「貴方は神様のお使と見えますが、何卒私等二人をお助け下さいませ。此三人が二時ばかり以前に此處へ漂着し、吾々二人の命をとり、餌食にせむと追ひ驅けますので、逃げ場を失ひ死物狂となつて防ぎ戦ふて居ましたが、最早力盡き手も足も云ふ事を聞かなくなりました。何卒憐れに思ひ命をお助け願ひます。そして三人は何處かへ連れてお歸り下さいませ。斯様な人喰人種が此島へ居りましては吾々は堪りませぬから」

と嫌らしい飛び出した目から涙をハラハラと流し水鼻汁を垂らして悲しげに頼み入る。

玉國別は船中に貯へあるパンを取り出し、言葉優しく五人に取らせ、且つ種々

と一同が心を籠めて介抱した。五人はパンを與へられ、又久振りでダル、メートは眞水を與へられ、嬉し泣きに泣き乍ら、一生懸命に掌を合せて拜み倒して居る。三千彦、デビス姫は言葉優く五人を勞り、足の弱つたものは手を曳き、或は肩にかけ等して乗り來りし船の側近く誘ひ來り、各自五人の體を昇く様にして船の中へ救ひ入れ、横に寝させ又もや帆を上て南へ南へと進み行く。

眞純彦は舷頭に立ち歌を歌ふ。三千彦、伊太彦は舷を叩いて潔く拍子を取る。

眞純彦　「テルモン湖水の眞中に　波を浴びつつ衝つ立てる

名も恐ろしきツミの島　人喰人種か知らねども

五人の姿を見るよりも　いとど憐れを催して

見捨て兼ねたる吾一行　危き暗礁潜りぬけ

漸く船を磯端に　繋ぎてここに上陸し

五人の男を相救ひ　目無堅間の船に乗せ

折から吹き來る順風に　帆を孕ませて波の上

船ふねにすべらして進すすみ行ゆくく
如何いかなる罪つみを犯をかせしか

事ことの次第しだいは知しらねども
人ひとは天地てんちの分わけ霊たま

ムザムザ殺ころすものならず
鳥とりも通かよはぬ此この島しまに
バラモン國こくの掟おきてとし

罪人ざいにんなりと憎にくしみて
待またすと云いふは何なんの事こと

情つれなく捨すてて自滅じめつをば
神かみが表おもてに現あらはれて

呆あきれ果はてたる制度せいどなり
惡あしき心こころや行おこなひを

如何いかなる罪つみも宣のり直なほし
改あらためしめて天國てんごくの
神み苑そのに救すくふ三五あななひの

神かみの教をしへの宣傳せんでん使し
心安こころやすかれメイト、ダル

二人ふたりの男をの子こは三五あななひの
神かみの司つかさが預あづかりて

身みを安全あんぜんに何處どこ迄までも
心こころを籠こめて守まもるべし

さはさり乍ながら兩人りやうにんよ
今け日ふを境さかひに村肝むらきもの

心こころの底そこより改あらためて
惡あくと虚偽きよぎとの行おこなひを

一時いちじも早はやく悔悟くわいごして
誠まことの道みちに適かなへかし

神は汝と俱にあり 神に任せし人の身は

世に恐るべきものはなし ああ惟神々々

神の恵みを朝夕に 心に深く刻み込み

束の間も忘れなよ 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 荒波猛り狂ふとも

假令神船は覆るとも 仁慈の神の在す限り

恐るる事はあらざらめ 勇めよ勇め皆勇め

バラモン軍に仕へたる ヤツコス、ハール、サポールよ

汝も今より心をば よく改めて三五の

誠の教を聞くがよい 汝等三人月の國

大黒主の命を受け これの湖水を渡りしは

三五教の神軍を 途中に喰ひとめ進路をば

妨げせむとの企みぞと 吾等は早くも覺りけり

さはさりながら世の中に 敵もなければ仇もない

天地てんちのあひだ間にひと人となり
 浴あびて此この世よにあるかぎ限り
 誠まこと一つをたて楯として
 互たがひにて手をひ曳ひき現うつしよ世を
 樂たのしくうれ嬉うれしくおもしろ面白おもしろく
 必かならずあく惡あくにまよ迷まよふなよ
 神かみのつかさ司つかさのます眞ま純すみ彦ひこが
 神かみにかは代かはりてと説とき諭さとす
 御みたま靈たま幸さちはひましませよせよ
 互たがひにて手をひ曳ひき現うつしよ世を
 渡わたるがひと人のつと務つとめぞや
 三あな五な教ひけうのせん宣せん傳でん使し
 荒あ波ら猛なるたけ湖うみのうへ上
 ああかむ惟な神が々ら々かむ々ながら々ら

と歌うたひなが乍ながらせん船てい底ていにこトこトとつづ鼓づみをう拍うたなせな乍ながらさい際げん限げんなきこ湖じやう上やうをす迂すりゆ行ゆく。
 (大正一二・三・二八 舊二・一二 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第九章 湖月〔一四八四〕

浪より出でて浪に入る 玉兔の玉國別司

初稚姫の賜りし 目無堅間の船に乗り

果しも知らぬ湖原を 五人の男を救ひつつ

歎乃高く潔く 歌ひて進む浪の上

星の光はキラキラと 深く沈める湖の底

天津御空も船底も 金砂銀砂を鏤めし

其中間を渡り行く 天の河原は南北に

清く流れて果もなく 洗ふたやうな月影は

湖底深くきらきらと 銀龍の如く揺らぎ居る

ああ惟神々々 神の依さしの宣傳使

浪音清き音彦の 玉國別を初めとし

星は御空に三千彦の 姿を寫す眞純空

伊太彦一枚隔てたる 千尋の深き水地獄

デビスの姫と諸共に 聲爽かに宣傳歌

歌うたひ歌うたひて進すすみ行ゆくく

天あまの川かはら原はらに棹ささして

エデンの河かはに船ふねを漕こぎ

顯てんおんきやう恩のほ郷のほに上のぼるごと

心こころ涼すずしく勇いさましく

思おもはず知しらず進すすみ行ゆく

汗あせ拭ふき拂はらふ夏なつの風かぜ

いやな潮うしほの香にほひなく

矢やを射いる如ごとく帆ほを孕はらみ

マストは弓ゆみに曲まがりつつ

折をりから起おこる荒浪あらなみを

乗のり切きり乗のり切きる勇いさましさ

長ながらく陸路くがぢの旅たびを經へし

玉國たまくにわけ別のいつかう一行いっかうは

何なんとはなしに氣きも勇いさみ

身みも冴さえ冴さえと元氣げんきよく

沖おきの鷗かもめやアンボイナ

飛とび交かふ景色けしきを賞ほめながら

天國てんごく淨土じやうどに昇のぼるごと

風かぜに任まかして馳はせて行ゆく

危あやふき命いのちを救すくはれし

ダルとメートの兩りやうにん人は

漸やうやく元氣げんき恢復くわいふくし

皺しわが枯これ聲こゑを張はり上あげて

面おも白しろさうに歌うたひ出だす

メート「私わたしの生うまれは月つきの國くに

テルモン山さんの南麓なんろくに

首陀しゆだと生うれしメーテルの私わたしは一人ひとりの息子むすこです

三五教あななひけうの宣傳使せんでんし これの湖水こすいを渡わたらむと

いと懇ねせこにことわけて 宣のらせたまひし時ときもあれ

掟おきてをやぶると知りし乍ながら ダルと二人ふたりが船ふねを出だし

キヨの港みなとにはるばると 安着あんちやくしたる時ときもあれ

バラモン教けうの目付役めつけやく カンナ、ヘールの兩人りやうにんが

有無うむを云いはせず引捉ひつとらへ キヨの關所せきしよにつれ行ゆきて

三千五百さんぜんごひやくの筈むちをあて 揚句あげくの果はては船ふねに乗のせ

湖中こちうに浮うかぶツミの島しま 送おくり届とどけて逸いちはや早く

逃にげ行く後あとを打うち眺ながめ 悲歎ひたんの涙なみだに暮くれにける

家いへに残のこせし父母ちちははは 如何いかに過すこさせ給たまふらむ

夢ゆめになりともこの様さまを 知しらさむものと思おもへども

翼つばさなき身みは如何いかにせむ 音おとづるよしも泣逆ないじやくり吃

ダルと二人ふたりが抱いだき合あひ 世よを果敢はかなみて怖おそろしき

磯に打ち來る浪の音

頼りに月日を送りつつ

磯邊の蟹や貝を獲り

僅に露命をつなぎつつ

救ひの船の一日も

早く來れと天地の

神に祈りをかくる折

漂ひ來る三人連れ

吾等の姿を見るよりも

叩き殺して三人が

餌食になさむと怖ろしき

其言の葉を聞くよりも

狭き岩窟を立ち出でて

敵の毒手を逃れつつ

さしも嶮しき岩山を

猿の如く驅け登り

手ごろの石を手にとつて

人喰ひ人種を打ち殺し

吾身の危難を逃れむと

心を千々に碎きつつ

最早三人の食人鬼

吾なげ下す岩片に

打たれて脆くも身失せしと

思ひて窺ひ立よれば

豈計らむや三人は

岩窟の中に端坐して

白い眼を剥きながら

吾等二人の姿をば

見つけて又もや殺さむと 力限りに追ひ来る

吾等二人は大切の 命を取られぢやならないと

息絶え絶えに逃げ出し ピツタリと止まつた簫の岩

進退茲に谷まりて 窮鼠却て猫を食む

命を的に逆襲と 騎立て直す苦しさよ

茲に五人は全身の 力を籠めて揉み合ひつ

疲れて互に打ち倒れ 前後不覺になりけり

時しもあれや三五の 救ひの道を述べ傳ふ

仁慈無限の宣傳使 現はれまして吾々が

危難を救ひ給ひつつ 味よきパンを與へまし

安全無事の此船に 助けていとど親切に

吾等が住所に送らむと 宣らせ給ひし有難さ

それに引き換バラモンは ヤッコス、ハール、サボールの

情を知らぬ人畜生 取り喰はむと角を立て

迫り来るぞ怖ろしき さはさりながら吾々は
尊き神の御使に 守られ茲にある上は
最早怖るる事はなし バラモン軍の三人よ
汝も心を改めて 誠の心に立ち歸り
惡逆無道の精神を 仁慈無限の神様に
ならひて拂ひ清むべし 人は神の子神の宮
吾は元よりバラモンの 教の道の御子なれど
三五教の宣傳使 吾家に一夜泊らせて
誠の道を傳へてゆ 茲に心を改めて
御船を出し湖原を 遠く送りてキヨ港
思はぬ人に見つけられ 身の災となり果てて
人喰鬼の住むと云ふ 浪風荒き浮島に
流され居たるぞ悲しけれ 仁慈無限の大神は
珍の使を遣はして 愈吾等を救ひまし

湖路うなぢを守り給たまひつつ

送おくらせ給たまふ有あり難がたさ

假令たとへてんち天地は變かはるとも

バラモン教けうの御教みをしへは

孫子まごこに傳つたへて守まもらない

玉國たまくに別の宣傳せんでん使

其外そのほか百の司達つかさたち

吾等われらを憐あはれみ給たまへかし

皇大神すめおほかみの御前おんまへに

赤心まごころ捧ささげ兩人りやうにんが

謹つしみ敬あやまひ願ねぎまつる

バラモン軍ぐんの捕手とりて、ヤツコスふなばたは舷たに立たつてそろそろ歌うたひ出だした。

ヤツコスつか、バラモン軍ぐんに仕つかへたる 吾われはヤツコス目付役めつけやく

四人よにんの部下ぶかを引ひき連つれて テルモン湖上こじやうを打うち渡わたり

ニコラス大尉たいいゑの後あとを追おひ 三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

若もしも湖水こすいを渡わたりなば 引ひつつか 捉つかまへて懲こらせよと

大黒主おほくろぬしの命めいを受け 船ふねに眞帆まほをば孕はらませて

北へ北へと進む折
俄の颶風に出會し

船は暗礁に乗り上げて
船體忽ち粉微塵

衣類を脱ぎすて辛うじて
荒浪猛る罪の島

命辛々泳つき
食を求めて遠近と

彷徨ひ廻れど浪荒く
一つの餌食も無かりしゆ

三人は磯邊をぶらぶらと
足もとぼとぼ歩みつつ

岩蔭さして立よれば
骨と皮との二人連れ

人喰人種にあらねども
飢たる時には是非もなし

心を鬼に持ち直し
二人の男を打ち殺し

一時の飢を凌がむと
心にもなき惡逆を

企みたるこそうたてけれ
生れついでに鬼でない

仁義道德一通り
習ひ覺へた人の子よ

さはさりながらやむを得ず
小人下司の常として

窮すれや亂すといふ譬
心ならずも惡業を

企たくみたるこそ是非ぜひもなき 優勝劣敗弱肉強食いうしよつれつばいじやくにくきやうじよく

世界せかいに倣ならふて果敢はかなくも 皇大神すめおほかみの御教みをしへを

忘わすれたるこそ苦しくるけれ 三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

心こころも清きよき玉國たまくにの 別の命わけ みことが現あらはれて

敵かたきと狙ねらふ吾々われわれを 救すくはせ給たまひし有難ありがたさ

天あめが下したには敵てきなしと 教をしへられたる言ことの葉はは

今いま目の當あたり悟さとりけり 吾等われらも是これより愼つつしみて

殘虐無道ざんぎやくぶだうの行動かうどうを 改あらため神かみの御爲おんために

誠まことを盡つくし世よの人ひとを 救すくひて人ひとと生うまれたる

其その天分てんぶんを盡つくすべし 三五教あななひけうの神司かむづかさ

吾等われらが心こころを憐あはれみて 尊たふとき君きみの御伴おんともに

使つかはせ給たまへ惟神かむながら 神かみに誓ちかひて願ねぎまつる

朝あさひ日は照てるとも曇くもるとも 月つき落おち星ほしは失うするとも

假令命たとへいのちは捨すつるとも 深ふかき恵めぐみを蒙かうむりし

司つかさの君きみの高恩かうおんは 子孫しそんに傳つたへて忘わするまじ
此世このよを造つくりし神直日かむなほひ 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ
總すべての罪つみを悉ことごとく 宣のり直なほします三五あななひの
尊たふとき神かみの御心おんこころ 深ふかくも感謝かんしゃし奉たてまつる
ああ惟かむながらかむながら神々々かむながらかむながら 御靈みたま幸さち倍はへませよ
御靈みたま幸さち倍はへませよ

ハールは又また歌うたふ、

ハールハール一切いっさい萬事ばんじの經緯いきさつは 目付頭めつけがしらのヤツコスが
概略がいりやく茲ここに述のべました 私わたしも元もとはウラル教けう
信者しんじやの端はしに加くははりて 神かみの教をしへを崇あがめつつ
其日そのひを送おくり居あたりしが 何分酒なにぶんさけに身みを崩くづし
二世にせと契ちぎつた女房にようぼうに 夜脱よぬけせられて是ぜ非ひもなく
彼方あなた此方こなたに彷徨さまよひつ 心こころは日ひに夜よに僻ひがみ行ゆく

もう此上は盗人の

群に加はり長からぬ

浮世を太く暮さむと

心を鬼に持ち直し

思案に暮るる折もあれ

バラモン教のヤッコスが

情の言葉に絆されて

茲に目付の役となり

一年前から忠實に

目付の役を勤めつつ

此湖原を越え来る

三五教の司をば

一人残らず引捉へ

吾身の出世を誇らむと

思ひ居たるぞ果敢なけれ

まだ幸に一人の

三五教の信者をも

神の司も捉まへず

罪を重ねし事なきは

せめては私の胸やすめ

三五教の神司

私は唯今述べました

やうな身分でムいます

如何なる罪がありとても

廣き心に宣り直し

赦させ給へどこ迄も

御伴に使ひ給へかし

神かけ念じ奉る

ああ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸倍ましませよみたまさちはへ

と述懐じゆつくわいの歌うたを歌うたふ。かかる所ところへ七八艘しちはつさうの海賊船かいぞくせん、船ふねの行手ゆくてに横梯陣わうていぢんを張り、前途ぜんとを壅塞ようそくし、手具脛てぐすね引ひいて待ち居をるものの如ごとくであつた。ああ玉國別たまくにわけの一行いっかうは如何いかなる運命うんめいに遭遇さうぐうするであらうか。

(大正一二・三・二八 舊二・一二 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

第三篇 千波萬波せんぱばんぱ

第一〇章 報恩ほうおん〔一四八五〕

玉國別一行の搭乗した船は假に初稚丸と命名された。その理由は初稚姫に危急の場合この堅牢なる船を與へられたからである。月照る湖面を白帆をかかげ南へと急速力にて翔つて行く。前方に當り七八艘の船が單梯陣を張つて初稚丸目蒐けて押し寄せ來る形勢が見えて居た。ヤツコスは之を見るより早く、ヤツコス『もし、御一同様、あの前方に竝んでゐます七八艘の船は此湖に陰顯出沒して南北往來の船を掠める賊船でムいます。捉まつては一大事ですから何とか工夫をせなくてはなりませんまい。私はこれから舳を少しく西南に向けやうと思ひますから其覺悟で居て下さい。西南へ向ひますれば暗礁點綴して容易に賊船は追つ驅ける事は出來ませぬ。然し私も表面バラモン軍に仕へ目付頭を致して居りますが海賊の大親分です。船路の様子を知つてるのは私許りです。もしも強敵に出會つた時は、何時も此航路をとり逃げます。追驅けて來た船は必ずその邊で難船し、或は沈没するものです。左様さして頂いても宜しいか』

玉國『船路の勝手を知つてるお前に何事も一任する。さア早くその用意をして呉れ』

ヤッコス「はい、御恩の報じ時でムいます。然らばこれから私が船を操ります。と櫓を握り八人の水夫に一生懸命に櫓を漕がせ矢を射る如く走り出した。賊船は一生懸命に舳を轉じ初稚丸の後を追ふて追驅け来る。

ヤッコスは一生懸命に水夫を勵まし、櫓を漕ぐ。漸く危険区域に船が差蕪つた時、賊船の二三艘は早くも舷々相摩する處迄、近づいて来た。さうして錨を初稚丸に投げつけた。初稚丸は到頭おつつかれて了つた。グツグツして居る間に八艘の船は初稚丸の周圍に船垣を作り、各自に弓を満月に絞つて威喝を試みて居る。

ヤッコスは大聲をあげ、ヤッコス「オイ、貴様等は賊船ではないか。俺を誰と心得てる。賊船頭のヤッコスだぞ。俺は今大黒主の命令によつて三五教の宣傳使を捕縛し、キヨの港の關所に送る途中だ邪魔をひろぐと容赦は致さぬぞ」

八艘の船を統率して居た海賊のデブは舷頭に立ち、デブ「あ、親方でムいましたか。えらい失禮を致しました。貴方のお乗込の御用船とは知らず、よい獲物が現はれたと、全隊を引率れて、ここ迄おつ驅けて來ま

した。誠に濟まない事を致しました。何卒お許しを願ひます」
ヤッコス「今後は必ず心得たが宜からう。其方が安閑として此湖上に悪性商賣が
出来るのも皆此ヤッコスがバラモン軍の目付頭になつて餘徳ぢやないか。俺が
一つ首を振らうものなら、忽ち數千人の軍隊を以て貴様達を捕縛し、且貴様等の
住宅を皆知つてゐるから、妻子眷族も召捕つて重い成敗に會はされるのだ。それよ
りもこれから北へ北へと進んで、三五教の宣傳使が七八十人やつて來るから、そ
れを捕縛すべく進んだが宜からう。それを巧くやつたならば、其方に望み次第の
褒美を、關所の役人に執持つて貰つてやらう。さア行け。後に居る奴は皆弱蟲許
りだ。一番強い奴はここに五六人ふん縛つて連れて來たのだ。グヅグヅしてゐる
と影を見失ふかも知れぬぞ。早く船を引返し、眞北に向つて進んだが宜からう」
デブ「はい、承知致しました。何分宜しう願ひます。さア皆の者、舳を北に向け、
急速力で漕ぎ出せ」
と命令した。忽ち八艘の船は船首を北に向け一生懸命にグイグイと櫂の音賑しく
鳥の飛つ如き勢で遠ざかり行く。

ヤッコス「アハハハハ、もし、玉國別の宣傳使様、悪人も斯んな時には間に合ふものでムいませうがな。私も昨日迄のヤッコスであればここで怎んな謀反を起すか分らないのですが、貴方等の仁慈無限のお心に感じ、今迄やつて来た事が恐ろしくなりまして、今日は漸く人間らしい気分になりました。神様の教を聞いたものが嘘偽りを申すのは誠に濟まぬ事とは存じ乍ら、此場合臨機應變の處置を採らなくてはならぬと存じ、心にもなき偽りを申しました。何卒神様にお詫を貴方様からして下さいます様お願致します」

と眞心を面に現はして頼み入る。

玉國「ハハハハやア感心だ。人喰人種が俄に如來様になつたのだな。それではダル、メート様も、もはや喰はれる心配もないから今迄の怨みをスツクリ湖に流して同じ船の一蓮托生、和氣霽々と打解て此湖を渡らうぢやないか」

バラモン組、竝にメート、ダルの兩人は「ハイ」と嬉しげに差俯向き涙さへ滲ませて居る。

ヤッコスは櫓を操り乍ら歌ひ初めた。一同は舷を叩いて賑々しく之に和した。

その聲は水面に響き渡り海底の龍神を驚かす許りに思はれた。

ヤツコス^ヨテルモン湖水に昔から 鬼よ悪魔と呼ばれつつ

往來の船を引捕らへ 寶を奪ひ衣を剥ぎ

尊き人の命まで とりて其日を送りたる

悪逆無道のヤツコスも バラモン軍の勢に

辟易してゆ黄白を 數多散じて賄賂とし

キヨの港の關守に うまく取入りバラモンの

目付頭と選まれて 密かに海賊使役しつ

悪と虚偽とに日を送る 此ヤツコスも天命盡き

勝手覚えし海原も 俄の暴風に進路をば

謬り暗礁に乗り上げ 木端微塵に船碎き

ここに五人は眞裸體 波を潜りて漸くに

水泳に長けた三人は 人の恐れて寄りつかぬ

荒波狂ふツミ島へ 命からがら泳ぎつき

飢に迫りて罪人を 屠り殺して喰はむと

力限りに格闘し 互に體は疲れ果て

息も絶えむとする時に 仁慈無限の三五の

教の道の宣傳使 現はれまして吾々が

危き命を救ひまし 清き教を諄々と

説き玉ひたる有難さ 流石無道の吾々も

神の御聲に目を覺まし 有難涙にくれ乍ら

初稚丸に乗せられて キヨの港に歸らむと

波に漂ふ折もあれ 前方に浮ぶ八艘の

船は正しく吾部下の デブの率ゆる賊船と

見るより早く進路をば 轉じて湖中の危険地と

聞えし灘に駆け向ふ 湖に慣れたる賊船は

矢を射る如くおツついて 思ひも寄らぬ獲物ぞと

四方八方取圍む

海より深き恩人の

命を救ひ高恩に

報ひまつるは此時と

幸ひ部下のデブ以下に

嚇し文句や偽を

竝べて漸く追ひ散らし

初めて胸もサヤサヤと

晴れ渡りたる月の空

實にも芽出度き次第なり

ああ惟神々々

御靈幸倍ましまして

暗礁點綴する湖を

無事に彼岸に達せしめ

吾等一行をやすやすと

キヨの港へ着かしめよ

思へば思へば昔より

神の心は露知らず

善と眞とに背を向け

悪と虚偽とに一心に

心を曇らせ居たるこそ

實にも愚の至りぞと

省みすれば後の世が

いと恐ろしくなりにけり

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直し聞き直す

三五教の大御神　　今まで犯せし身の罪を
 赦させ玉へと願ぎ奉る　　朝日は照るとも曇るとも
 月は盈つとも虧くるとも　　これの湖水は乾くとも
 假令命は失するとも　　一旦神に眞心を
 捧げ奉りしヤツコスは　　如何でか曲に溺れむや
 憐れみ玉へ惟神　　皇大神の御前に
 畏み畏み願ぎ奉る

斯く歌ひ乍ら漸くに船首を再び西南に轉じ潮流にのつて月の海面を迂り行く。

(大正一二・三・二九 舊二・一三 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第一章 歎乃(一四八六)

漸やうやくにして月は西にしの波間なみまに沈しづみ、星ほしは次第しだい々々しだいに隠かくれ、東ひがしの波間なみまよりはカツと明あかりがさして來きた。雲くもか波なみか、天てんか海うみか、區別くべつのつかぬ遙はるかの空そらは次第しだい々々しだいに茜あかねさし、湖上こじやうを渡わたる百鳥ももどりの聲こゑは數千すうせん人の樂隊がくだいの一時いちじに樂がくを奏そうする如ごとく頭上づじやう一面いちめんに聞きこえて來きた。白しろ、青あを、黒くろ、緑みどり、黄色きいろ、赤等あかなどの色々いろいろの羽はねを翻ひるがへして前後ぜんご左右さいうに飛とび交かふ水鳥みづどりの影かげは實じつに壯觀さうくわんであつた。

玉國たまくにわけ別わけは舷頭げんとつに立たち現あらはれ、東ひがしの空そらに向むかつて拍手はくしゆし天津あまつ祝詞のりとを奏上そうじやうし、航路かうろの無事ぶじを祈願きぐわんした。續つづいて三千みちひこ彦そのほか其外いちどう一同たまくにわけは玉國たまくにわけ別わけに倣ならつて東方とうほうを拜はいした。輪廓りんくわくの八ツやちキリした巨大きよだいな太陽たいやうは湖水こすいの中なかから覗のぞき初はじめた。夏なつの朝あしたの海上かいじやうは又また一ひと入爽快しほさうくわいなものである。

玉國たまくにわけ別わけ 雲くもか波なみか天あめと地つちとを結むすびたる

帳とばりを分わけて浮うかぶ日ひの神かみ。

今日けふも亦またこれの海路うなぢの幸さきくあれと
心こころも清きよく祈いのりけるかな。

百鳥もどりは波なみの上うへをば迂すべりつつ
吾わが乗のる船ふねを守まもるべらなり」

三千彦みちひこ「テルモンの峰みねの頂上いただきほのぼのと
波なみに浮うかびて明あかくなり行く」

眞純彦ますみひこ「何なに一つ眼まなこに入いらぬ湖原うなばらも
テルモンの山やまの姿すがたのみ見みゆ。
テルモンの山やま打うち仰あふぎ思おもふかな
ケリナの姫ひめは如何いかに在ますかと」

伊太彦いたひこ 又またしても姫ひめの事ことのみ氣きにかかる

教司をしへつかさの心怪こころあやしき

眞純彦ますみひこ いたいけな女をんなを思おもふ誠心まごころは

男子をのこの中なかの男子をのこなるぞや

伊太彦いたひこ 何事なにことも女をんなならでは夜よが明あけぬ

世よの諺ことわざを眞まに受うけし君きみ。

女をんなのみ此この世よにゴラゴラ居をるならば

如何いかで榮さかえむ天地あめつちの間うち

三千彦みちひこ「益良夫ますらをが思おもひつめたる眞心まごころは
通かよはざらめや女心をんなごころに」

伊太彦いたひこ「よくもまア惚のろけたものだ三千彦みちひこの
目鼻めはなの位置ゐちも何時いつか變かはりぬ」

デビス姫ひめ「益良夫ますらをの中なかに交まじりて只一人ただひとり
胸むねを痛いためつ御後みあとに従したがふ。

男子をのこのみ如何いかに力ちからが在ますとても

女をんなの目めには敵てきし難がたけむ。

只一目瞳ただひとめひとみを清きよく射照いらせば

春はるの氷こほりの一ひとたまりなし」

眞純彦ますみひこ 猛烈な二人の戀にせめられて

吾は言葉もつまりけるかな。

呆れ果て物さへ云へぬ船の上

潮三千彦の思ひやらるる

ヤッコス 皆様は暢氣な事を言ひ交はし

笑はせ玉ふ身こそ羨めし。

朝夕に心の鬼に怖ぢ乍ら

悪を行ふ身こそ悲しき。

一日も心安けく送りたる

時ぞ無かりし賊の身の上。

さり乍ら神の教を聞きしより

心安けくなりけるかな

ハール 吾も亦心の鬼は何處へやら

逃げ失せたりし心地こそすれ。

悪き事なす程馬鹿が世にあるか

寝ても覺めても心おぢおぢ。

今となり誠の道の味はひを

覺りけるかな神の恵に

サボール 世の人に懶怠漢よサボールと

譏られ月日を送りたる曲。

曲神も心の空に月照りて

吾身も廣く安くなりける

メー ト 恐ろしきメー トの旅をなすのかと

思ふ間もなく救はれにける。

冥土行き神に救はれ之からは

誠の道にメー トル上げむ

ダル 手も足も瘦衰へてダルの吾

蟹や貝にて露命つなぎつ。

久振りうましきパンを與へられ

蘇生りけり餓鬼の吾々

玉國別 天地の神の恵みは海原

廣けき波の底ひ知られず。

いざさらば心の駒を立直し
進みて行かむ神の御國へ

デビス姫は舷頭に立ち湖面の風景を眺め小聲になつて歌ひ初めた。

デビス姫 久方の天津御空を

打仰ぎ大海原を

打眺めよくよく見れば

天地の神の功業は

目のあたり現はれましぬ

あな尊あな畏しや

あなさやけ天津日影は

海原を照らして昇り

御光を天地四方に

配くばらせつ百ももの人ひと草ぐさ

草くさや木きの片かきは葉はの露つゆに

至いたる迄まで宿やどらせ玉たまふ

大おほ稜みいづ威しかい四なみ海なみの波なみは

穩おたやかに治をさまりまして

常とき磐はぎ木まの松まつの緑みどりは

すくすくと生おひた立ち茂しげり

春はる來くれば百もも花ばな千ち花ばな

咲さき匂におひ神かみの御みくに國くには

眼まのあたり開ひらけ進すすみて

勇いさましや波なみ漕こぐ船ふねの

すくすくと彼あなた方あなたの岸きしに

渡わたらひの神かみの使つかひの

宣せんでん傳し使ま眞まさ幸さきくあれと

宣のり奉まつる朝あさひ日は照てるとも
曇くもるとも月つきは盈みつとも
虧かくるとも星ほしは空そらより
落おつるとも誠まこと一つの
三五あななひの教をしへの道みちは
世よを救すくふテルモン山ざんの
神館かむやかた小國をく別の
父ちちの前まへ母ははの御側みそばを
相離あひはなれ千里せんりの海うみを
乗のり越こえて萬里ばんりの旅たびに
出いでて行ゆく吾われは女をんなの
身みなれども男子をのこの中なかの
男子をのこなる玉國たまくに別の
神司かむつかき心こころの空そらも

眞純彦喜び胸に

三千彦の吾背の君に

従ひて曲の征途に

上り行く吾身の上ぞ

樂しけれ此世を造り

玉ひたる國治立の

大御神豊國主の

神柱神素盞鳴の

瑞御靈齋苑の館や

コーカスの珍の聖地に

現れまして天ヶ下なる

諸々を救ひ助けて

神の世の無限の歡喜を

與へむと聖き心を

配くばりまし百ももの司つかさを

任まけ玉たまひ魔ま神がみの猛たけぶ

葦あし原はらの島しまの八や十そ島

八や十その國くに彌いや永とこ久しへに

治をさめむと仁みろく慈こころの心こころを

現あらはして勵はげみ玉たまふぞ

畏かしこけれ勵はげみ給たまふぞ

畏かしこけれ

あかむあな惟ながら神かむ々ながら

御み靈たま幸さちはひまましませよ

あかむあな惟ながら神かむ々ながら

御み靈たまの恩ふ頼ゆを願ねぎまつる
』

船せん頭とうのイールは櫓ろを操あやり乍ながら聲こゑも涼すずしく歌うたひ初はじめた。

イール 北見の濱を立出でて

南をさして進み行く

吹き来る風はそよそよと

汗に「にじ」んだ顔洗ふ

極楽浄土か天國か

波は平に安らかに

船底静に鼓拍つ

波から出でて波に入る

月日の影も清らかに

夜と晝との隔てなく

光りを投げる湖の面

雲の空行く此船は

天の川原を打渡る

目無堅間の神の船

鳥は中空に嬉しげに

チンチンチユンチユン啼き亘る

波はドンドン鼓拍つ

天の川原に船泛べ

棚織姫が漕ぎ渡る

ここは龍宮の波の上

乙姫さまも嘸や嘸

空を仰いで行く船を

笑を湛へて見てムらう

千尋の海を渡り行く

天津御空か中空か

月日も星も下に照る

月は波間に輝き玉ひ

海の底には星の影

天の川原が横はる
 空漕ぎ渡る玉の船
 如何に荒波猛るとも
 神の守りの此船は
 嚴の御靈の救ひ舟
 瑞の御靈の守り舟
 千里の波を打渡り
 心やすやすキヨ港
 水は紫野は青く
 花咲き匂ふ國へ行く

聲もなだらかに海に慣れたる調子で歌ひ乍ら櫓を操り進み行く。

(大正一二・三・二九 舊二・一三 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第一二章 素破抜(一四八七)

南北二百里の航路にはそろそろ退屈気分が漂ひ、いろいろと腮を解く雑談が初まつて来た。彼方にも此方にも缺伸に節をつけたり放屁を刻んだり、他愛もなく

笑ひ狂ふて居る。ダルは船中の無聊を慰むる爲め、骨と皮との餓鬼のやうな體を前後左右に揺り阿保陀羅文句を竝べだした。

ダル「カカポコカカポコ、ポコポコポコ。エー憚り乍ら、所は何處と尋ねま

したら、愛想もこそ月の國、人を取り食ふ曲津神八岐の大蛇の住家なる、大雲

山の岩窟に、後前バラバラバラモンの、神を祭つた洞の中、中はホラホラ外は

スブスブと、焼野の鼠ぢやないけれど、この世を亂すバラモンの、ガラク夕神が

巢をくんで、彼方此方と驅け廻り、人の女房を誘拐し、汗水垂らして儲けた金を、

スツカリコンのコンコロコンと、引つたくり、六百六號の御開山、鼻落ち女に現

をぬかし、終の果にはフガフガと、鼻聲交りに、痘痕の面を曝しつつ、人に

は嫌はれ鬼や悪魔と厭がられ、一人よがりの【ヒヨットコ】男、此處にも一人や

三人は、あるかも知れないバラモンの、泥棒上りの目付役、おつとどつこい間違

つた。泥棒やめて神様の、誠の教に【コツクリコツ】と歸順をなされました。そ

れは誠に誠に御結構とは云ふものの行先が、私は案じられてなりませぬ。キヨの

港に着いたなら、ウンバラサンバラ、バラバラバラバラバラモンの、捕吏の奴

等がやつて来て、玉國別の宣傳使、神の使を初めとし、俺達二人を引んづかみ、
惨い目見せて呉れむずと、心の鬼が角生やし、待つて居るのに違ひない、カカポ
コカカポコ、ポコポコポコ。人の心は分らない、改心したと見せかけて、これの
湖水をまんまと渡り、岸へヒヨツクリコと登るや否や、又もや地金を現はして、
目付の役を振り廻し、難い顔をして居るだらう。何程改心したとて、瓦は黄金
になりはせぬ。身魂の悪い曲津神、何を云ふやら蜜柑やら、金柑枳で量るやら、
橙だいの厄介物よ、これを思へば迂つかりと、温い夢みてネーブルと、云ふよな
譯には參らない。罪の島へとやつて来て、蟹や貝をば漁りつつ、寄せ来る浪にも
怯ぢ怖れ、腹はペコペコ胃袋を、充實させむと穴さがし、岩窟の口へとやつて來
て、俺等の兩腕引摺み、バラバラバラと引き裂いて、頭からかぶらうとした奴は、
矢張り鬼の性來だ。これを思へば怖ろしや、チャカポコチャカポコ、ポコポコポ
コ。これこれ申し皆さまよ、随分用心なさいませ、虎狼を船に乗せ、虎穴に入つ
てやすやすと、睡つて居るよな劍呑さ、それより一層今此處で、同盟軍を組織し
て、改心したと見せかけて、猫を被つて居る狸、成敗したらどうでしよか、後の

後悔間に合はぬ、こんな奴等の命をば、助けた所で世の爲に、一つもなるでは有らうまい、お米が高うなる許り、製糞機械がウヨウヨと、辛い時節に迂路づいて、コソコソコソと暗いところ、穴のありかを嗅つけて、スパイの役をする餓鬼は、人間姿の犬畜生、仇を打つなら今ぢやぞや、チャカポコチャカポコ、ポコポコポコ、骨と皮になり果てた、ばつちよ笠見たよな俺等の、肉でも叩いて喰はうと、企んだ餓鬼は怖ろしい、因縁悪い生れつき、可愛さうだと思へども、吾身が可愛と思ふたら、敵をムザムザ許せない、悪人輩を平げて、根底の國へ追ひやれば、キツと世界の爲となる、空平も助も、田吾作も喜んで、お前は世界の救ひ主、偉い手柄をして呉れた、餅でもついて祝はうと、近所合壁呼び集へ、疝瘡や痒癬の親方を、ようま殺して下さつた、なぞと云ひ云ひ手を拍つて、踊り狂ふに違ひない、ああ面白い面白い、バラモン軍の目付け役、ヤツコス、ハール、サボールの、鷹改心の御大將、茲に本音を吹くがよい、海賊船に出會つた時、お前の視線が何となく、奇妙奇怪にキラキラと、光つて居たのを一寸見た。あの八艘の賊船は、初稚丸が安々と、【キヨ】の港へ着いた時、關守さまと腹合せ、先へ歸つて待つて居

て、苦勞もなしに吾々を、一網打盡にふん縛り、甘く目的達成し、ハルナの都の鬼神の、前に手柄を立てやうと、深く企んでムろがな、そんな企みの分らない、玉國別の神司、神の使ぢやない程に、改心するのがお身の徳、ダルに的切り圖星をば、指されて胸が痛からう、假令天地は變るとも、ダルの言葉は變らない、俺の眼で睨んだら、決して間違ひ無い程に、コラコラどうだバラモンの、惡逆無道の目付役、もう斯うなつた上からは、お前の心の黒幕を、薩張こんと打ちあけて、心の底のどん底の、暗い穴迄見て置いた。これに間違ひあるまいぞ、これこれ皆さまこのダルが、申す言葉を疑はず、固く信じて下さんせ、私は觀相に妙を得た、イヅミの國で名の高い、ダルのシヤンクと云ふ男、天眼力で調べました、この大湖の中央で、一つの成敗なされませ、後で後悔せぬやうに、夫れ夫れ御覽、心の色が現はれた、青い顔してビリビリと、手足はワナワナ慄ひ出す、これが外れぬ證據です、ああ惟神々々、叶はぬからとて涙ぐみ、魂は中空に飛び散つて、ズ蟹のやうに目玉迄、一寸先へつん出てる、さても愚僧が三千世界を遍歴し、數千萬の人相を、取り調べたる經驗上、どうしても此奴は惡人だ、芝をかぶらに

や直らない、地獄に籍をおいて居る、奸怪變化の容器だ、ああ惟神、あのまア目玉の飛び出やう、アハハハハツハ、アハハハハ。呆れて物が云はれない、頭を掻いて俯向いて、青い顔して泡を吹く、イヒヒヒヒツヒイヒヒヒヒ。種々雑多と言葉を構へ佯り竝べて肝腎要の命をば、暫しながらへ、陸に登つた其上で、以心傳心關守と、異様な眼を交換し、威張り散らしてインチキに、かけて吾等を縛らむと、企む心は顔色に、すつかり見えて居りますぞ、ウフフフツフ、ウフフフ。うかうか致して居りたなら、動きの取れぬ事になる、甘い言葉を竝べたて、甘い汁をば絞らうと、甘く企んだ大泥棒、バラモン教の目付役、ヤツコス、ハール、サボールの、迂散な顔を見なされや、うるさい奴が乗つたものだ。エへへへへツへ、エへへへへ。えぐいと云つてもこれ位、えぐたらしい、餓鬼どもが又と世界に有りませうか、遠慮會釋はいらないで、今から師弟の縁を切り、「えたい」の知れぬ餓鬼共を、一つ成敗なされませ、オホホホツホ、オホホホホ。怖ろし企みを懐いてる、鬼が大蛇か曲神の、お化に等しき横道もの、心の底が現はれて、思へば思へばお氣の毒、恐れ入つたかバラモンの、海賊上りの目付役、俺の言葉

が違ふたら、お前の前で尻まくり、犬蹲になつてやる、カカカカツカ、カカカカ力。叶はぬ時の神頼み、蟹のやうなる泡吹ひて、悲しみ歎いて見た所で、もう勘忍は出来ないで、觀念するのが第一だ、チャカポコチャカポコ、ポコポコポコ、未だ未だ先はあるけれど、頂くお金の愛想だけ、此先聞うと思ふたら、お金を澤山下しやんせ、肝腎要の正念場、供養の爲にダルさまが、ゆるゆる申し述べませう、カカポコ カカポコ ポコポコポコ

ダルに素ツ破抜かれて、ヤツコス外二人は顔色を變へ、肩で息をして船底へ小さくなつて踞で居る、伊太彦は三人の前に進み寄り、伊太「オイ、ヤツコス、お前達は何さう鬱いで居るのだ。滑稽交りの阿呆陀羅がお前達は氣分が悪いのか、誰があんな事本當にするものか、間違つて、よしやお前達がダルの云つた通りの悪人であつたにせよ、酷い事はしないよ。そんな事をする位なら、罪の島へ残して置くのだ。吾々は紳士的態度を取るものだ。決して卑怯な事はしないよ。夫よりも歌でも歌つて機嫌を直したまへ。玉國別の先生だつて些とも氣にかけてゐるやうな方ではないからなア」

ヤッコス「ハイ有難うムいます。それを承はつて安心致しました。ダルの奴どこ迄も私を恨んであんな讒言するのです。何卒御推量下さいませ」

伊太「ヨシヨシ、誰も彼れもみんな、心の盲は居ないから、腹のどん底迄分つて居るのだ。假令假にお前がダルの云つたやうな事を企んで居つたつて、そんな事にびくつくやうなものは一人も居ないのだから、安心したがよからう。お前も一つ歌でも歌つて船中の無聊を慰めたらどうだ」

ヤッコス「ハイ、有難うムいます。そんならお言葉に甘へ長の航路でムいますから、不調法ながら歌はして頂きますせう」

伊太「ヨシヨシ、何でも構はぬ、一つ機嫌を直して歌つてくれ」

ヤッコス「ハイ有難う、御免下さい」

と云ひ乍ら、ダルの前にツカツカと進み、ダルが左右の耳を自分の両手でグツと握り、顔を前へ突き出して、一口歌つては、首をしゃくり、一口歌つては首をしゃくり乍ら辨解的阿呆駄羅經を喋り出した。

(大正一二・三・二九 舊二・一三 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

第一三章 兔耳（一四八八）

ヤッコスは自分の辨解を兼ね、且つダルが自分の内心を素破抜いた其恨に報いむと、下女が鍋の耳を掴んだやうな調子で抱へ乍ら、歌の節につれ、ダルの首を「しゃくり」つつ臭い息を顔に遠慮會釋もなく吹きかけ唼鳴り初めた。

ヤッコス「エーエ、憚り乍ら一寸御免を蒙りまして、三五教の神様の、大神徳に歸順した、ヤッコス司が一場の、お經の文句を唱へ上げますならば、チャカポコ

チャカポコ ポコポコポコ」

ダル「こりやこりや、さう耳をしゃくつては痛いぢやないか、放さぬかい」

ヤッコス「エー、なかなかなかなか、此耳放してなりませうか。ズ蟹のやうに泡をふくの、目玉が一寸飛び出したのと、善言美辭の神様の、教を罵り聞き乍ら、悪言暴語のダルの口、一つ懲してやらなけりや、私の男が立ちませぬ、自分の心に引き比べ、正真正銘正直の、ヤッコスを捉まへて、大勢さまの目の前で、讒言するとは何の事、決して許しはせぬほどに、こりやこりや がりぼし瘡つぽし、

バツチヨ笠のやうな態をして、骨と皮になり乍ら、腮を叩くも程がある、貴様の耳は兔耳、握つた上は中々に、放しはせぬぞこりやどうだ、誠に濟まぬ事許り、申しましたと皆さまの、お前でお詫をすればよし、性懲もなく何時迄も、頑張り散らす其時は、俺も承知をせぬ程に、サアサアどうだ【がりつぽし】、貴様の目玉は何の事、道案内の表札を、立てて置かねば分らない、目玉が奥に引つ込んで、おまけに白眼が七八分、これでも矢張人間の、面ぢやと思ふて居よるのか、大化物か馬鹿者か、合點のゆかぬ馬鹿者ぢや、貴様の眉は何の事、千切れ千切れのベラサク眉、毛蟲のとまつたやうぢやぞや、鼻の柱は胡坐かき、不整頓なる小鼻奴が、眼鏡のやうについて居る、口は鰐口齒は出齒で、加之に前齒が缺けて居る、腮の短いこの面は、譬方ない畜生面、こんな口からベラベラと、何の誠が喋舌りよか、身の程知らぬもあんまりぢや、こりやこりやも一つ揺らうか、痛いと云つても俺の耳、決して痛くはない程に、アハハハツハ、アハハハハ、呆れて物が云はれない、イヒヒヒツヒ、イヒヒヒヒ。歪み面陰氣な顔の眞中に、歪んだ鼻がドツカリと、胡床をかいて居やがるわ、ウフフフツツ兔耳、驢馬の土産にや

つたなら、定めし満足するだらう、エへへへッへ、エへへへへ、偉相に吐す減
ず口、四角い口を不行儀に、厚い唇つき出して、馬來人種がやつて来て、運上と
るやうな妙な口、オホホホツホ、オホホホホ、おづおづ致して慄うてる、骨と
皮との「がり」坊子、どこを押したらあんな事、ようまあ吐せたものだなア、貴
様は人に禍を、被せて喜ぶ曲津神、滅多な事を喋舌りよると、此儘承知しはせぬ
ぞ、俺でも矢張神の子だ。一時雲に包まれて、悪魔の擒となつたとて、何時迄そ
れで居るものか、馬鹿にするのも程がある、ま一度腮を叩いて見よれ、此儘許し
はせぬ程に、チャカポコ　チャカポコ」
ダル「こりや、よい加減に放さぬかい、耳が千切れるぢやないか。肝腎要の企み
を云ひ當られて腹が立つのも最もだが、貴様も茲が好い改心のし時だ。これ痛い
わい、何しやがるのだ、放さぬかい」
ヤツコス「放さぬ放さぬ放さぬぞ、このヤツコスはどこ迄も、耳の千切る所迄、
因縁説いて聞かさねば、どうしても胸が治まらぬ、これや　これや　どうだダル
の奴、今迄申た悪垂口、誠に濟まぬ嘘許り、申ましたと宣り直し、玉國別や其外

の、神かみの司つかさの疑うたがひを、晴はらして呉くれよ何處迄どこまでも、俺おれは此耳このみみ放はなさない、何なんだい涙なみだを出だしやがつて、貴様きさまは卑怯ひげふな奴やつだなア

側そばに見みて居ゐた、メートは耐たまり兼ねかね、又また後つしから、ヤツコスりやうほうの兩方みみの耳みみをグツと握にぎり、

メート「こりやこりや惡漢わるものヤツコスよ、亂暴らんぼうな事ことを致いたすなよ、吾身わがみを抓つめつて人ひとの痛いたさを知しれと云いふ事ことは、昔むかしの聖者せいじゃの御教みをしへだ、俺おれも貴様きさまの兩耳りやうみみを、握にぎつて思おもひ知しらしてやる、これやこれや痛いたいか痛いたいだらう、貴様きさまがダルの耳みみたぶを、謝あやまり入いつて放はなす迄まで、此耳このみみはどうしても放はなさない、痛いたいか痛いたいかこれやどうだ、貴様きさまの耳みみは驢馬ろばの耳みみ、内耳うちみみも外耳そとみみもむしやむしやと、獸けもののやうな毛けが生はへて、氣分きぶんのよくない手てぎ觸はりだ、胡麻煎頭ごまいりあたまを持もち乍ながら、口くちの先さきにて胡麻ごまを摺すり、一時いちじ逃のがれに甘うまい事こと、吐ぬかした所ところで神様かみさまは、心こころの底迄そこまで御承知ごしやうちだぞ

ヤツコスはメートに背せなから耳みみを力ちから一杯いっぱい握にぎられ頭あたまをしゃくられ、涙なみだを流ながし乍ながら猶なほも執念しふねん深く、ダルりやうみみの兩耳にぎを握にぎつて放はなさない。見みるに見兼みかねて、ハールまたりやうみみは又また兩耳にぎを掴つかもうとする。伊太彦いたひこは大喝だいかつ一聲いつせい、

伊太「こりやこりや、ヤッコス、何亂暴な事をするのだ、さう耳を掴まなくても話は出来るぢやないか、サア早く放さないか」

ヤッコスは不承無精に「ハイ」と云つたきりダルの耳を放した。

ダル「アハハハハハ、態見い、痛からう。オイ、メート確り引張つてやつて呉れ、大分此奴の耳は金挺だから、少々片つ方位ちぎつたつて、神経が通つて居ないから、痛がる氣遣ひは無からうよ」

メート「よし、お前の命令だ、どうしても放すものか、もう斯うなれば蟹に手を挟まれたも同様だ。蟹に噛まれたも同様だ、千切れる所まで放すものか」

ヤッコス「アイタタタ、これメート、俺も放したのだから、貴様も放して呉れ」
メート「痛むやうに引つぱつて居るのだ。未だ宣傳使の命令が下らないから命令の下るまで、【がりぼし】の手で引つ張つてやる」

と云ひ乍ら引張る。其度毎に鮒が泥に酔うたやうに、パクパクと齒竝の悪い口を開閉して居る。

伊太「オイ、メート、もうよい加減に放してやれ、此奴は吾身知らずぢやない、

耳知らずだから、人の耳を直に狙ふのだ。耳ばかりかと思へば鞆丸狙ひだ。皆よく氣をつけたらよからうぞ」

メイト「そんなら放してやりませうか。大分に耳が、伊太彦さまだと見えますわい、アハハハハハ」

伊太「傍の見る目もいたいたしい、まア見直し聞き直して許してやるがよからう」

メイト「ヤツコスが耳引張られ顔しかめ

ああ伊太彦に救はれにける。

伊太々々し伊太彦さまのお情を

守りて耳を放す惜さよ」

と歌ひ終つて耳をパツと放した。

ヤツコスの耳はメイトの堅い爪が深く這入り込んだと見えて、血をぼとりぼとりと滴らしながら、残念さうにメイトの横顔を睨めつけて居る。

伊太彦いたひこ「ヤツコスに耳みみつかまれたダルさまは

目め口くち鼻はな迄なまでゆがめつるかも。

澁面じうめんを作つくつて涙なみだぼろぼろと

腮邊しへんにダルの顔かほの憐あはれさ。

後うしろから二ふたつの耳みみを引ひつ張ばられ

メート鼻はなとをむけむけとする」

メート「此男このをとこメートの旅たびに送おくらむと

思おもふ矢先やさきに伊太彦いたひこの聲こゑ。

伊太彦いたひこの鶴つるの一ひと聲こゑ拒こぼまれず

無念むねんながらも耳みみ放はなしけり」

ヤツコス「人の耳掴んで見ても痛くなし

されどヤツコス耳は痛かり。

神経の通はぬ耳か力限り

ダルを引けども痛くなかりし。

吾耳は温い血潮が通つて居る

引かれた時の耳の痛さよ」

舞つた。船頭のイールは、廣き湖原の風に曝された流暢な聲で歌ひ出した。耳の喧嘩は漸く濟んだ。ダル、ヤツコス兩人は、不機嫌な顔して黙り込んで仕

イール「ダルとヤツコス二人の喧嘩

耳兔兔のゆがみ合い

浪はどんだん押し寄せ来る

耳の鼓膜をひびかせて

聞くも怖ろしヤツコスの企たくみ
ばらすダルさまは面白おもしろい
痛い痛いいたと互たがひに耳みみを
引ひいて苦しむ浪なみの上うへ
耳みみの痛いたいよな小言こごとを聞きいて
又またもや痛いたい程ほど耳みみひかれ
目め鼻はな口くち耳みみ眉まゆ毛げのおきば
竝ならべ立たてたる面おも黒くろさ
顔かほはお猿さるで心こころは鬼おによ
やがて鴉からすが婿むこにとる
長ながい船路ふなぢを迂すべりて行ゆけば
船ふねの中うちにもおとし穴あな
人ひとを陥おとして自じ分ぶんの望のぞみ
經たてと緯よことの惡企わるたくみ

ひやくりにひやくりとほ
百里二百里遠くはないが

かみ
神の御國は近くない
ちか

にし
西は照國東は木國
てるくにひがし
きくに

きた
北はテルモン南はイツミ
みなみ

なか
中に漂ふキヨの湖
ただよ
うみ

と歌ひ乍ら、湧き返るやうな、暑い浪を分けて行く。

（大正一二・三・二九 舊二・一三 於皆生温泉濱屋 加藤明子録）

第一四章 猩猩島（一四八九）

印度の國の北端、テルモンの湖水を南に渡つたイツミの國のスマの里にバーチ
ルと云ふ豪農があつた。バーチルは何不自由なき身であり乍ら、暇ある毎に湖水

に船を浮べ、魚を漁る事を唯一の樂みとして居た。妻のサーベルは何時も「危険な漁業を止めて家におとなしく居つて財産の整理をせよ」と諫言したが、どうしても聞かうとはせず、女房の寢靜まつたのを考へ濱邊に出で例の如く網をうち釣を垂れ、あまり面白いので何時とはなしに沖へ沖へと流れ出で、到底一日で歸る事の出来ない地點迄行つて了つた。舟を出した夜は明け放れ、その日も亦ズツポリ暮れて、日の移るを忘れて一生懸命に一人の僕と共によく釣れるのに心を奪られて居た。

満天俄に黒雲起り、一點の星影さへも見えなくなり、雨風烈しく波高く澤山な魚を舟に積んで居ては到底危険を免れ難くなつて來た。されど折角骨を折つて釣つた魚をムザムザ湖中へ投げて了ふのは、どうも惜しくて堪らない、だと云つて少しは重みを軽くせなくては到底舟の覆没は免れなくなつて來た。僕のアンチーは慄ひ戦き、泣聲を出して、
アンチー「旦那様、どうぞ致しませう。到底此暗がりに大暴風と來ては助かりこはありますまい。貴方が折角お釣りになつた此魚を一つも残らず湖に投じて了ひま

せう。さうすれば舟が軽くなり、どうなり、こうなり何ツ處の島に着いて命を保つ事が出来ませう。何卒一匹も残らず棄てさして下さいませぬか」

と泣聲になつて歎願した。バーチルは僕の言葉に腹を立て、聲を尖らして、バーチル「こりやアンチー、俺がこれ丈け危険を犯して折角釣つた魚を皆流せとは、何と云ふ失禮な事を云ふ。魚が重たくて舟が覆る虞があると云ふのなら、貴様のやうな重量の多い、柄見倒しが湖へ飛び込めば此舟は餘程軽くなつて魚が助かるのだ」

と半狂の男とて魚にかけたら目も鼻もない。僕に對して實に無慈悲極まる叱言を云つた。

アンチー「旦那さま、私は幼い時から貴方の邸に養はれた僕ですから、貴方のお命に係はる様の事あれば、お身代りとなる事は覺悟の前でムいます。然し何程僕と云つても、矢張り人間でムいます。魚は幾何でも獲れませうが、此アンチーの體は世界に一つほか有りませぬから、そんな無慈悲な事を仰有らずに早く此魚を棄てさせて下さいませ」

バーチル「その方は主人の危難を救ふと今申しただらう。主人が大切に丹精を凝らして獲つた此魚を助けて、何故其方は重量を減ずるために湖に飛び込まないのか。そんな事で僕の務めが勤まるのか。譯の分らぬ代物だな」

アンチー「旦那様、死んだ魚よりも私の命の方が餘程安いのでムいますか。そりや餘り没義道ぢやムいませぬか」

バーチル「馬鹿申せ。魚は宅へ持つて歸れば自分も樂しみ村中の奴にも刺身にしたり、煮込ににしても、焼いて食はさうと儘だ。何程肥太つて居ても貴様の體が刺身にもなるかい。誰だつて一人でも喜んで戴くものはない。俺に忠義を盡さうと思ふなら早く貴様の方から飛び込まぬか。グツグツして居ると舟が轉覆して了ふぢやないか。貴様一人の命を亡くするか、二人の命を亡くするかと云ふ瀬戸際だ。さア早く氣を利かして飛び込め」

アンチー「これは又怪しからぬ事を仰有います。貴方はどうかして居りますな。俄に仰有る事が「へん」になつただぢやありませんか」

バーチルは暫らく俯向いて考へて居たが俄に、驚いた様な聲で、

バーチル「やア如何にもさうだ。餘り吃驚して魚と人間の輕重を誤つて居つた。やア堪へて呉れ、せうもない事を云つたものだ。餘り魚に氣をとられ頭に氣を揉んだものか、妙な幻覺を起したものだ。さアお前の云ふ通りにする。さアさア魚を放つた放つた」

と、ここに主従は一生懸命に折角釣つた魚を掴んでは海中に投げ、掴んでは投げして、漸く半分許り放し出したと思ふ時分に、虎の咆ゆるが如き音をして襲ふて来た大海嘯にバツサリと呑まれて、舟諸共波に捲き込まれて了つた。二人は暗夜の荒湖に落ち込み、最早や如何ともする事が出来ないので運を天に任して居た。

イツミの國のスマの里 首陀の豪農バーチルは
妻の諫めも聞かばこそ 氣色の悪い夜の海
こんな時には何時よりも 獲物が多いと云ひ乍ら
僕アンチー伴ひて スマの浦より舟を出し
何時にもなき豊漁に うつつを抜かし知らぬ間に

沖合遠く流れ出で
一夜を明かし晨より

又もや黄昏過ぐる迄
一心不亂に漁りし

夜中の頃となりし時
一天俄に掻き曇り

黑白も分かぬ暗となり
忽ち襲ふ暴風雨

波は高まり白波の
鬣震ひ釣舟に

噛みつき来る恐ろしさ
虎咆え猛り龍吟じ

獅子の猛びの物凄く
風と波との唸り聲

撓まず屈せずバサバサと
網打下ろし様々の

大きな魚を漁りつつ
現になれる折もあれ

漁船を木の葉の散る如く
上下左右に翻弄し

身邊危くなりければ
ここに主従二人連れ

種々雑多と争ひつ
折角捕らへし魚族をば

スツカリ海に投げやりて
せめて命を拾はむと

あせる折しも山嶽の
様なる波に船體は

忽ち呑まれて無残にも

水の藻屑となりけり

僕男のアンチーは

行衛不明となり果てて

呼べど歸らぬ死出の旅

聞くも憐れな次第なり

大海中に衝つ立てる

人の恐れて寄りつかぬ

狸々ケ島の磯端に

打上げられしバーチルが

波に體を翻弄され

息絶え絶えになりし時

猩々の王が現はれて

手早く陸へ救ひ上げ

眞水を口に啣ませて

漸く命を救ひける

實に面白き物語

疊の波に浮びたる

長方形の舟に乗り

敷島煙草を熏らせて

ここ迄述べて北村の

隆光彦の筆の先

寫して千代に傳へむと

萬年筆の劍尖を

原稿用紙につきつけて

あらあらここに記し置く

ああ惟神々々

御靈幸はひましませよ。

バーチルはフツと氣がつけば夜は已に明け放れ、自分は名も知らぬ孤島の磯端に横臥し、澤山の狸々が集まり來つて『キヤーキヤー』と鳴き立て乍ら自分の周圍を蟻の如く取巻いて居る。傍に優れて大なる一匹の狸々が自分の顔を見てさも同情に堪へざるものの如く首を傾け涙を流して居る。よくよく見れば噂に聞いた狸々の島である。

バーチル『ああ私は恐ろしい斯んな島へ漂着したのか。あまり自我心が強い爲に女房の諫めも聞かず隠れて漁に出たのが一生の不覺だった。さうして僕のアンチーは如何なつたであらう。ああ恐ろしい事になつた。歸らうと思つても舟はなし、狸々の餌になつて了ふのか』

と恐怖心に驅られて怖れ戦いて居た。

意外にも狸々の王とも覺しき大猿は親切さうにバーチルに背を向け、『吾背に負はれよ』との意を形容に示して居る。バーチルは『もう斯うなつては因果腰を定めるより仕方がない。彼等の爲すがままに任さむ』かと狸々の背に怖々乍ら抱きついた。狸々は背に負ふたまま、きつい岩山をいと安々と登り、頂上の屏風を

立てた様な岩に穿いてある深い洞穴の中へ、サツサと連れ込んで了つた。バーチルは岩窟の中に導かれ、胸を轟かして居ると、珍らしき果物を小猿に「むしら】せ來つて皮を剥き等して、之を喰へよと勧めるのである。意外の猩猩々の態度に、ヤツと胸を撫で下ろし、體が疲れて繩の様にグニヤグニヤになつて居るのを、暫し休養せむとゴロリと横になつた。猩猩々は木の葉の半乾いたのを厚く敷いて、バーチルを抱へ自分が手枕をして母親が赤ん坊の添乳をする様に、いと親切に體中を撫で擦り、介抱に熱中して居る。かくの如くしてバーチルは三年の月日を此猩猩ヶ島に送る事となつた。此猩猩々は牝であつて此島の動物の王である。猩猩の外に鹿や兔が棲んで居た。されど兔も鹿も時々猩猩王の側にやつて來て睦まじげに遊んで居る。

二年目に猩猩々とバーチルの間に半人半獸の妙な赤ん坊が生れた。猩猩の王は掌中の玉と慈み、バーチルに自慢さうに抱かせたり、自分が顔を嘗めたり乳を飲まして其子の成人を待つものの如くであつた。バーチルも國へ歸らうと思つても肝腎の舟はなし、又猩猩王の目を忍んで歸る譯にも行かなかつた。バーチルは三年

の間あひだ猩猩やうじやう々と同どう棲せいし、大抵たいてい表情へうじやうを以もつて意志いしを通つうずる事ことが出来できる様やうになつて来たき。何なんとなく濱邊はまべへ出でたくなつて堪たまらないので猩猩しやうじやう王わうに身振みぶりを以もつて濱邊はまべに遊あそびに行ゆかうかと云いつた。猩猩しやうじやう王わうも嬉うれしげに頷うなづいて子こを抱だき乍ながら數多あまたの小猿こざるを従したがへ、バーチルの身邊しんべんを守まもり乍ながら、嶮峻けんしゆんな岩山いはやまを下くだつて磯端いそばたに出でて蟹かにを追おひかけたり、砂すなを掘ほつたり、色々いろの慰なぐさみをして嬉うれしさうに夏なつの磯邊いそべ遊あそびをやつて居ゐた。

忽たちまち二三丁にさんちやうばかり沖合おきあひを白帆しらほを上げあげて通とほる船ふねがある。此附近このふきんは容易よういに船ふねの通とほる事ことの出来できない、暗礁あんせう點綴てんでつの危險きけん區域くゑきである。バーチルは此舟このふねを見みるより兩手りやうてを打うち振り打うち振り、人間にんげんが此島このしまに漂着へうちやくして居ゐると云いふ合圖あひづを示しめした。船頭せんどうのイールはフツと此姿このすがたを見みて驚おどろいた様やうな聲こゑで、

イール「あ、皆様みなさま、一寸御覽ちよつとごらんなさいませ。あの島しまは猩猩しやうじやうヶ島がしまと云いつて猩猩しやうじやうばかりが棲すんで居ゐますが、不思議ふしぎな事ことには人間にんげんらしいものが磯端いそばたに立たつて、數多あまたの猩猩しやうじやうに取圍とりかこまれ、手てを振ふつて居をります。随分澤山ずいぶんたくさんの猩猩しやうじやうですよ」

伊太いた「何なに、猩猩しやうじやうの島しま、そりや面白おもしろからう」
と云いふより早はやく苦屋根とまやねの中なかから舳へさきに這はひ出でてよくよく見みれば、イールの云いつた通とほ

り人間らしいものが頻りに腕を振つて居る。

伊太「もし、先生、どうやら、あの島に人間が漂着して居る様子です。一つ何とかして舟を寄せ調べて行かうぢやありませんか？」

ヤツコス「あれは大變な悪い狸々が居るのです。あんな處へ行かうものなら、皆兩眼を刳り抜かれ命を取られて了ひます。そんな險呑な處へ行くものぢやありません。決して悪い事は申しませぬ。お止めなさいませ」

伊太「先生、側まで船を寄せて調べて見ようぢやありませんか。別に上陸させなければ危険はありません。兔も角人間か獸か、よく調べて、人間ならば助けてやらねばなりません。是非とも船を着け度いものですか？」

玉國「成程、お前の云ふ通りだ。どうも人間らしい。あんな無人島に獸と同棲してるのだらう。何か面白い話が聞けるかも知れない。兔も角僅か二三丁の處だから、船頭さま、一寸船をつけて呉れませんか？」

イール「はい、初稚様と云ふお方に澤山なお金を頂き、又宣傳使の仰有る通りにして呉れとお頼みでムいますから仰せに従ひませう」

玉國たまくに「や、そりや有難ありがたい、そんなら頼たのむ」

「はい」と答こたえてイールは舐へさきを轉てんじ水先みづさきを考かんへ乍ながら漸やうくにして磯邊いそべに着ついた。

(大正一二・三・二九 舊二・一三 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第一五章 哀別あいべつ〔一四九〇〕

玉國たまくに別のいっかう一行は初稚丸はつわかまるを猩々島しやうじやうしまの磯邊いそべにつけ、よくよく見れば、勝すぐれて大なる猩々しやうじやうが、人間にんげんとも猿さるとも知しれぬ子を抱だいて居ゐる。傍そばに髯ひげむしやむしやと生はえた、人間にんげんか猿さるか分わからぬ人間にんげんが一人立ひとりたつて居ゐる。伊太彦いたひこは其男そのをとこに向むかつて、伊太いた「オイ其處そこに立たつて居ゐるのは人間にんげんか、人間にんげんならものを云いつて呉くれ」

バーチルは三年振さんねんぶりで人間にんげんの顔かほを見み、人間にんげんの聲こゑを聞きいて、懐なつかしさ嬉うれしさに、涙なみだをハラハラと流ながした。そして、

バーチル「ハイ私は人間にんげんです。どうか助たすけて下ください、三年以前さんねんいぜんに此島このしまに漂着へつちやくし、

此の通り狸々の群と一緒に淋しい生活を送つて居りました」

伊太「ヤア、そいつは奇妙な話だ、深い様子があるだらう。兔も角、とつくりと聞かして貰はう。もし先生、こいつは一つ上陸して見ませう。【ひよつ】としたら寶石の島かも知れませぬぞや」

玉國「ウン、兔も角上陸して、様子を探つて見よう。サア皆さま一同上陸しなさい」

と云ひ乍ら、ポイと飛んで磯邊に降つた。續いて一同は船頭を残したまま、皆好奇心にかられて上つて來た。狸々は澤山の凜々しい男がやつて來たので、稍怯氣を生じ、狸々の王は兒を抱いて七八間も後に退き、首を傾げて様子を考へて居る。澤山の小猿は一緒に集まつてキャキャ云ひ乍ら瞬きもせず、瞠めて居る。

玉國「アア、お前さまはこの人ですか。どうしてまアこんな離れ島に狸々なんかと同棲して居たのです。一通り話して見て下さい。私は三五教の宣傳使、人を助けるのが役です。決して御案じなさるやうな人間ぢやムいませぬ。安心してお話を願ひます」

バーチル「ハイ、有難うムいます。私はイズミの國、スマの里の首陀で、バルと申す百姓でムいますが、大變漁が好きな所より、荒れ模様 of 海を犯して僕と共に三年以前に湖中遠く漁をやつて居りますと、俄に暴風に遇ひ船體は浪にのまれ、私はお蔭で此島につき、狸々の王に助けられ今日迄命を保つて参りました。嚙國元には女房が心配して居る事でムいませう。何卒お助けをお願い致します。玉國「成程それは御難儀でしたらう。もう斯うなる上は御心配なさるな。此船に貴方を救ふて歸りませう」

バーチル「ハイ、何分宜敷くお願い申します。三年以來此島で狸々に助けられ食物に不自由は致しませぬが、何を云ふても相手が畜生の事、言葉が通じないので困りました」

かく話す折、狸々の王は赤ん坊を抱いて其場に現はれ來り、兒を指しては分らぬ事をキヤキヤと叫んで居る。伊太彦はつくづくと其子を見て、伊太「アア此兒は人間と猿との混血兒ぢやな。ハハア妙な事があるものだ。若しバーチルさま、こりやお前さまと狸々さまとの中に出來た錠ぢやなからうなア」

バーチル「ハイ、實にお恥かしい事でありますが、あの猩猩の王と夫婦になつたお蔭で、今日迄命が保てたのであります。因果の種が宿つてあのやうな兒が出来ました。實に困つたものであります。畜生の腹に出来たとはいひ乍ら私も實に未練が残ります。併しあんなものを連れて歸る譯にも参りませぬ、又猩猩の女房を連れて歸る譯にも参りませぬ。實に畜生と云ひながら親切なものであります。國へ歸りたいは山々であります、斯う云へばお笑ひなされるか知れませぬが、實にあの猩猩が可愛さうです」

玉國「實にお察し申します。こりや可愛さうな事だ。バーチルさまを連れて歸れば家の奥さまはお喜びなされるだらうが、第二夫人の猩猩姫の心が察せらる。何とかして連れて歸る譯には参りますまいかな」

バーチル「ハイ有難うあります、併し猩猩は決して此島を離れは致しませぬ。あれだけ澤山の猩猩が、時々現はれる大蛇にも吞まれず、ああして居るのはあの王があるからであります。あの猩猩を連れて歸れば着族を見殺にせねばなりません。又猩猩は自分の着族を見殺にして吾々に跟いては参りますまい、實に情深い

動物ですから」

伊太「三年も畜生とは云ひ乍ら夫婦となつて暮して居たとすれば、さうも未練が残るものかな。アアてもさても人間の心理状態と云ふものは分らぬものだなア」

玉國「人間であらうが獣であらうが、決して愛情に變りはない。況て人間と云ふ奴は少しく氣に喰はねば女房を放り出したり、夫を捨てたりするものだが、畜生は其點になれば偉いものだ。空飛ぶ鳥さへも一方が人に取られるとか、又は死んで仕舞ふとかすれば、假にも二度目の雄を持つたり、雌を持つたりしないものだ。これを思へば、人間は鳥獸に劣つて居るやうだ」

伊太「成程感心なものですな。これ三千彦さま、お前さまも今の先生の話を腹に入れて、決してデビス姫を出したりしてはなりませんぞや。又假令奥さまが亡くなつても、二度目の奥さまは持たないやうになさいませ。奥さまも奥さまですよ、どんな事があつても決して二度目の夫を持つたり、臀をふつてはなりませんぞや」

三千「八八八。何から何迄有難うございます。決して仰に背くやうな事は致しませ

ぬから、御安心下さいませ」

伊太「本當だよ、決して伊太彦の話を経く聞いてはなりませんぞや。いやもう、

今の話で實に涙が零れました」

玉國「どうも、何時迄悔んで居た所で仕方がない、兔も角バーチルさま此船にお

乗りなさい。一先づ歸つて奥さまに安心させたが宜しからう」

バーチル「ハイ、有難うムいます。何卒宜しく願ひます」

子猿はキヤツキヤツと云ひ乍ら、追々と近よつて来る。バラモン組のヤツコス、

ハール、サボールの三人は小猿の群を面白がつて追つかけ乍ら、荒れ廻つて居る。

其間に船は三人を残して、磯邊を七八間許り離れた。狸々の王は悲鳴を上げて磯

邊に佇み、赤ん坊をつき出し、バーチルの顔を眺めて涙をハラハラと流し、口に

は云はねど、「此子は貴方、可愛うムいませぬか。妻を見捨てて歸るとは慘酷で

はムいませぬか」との表情を示し、地團駄踏んで居る。時々小猿を股から引き裂

く様を見せて脅喝を試みた。併し一同心を鬼にして、止むを得ぬ今日の場合と船

を漕ぎ初めた。狸々王は、見る見る自分の子の喉を締めて殺し、自分は藤蔓に重

い石を縛りつけ、ドンブと許り海中に身を投じて仕舞った。

此惨状を見て、玉國別の一行は悲歎の涙に暮れた。ヤツコス、ハール、サボールの三人は船が出たのを見て驚き磯邊に慌ただしく駆け来り、三人「オーイ オーイ待った待った、俺達三人此處に残つて居るぢやないか。其船返せ」

と地團駄踏んで叫んで居る。メート、ダルの二人は、舷頭に立ち妙な恰好して腮をしやくり、幾度となく拳骨で空を打ち乍ら、

「イヒヒヒ、ウフフフ。オーイ三人の悪人奴、貴様はキヨの港で俺達一同を捕縛する計略をやつて居るやうだが、そんな事はちやんと三五教の宣傳使も御存じだ。夫だから貴様等三人を此處に置き去りにしてお歸り遊ばすのだ。まア猿島の王となり、猿と夫婦となり子孫繁榮の道を講じたらよからう。アバヨ、お氣の毒様、御悠りと、左様なら」

と所有嘲笑をなし、三人が磯邊に立つて居るのに素知らぬ顔をしながら、折から吹き来る、微風に帆を上げて西南の方さして迂り行く。

船頭は櫓をゆるやかに操り乍ら涼しい聲で歌ひ出した。

船頭「ヤンサモンサで沖を漕ぐ船は

女郎が招けば何んと磯による、

ヤンサ、女郎が招くとも

磯にども寄るな

ナント女郎は化物晝狐

ヤンサヨー

泥坊の泥坊の三人連が

聲を洩らして招くとも

ヤンサー、磯には寄るな

彼奴ア盗人晝狐

キヨの港についたなら

ヤンサー、エンサー

ヤンヤーノヤー

目付めつけの奴等やつらと謀しめし合あひ

數百すつひやくの手下てしたを引ひき率つれて

ヤンサー コレワイサー

玉國たまくに別の宣傳せんでん使し

其外そのほか一同いちどうの生神いきがみを

一網いちまうだじん打盡だじんにして呉くりよと

手具てぐすね脛ひ引ひいて待まつて居ゐる

其手そのてに乗のつて耐たまらうか

ヤンサー、エーンサーノ

エンヤラヤー

猩猩しやうじやうの島しまにと蟄居ちつきよして

猩猩しやうじやう姫ひめをば嫁よめに取とり

結構けつこう毛けだらけ子こを生うんで

キヤツキヤツと泣いて暮しやんせ

これが此世の懲戒か

ほんにお前は偉い奴

猩猩の島の王となり

治外法権の生涯を

送らしやんせよいつ迄も

これもお前さまの身の錆だ

折角命助けられ

ヤンサ、エンサ

エンヤラサー

心の底に悪企み

それを悟つた宣傳使

俺等もすつかり知つて居る

ほんに貴様は氣の毒ぢや

月は照る照る涼風は吹く

浪も静にさやさやと

面白おかしく潔く

キヨの港にや着かないで

イズミの國のスマの浦

バラモン教の目付等が

鼻をあかして

吃驚さしてやらう

エンサ、エンサノ

エンヤラヤー

と手をふり足をふり三人を嘲弄し乍ら、
追々島に遠ざかり行く。

バーチル 久方の天津御空の救ひ神

天降あもりましたる今日けふぞ嬉うれしき。

さりながら三年みとせの間吾妻あひだわがつまと

慈いつくしみたる姫ひめこそ哀あはれ。

猩々しやうじやうの姫ひめに宿やどりし吾胤わがたねを

見殺みころしにする心苦こころくるしさ。

妻つまとなり夫をつととなるも前さきの世よの

深ふかき縁えにしと白浪しらなみの上うへ。

白浪しらなみの上うへ漕こぎ渡わたる此船このふねは

百ももの哀あはれを乗のせて走はしれる。

訪とふ人ひともなき荒島あらしまに殘のこされし

三人男みたりをとこの心こころしのばゆ。

村肝むらきもの心こころの鬼おににせめられて

かく淺あさましき身みとぞなりしか

眞純彦ますみひこ 大空おほぞらも水みづの底そこひもすみ渡るわた

さはさり乍ながら心悲こころかなしき。

狸やじり々の憐あはれな最後さいごを見るみにつけ

耐こらへ兼ねかたる吾わが涙なみだかなな

メートさん三人さんにんの悪漢わるものどもを島しまにおき

歸かへりて行ゆかむ吾われぞ嬉うれしき。

ヤツコスは嘸さぞ今頃いまごろは磯邊いそばたに

吾わが船眺ふねながめ泣なきくづれ居ゐむむ

ダルなにごと何事なにごとも心こころの罪つみの播まきし種たね

狸やじり々の島しまに生はえしなるらむ。

少々の過ちなれば兔も角も

空怖ろしき曲神の罪

三千彦 悲しきは涙の壺に三千彦の

汲むすべもなき今日の哀れさ

デビス姫 三柱の醜の司も皇神の

厚き守りに安く住むらむ

玉國別 スマの浦浪打ち際につきし上は

態人をもて向ひ助けむ

とおのおのゆつぐわいのと各述懐を述べ乍ら、潮流に乗つて湖上を右に左に迂り行く。遙か前方に當つて霞のやうに浮びたる小さき島影が目についた。イールは目敏く之を見て、
イール「ああ仕舞つた、たうとう魔の海に船が流れ込みました。あれへ廻れば三四十里の廻り道でムいますが、この湖はもうあの潮流に乗つたが最後、方向を轉ずる事が出来ませぬ。併し乍ら暗礁のない限り滅多に危険な事はムいませぬ。皆さま御安心下さいませ。スマの港に着かうと思へば餘程の廻りですが、これも成り行だと締めて下さい」
玉國「何かの神様の御都合だらう。浪のまにまに任して、充分氣をつけてやつて呉れ。又大變な獲物があるかも知れないから」
イール「ハイ、有難う、それで私も安心致しました」
と鉢巻をしながら、八人の水夫を指揮し、一生懸命、眞裸體となつて漕ぎ初めた。船は蜒々として浪のまにまに漂ひ行く。

(大正一二・三・二九 舊二・一三 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

第一六章 聖歌（一四九一）

初はつ稚わか丸まるに帆ほをあげて 潮しほのまにまにすべにゆり行く

玉たま國くに別わけの一行いっかうは 前途ぜんとに當あたる島しま陰かげを

眺ながめて何なにか心しん中ちゆうに 臃おぼろげ乍ながら望のぞみをば

抱いだきていそいそ湖うな風かぜに 吹ふかれて進すすむ波なみの上うへ

月つきは漸やうく中ちゆう天てんに 昇のぼらせ玉たまひ清せい涼りやうの

空くう氣きはおひおひ身みに迫せまる 何なんとも云いへぬ心こころ持もち

思おもはず知しらず苦とまの屋や根ね 立たち出いで來きたり舷げん頭とうに

遠とほくに霞かすむ島しま陰かげを 打うち仰あふぎつつ獨ひとり言こと

玉たま國くに別わけ 際さい限げんもなき湖うな原はらの 彼かな方たに見みゆる浮うき島しまは

如い何かなる人ひとの住すみけるか 但ただしは人ひと無なき孤ひとり島しまか

猩しやう々じやう島しまの片かた割われか 波なみに吞のまれて船ふねを割わり

バーチルさまの二の舞を 演じて漸う漂着し

猩々の姫を妻に持ち 浮世離れし別世界

其日を暮す人あらば 又もや悲しき生き別れ

救ふも辛し救はねば 神に對して相濟まず

何は免もあれ波の間に 進みて實地を探り見む

ああ惟神々々 御靈幸ひましまして

神の賜ひし此御船 波路も安く渡らせよ

國治立の大御神 豊國主の大御神

齋苑の館に在れませる 瑞の御靈の御前に

三五教の宣傳使 玉國別を初めとし

神の稜威も三千彦や その外百の神司

遠き海路を恙なく 進ませ玉へと願ぎ奉る

初稚姫の神司 此荒波を乗り切りて

猛犬スマートに跨りて 波のまにまに出で玉ふ

その扮装の勇ましさ
もしも彼方の島陰に

休らひ玉ふ事あれば
實に嬉しき限りなり

初稚姫の逸早く
船を見棄てて犬に乗り

出で行き玉ひし心根は
何かは知らねど重大の

使命の在すと覺えたり
吾等一同の行先に

又もや曲の現はれて
如何なる仇をなさむやも

圖られ知らぬキヨの湖
只何事も惟神

大御心に任せつつ
天津祝詞を奏上し

天の數唱歌ひ上げ
一同聲を相揃へ

神の御名を稱ふべし
ああ惟神々々

御靈幸ひましませよ

と歌ひ了り、一同と共に型の如く恭しく祝詞を奏上し、
數歌を歌ひ終つて宣傳歌
を節面白く稱へ初めた。

玉國別たまくにわけ 地水火風空ちすいくわふうくうの大本おほもとを造り玉つくたまひし神御祖かむみおや

大國常立大御神おほくにとこたちおほみかみ 宇宙の外うちうそとに在ましまして

天地日月星辰てんちじつげつせいしんを完全うまらに委曲つばらに造り終つくをへ

青人草あをひとぐさや鳥獸とりけもの 蟲族初むしけらはじめ草くさや木きの

片葉かきはの露つゆに至いたるまで 嚴いづの恵めぐみを垂たれ玉たまひ

此美このうるはしき世よの中なかを 守まもらせ玉たまふ有難ありがたさ

先まづ第一だいいちに日ひの御神みかみ 高皇産靈たかみむすびの大御神おほみかみ

月つきの御神みかみと現あれませる 神皇産靈かむみむすびの大御神おほみかみ

水火みづひの業わざを受持うけもちて 天地萬有てんちばんいうあんばい按配あんばいし

各おのその所しよを得えせしめて 無限むげんの歡喜くわんきを與あたへつつ

彌勒みろくの聖代みやよを細まつぶさに 築きづかせ玉たまふ尊たふとさよ

先まづ第一だいいちに人ひとを生うみ 天足あだるの彦ひこや胞場えば姫ひめを

青人草あをひとぐさの祖先そせんとし エデンエデンの園そのに下くだしまし

神かみの形かたちに造つくられし 人ひとの子こ數あまた多う生をみ終をはせ

此世の中を開かむと
かからせ玉ふ時もあれ

天足の彦や胞場姫が
皇大神の御心に

反き奉りし邪心より
天地に妖邪の空氣充ち

八岐大蛇や醜狐
曲鬼などの生れ來て

益々此世を亂し行く
高皇産靈の大神の

嚴の御靈と在れませる
國治立の大神は

天津御神の御言もて
遙々天より降りまし

此地の上の萬有を
いと安らけく平けく

治めむものと千萬の
掟を定め神々を

生みなし玉ひて三界を
救はむ爲めに種々に

心を悩ませ玉ひけり
神皇産靈の大神の

瑞の御靈と在れませる
豊國姫の大神は

嚴の御靈の神業を
助け玉ひて遠近の

山野海河悉く
心を配り守りまし

八岐大蛇の憑りたる
常世の彦や常世姫

金毛九尾曲鬼の
醜の魅魂に靈魂を

攪亂されて大神の
大神業を妨害し

遂には枉の集まりて
天津御國に在しませる

元津御祖の大神に
嚴と瑞との二柱

神の掟を惡しざまに
申上げたる枉業に

皇大神は止むを得ず
熱き涙を湛へまし

彌勒の聖代の來る迄
國治立の大神を

地上の世界の良に
長く浮べる自轉倒の

根別けの島に押込めて
時節を待たせ玉ひつつ

豊國姫の大神は
メソポタミヤの瑞穂國

境を限りて今暫し
彌勒の聖代の來るまで

時節を待てと嚴かに
宣らせ玉ひし悲しさに

嚴と瑞との大神は
涙を呑んで潔く

各自々々の隠遁所に
その身を忍ばせ玉ひしが

一度に開く蓮葉の
開いて薫御代となり

神素盞鳴の大神は
千座の置戸を負ひ乍ら

齋苑の館やコーカスの
山に姿を隠しまし

島の八十島八十の國
隈なく教を垂れ玉ひ

世人を教へ曲神を
言向和し天地を

清めて元の神國に
立直さむと宣傳使

數多養ひ育てつつ
彼方此方に派遣して

曇りきつたる世の中を
照らさせ玉ふぞ有難き

神の使の數多く
在します中にいと勝れ

神徳強き神柱
初稚姫は只一人

魔神の猛ぶ荒野原
山川海を乗り越えて

猛犬スマートと諸共に
神變不思議の神力を

現はし玉ふ畏さよ
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも

誠の力は世を救ふ
誠の道の御教を

教へられたる吾々は
皇大神の御爲に

あらゆる艱難を凌ぎつつ
道の御爲世の爲に

盡さにやならぬ宣傳使
ああ有難し有難し

齋苑の館を出でしより
種々雑多と大神の

恵みの試しに遭ひ乍ら
その度毎に神力を

いと爽かに與へられ
所々に功勳を

現はしまつり今此處に
清めの湖に浮びつつ

仁慈無限の大神の
教の御船に棹さして

進み行くこそ樂しけれ
眞純の彦よ三千彦よ

デビスの姫よ伊太彦よ
いざ之よりは腹帯を

下津岩根に締め直し
上津岩根に締め固め

バラモン教やウラル教
神の館に蟠まる

醜しこの曲津まがつに打向うちむかひ

善言ぜんげん美詞びしの言靈ことたまや

堪こらへ忍しのびの劍つるぎもて

吾身わがみを厭いとはず進すすむべし

神かみは吾等われらと俱ともにあり

人ひとは神かみの子神こかみの宮みや

如何いかなる敵てきの攻せめ來くとも

恐おそる事ことのあるべきぞ

八やルナまたの都みやこに蟠わたかまる

八や岐また大蛇をろちや醜神しこがみを

神かみの賜たまひし言靈ことたまに

言向ことむけ和やはし齋苑館いそやかた

皇大神すめおほかみの御前おんまへに

勝鬨かちどきあげて歸かへる迄まで

心こころを弛ゆるさぬ此旅路このたびぢ

守まもらせ玉たまへ惟神かむながら

皇大神すめおほかみの御前おんまへに

玉國たまくに別わけが一行いっかうを

ここに代表だいへう仕かまつり

畏かしこみ畏かしこみ願ねぎ奉まつる

ああ惟神かむながらかむながら々々

御靈みたま幸まさはひましませよ

船頭せんとうのイールは、櫓ろを操あやつり乍ながら又またもや歌うたひ出だした。

イールイール（喇叭節ラッパぶし）風かぜはそよそよ吹ふき渡わたる

清きよめの湖うみには百鳥ももどりが

彼方あちら此方こちらと翻ひるがへる

天國てんごく淨土じやうども目まのあたり。

向むかふに見みえるは猩々しやうじやうじやうの島しまか

猩々しやうじやうじやう島しまならもう行ゆかぬ

波なみに浮うかべるああの島陰しまかげは

吾われをまつ風かぜフクフクの島しま。

（琉球節りゅうきうぶし）フクフクの島しまには眞水まみづがこムぎる

眞水まみづ許ばかりか洞ほらがある。

洞ほらの中なかには大蛇だいじやが棲すむと

云いふて恐おそれる一ひとつ島しま。

いやが應おうでも此この潮流てうりうは

フクフクの島しまへと船流ふねながす。

もしも大蛇をろちが出て来たきなれば

嚴いづの言靈ことたま頼たのみます。

嚴いづの言靈ことたま打ち出だすなれば

鬼おにも大蛇をろちも丸まる蹴はだし。

私わしはイツミのスマ里ざとうま生なれ

若わかい時ときから船ふねの上うへ」

と唄うたひ乍ながら一生いっしやう懸命けんめいに櫓ろを操あやつつて居ゐる。

（大正一二・三・二九 舊二・一三 於皆生温泉濱屋 北村隆光録）

第一七章 怪物くわいぶつ（一四九二）

初稚丸はつわかまるは、漂渺へうべうたる海路うなぢを渡わたつて漸やうやく周圍しうゐ二十五町にじふごちやうばかりのフクの島しまについた。

非常に荒波岸を噛み剣呑にして寄りつく事が出来ない大難關である。見れば山の中腹に非常に大きい岩窟が自然に穿たれて其中に何か動いて居るやうに見えて居る。伊太彦は一目見るより、

伊太「猩々だ猩々だ、これバーチルさまお前の御親類かも知れないよ。一つ何とかして島に漕つけ、正體を調べて見たいものだなア」

バーチルは一目見るより、アツと叫んで倒れむ許りになつた。

伊太「ア、此奴は不思議だ。バーチルさま、彼の怪物の姿を見てお前さまはアツと云つて倒れかけたが一體何だ。何か心當りがあるのかなア」

バーチル「ハイ、どうも明瞭は致しませぬが、何だか見たやうな男の姿に見えましたがから思はず叫んだのでムいます」

伊太「矢張り別世界に棲んで居ただけあつて、神經過敏になつて居るのだ。併しこんな離れ島に人間のやうなものが棲んで居るとは不思議だよ。矢張難破船に遇つたものが、こんな島に打ち上げられて居るのかも知れない。ヤヤ好奇心が起つて仕様がな、危険でも上つて正體を調べようぢやないか。一つ先生私に魔窟の

探險を仰せつけ下さるまいかなア

玉國「ウン、一つやつて見たがよからう。ビーチルさまは随分島になれて居るから、探險には適任だらう」

バーチル「ハイ、何卒私にもお許し下さい。どうしても調べなければならぬやうな気がします」

怪物は此船を見るより慌ただしく岩窟を出で險阻な岩角を猿の如く下り來り、毛だらけの顔をさらし乍ら、

「オーイ、オーイ」

と手招きして居る。此時船は一町許り手前迄進んで居る。漸くにして海中に突出して居る岩島に船を寄せ、辛うじて、伊太彦、バーチル、メート、ダルの四人は島に駆けつけた。實に危険極まる藝當である。一丈許りの玉となつて龍の天上する如く、落ち來る浪飛沫は實に凄惨の氣に打たれざるを得なかつた。四人は屈せず男の傍に走り寄り、不思議さうに顔を覗いて居る。怪しの男は四人の顔をつくづくと眺め、

男「あ、貴方は御主人様ぢやムいませぬか、ようまア来て下さいました」

バーチル「やア、お前は僕のアンチーであつたか。どうしてこんな所に助かつて居たのだ。あの荒波に吞まれて水の藻屑になり、最早此世では會へないものと覺悟して居た、ようまア生て居て呉れた。私も今此船に助けられ歸る途中、潮流の都合でこんな所へやつて來たのだ。これも矢張神様のお引き合せであつたか」

アンチーは、髯だらけの顔に涙をハラハラと流し、男泣きに泣き出した。

伊太「これアンチーさま、何を泣くのだ。確りせないか、サアこれからお前を連れて歸るのだから、何も「アンチル」事は要らぬ、安心して跟いて來るのだ。併し俺も何だか涙のやつ、無斷で兩眼から飛び出して來る」と、はや泣き聲になつて居る。

アンチーは涙を手にて拭ひながら、

アンチー「旦那様、私は貴方と一緒に浪に吞まれ、人事不省に陥り此島に打ち上げられて居ました處へ、初稚姫様とか云ふ綺麗な女神様がお越しになり、いろいろ介抱して下さいました。其お蔭で今日迄命を保つて居りました。幸此島には御

存じの通り澤山の鳥が居ますなり、又少しの果物も實のり、夫故どうなりかうなり一人の食料は與へられました」

伊太「ハテ、合點のゆかぬ事を云ふぢやないか。初稚姫様は昨日此方へお通りになつた許りだ。さうして、船にでも乗つてお出になつたか、但は、犬にでも乗つて來られたか、合點のゆかぬ事だなア」

アンチ「いえいえ船も持たず犬も連れず、何處ともなくお出になり、又何處ともなく姿をお消し遊ばしました。夫から二三日前にも立派な姿を現はし、お前を迎ひに來てやるからと仰有いました、「お前も三年の修業が出來たから、これで立派な人間になるであらう、夢々疑ふな」と仰有つたきり今度は犬に乗り荒浪を渡り、南の方を指して歸つて仕舞はれました。本當に不思議のことでムいます」

伊太「成程初稚姫様は生神様だと聞いて居たが偉いものだなア。第一天國の天人だと云ふ事だが、さうでなければこんな離れ業が出来るものでない。これを思へば俺達のお師匠さまもまだまだ修業をせねば駄目だなア。何はさて置き、いつ風が荒うなるかも知れないから、この危険區域を一時も早く去りませう」

と鬣を振ふて猛り狂ふ白浪の中を潛り抜け、茲に五人は無事に船中の一人となり、
急ぎ舳先を轉じ、櫓櫂を操り、潮流に従うて、西南さして進み行く事となつた。
船中にはアンチーの漂流談に種々花が咲いた。

伊太「もし御一同さま、何と不思議の事があるものですか。此方はバーチルさまの僕だつたさうです。三年前に難船して主従が何れも無人島に命を保ち、又吾々

の船に一時に助けられるとは實に奇中の奇ぢやありませんか。こんな事を思ふと、
吾々は一擧一動大神様の綱に操られて居るやうな心持が致しますなア」

玉國「何事も人間は神様のお道具だから唯唯神にお任せするより外、道はないの
だ。何事も皆神業だから、是からお前もどんな事があつても今迄のやうにブツブ

ツ小言を云つたり理窟を竝べたりするものぢやありませんか。神様がよい實物教
育をして下さつたのだからなア」

伊太「成程、實に有難いものでムいますなア。オイ、眞純彦、三千彦の御兩人、
こんな事を思ふと、ゾツとするやうだなア、私はもう神様が恐ろしくなつて來た」

三千「如何にもお前の云ふ通りだ。何事も人間の考へではいくものでない。夫だ

から私も御用の途中にデビス姫を連れて行くものではないと、一度は拒んで見たが、これも神様の思召だと思ふて連れて来たのだよ」

伊太「アハハハハ。何とまあ、えらい所へロジツクが當て箝まつたものだなア。

これも皆神様の御都合かなア、エへへへへ」

三千「伊太彦さま、エへへへへ、と云ふ其言靈の色には大に吾々夫婦を侮蔑嘲笑

して居る形跡が見えるぢや無いか。本當に冗談ぢやない。私は眞劍だからなア」

伊太「プツプツプツ、それや眞劍だらう。私だつてこんなナイスと道連れになる

のなら、眞劍も眞劍、大眞劍になるのだがなア」

三千「エエどこ迄も馬鹿にしたものだなア。併し何と云ふても足弱の女を連れて

居るのだから負て置ませう。行く所迄行つたら分りませうかい。萬一女を連れ

て行くが悪いのなら、玉國別の先生がお留めなさに違ひない、黙つていらつし

やる所を見れば何か御都合のある事だらう。なア眞純彦さま、貴方はどう思ひま

す」

眞純「私は何とも申ませぬ。よいとか悪いとか云ふだけの知識も無ければ權能も

ありませぬ。何事も惟神だとお蔭を頂いて居ります」

伊太「ハハハハハ。さうすると伊太彦さまの敗北かな、ヤ恐れ入りました。到底寡を以て衆に敵する事は出来ませぬ。もう此上は謹んで御夫婦の前途を祝します。そして恠氣がましい事はこれより止めますから、何卒神直日大直日に見直し聞き直しを願ひませう」

玉國「まアまアこれで内訌も治まり、一先づ安心だ」

アンチーは嬉しさの餘り、無雑作に生えた髯を撫で乍ら、島で作つて歌つて居た歌を交へて船唄を歌ひ、一同の御愛嬌に供した。

アンチー「イツミの國のスマの里　バーチルさまの家の子と

仕へて茲に二十年　　日日毎日主従が

月夜と暗の隔てなく　　キヨメの湖の魚を

掻きまはしつゝ殺生した　　其天罰が報い來て

漁舟は沈没し　　力と思ふ吾主人

行衛も知れずなり給ひ

後に残つたアンチーは

人無き島に助けられ

鳥の卵や果物を

取りて漸く生命を

保ち居るこそ果敢なけれ

沖を遙に見渡せば

幽かに白帆の影見ゆる

呼べど叫べど此島は

危険区域と知る故に

鳥の外より近寄らぬ

聲を嚙して叫べども

打ち寄せ来る波の音に

呑まれて聲は響かない

八千八聲の時鳥

この岩洞に姿をば

隠して朝夕泣くばかり

もう此上は因果腰

定めて島の王となり

いや永久にセリバシー

生涯此處に送らむと

思ひ定めし苦しさを

朝日は空に煌々と

輝きたまひ夜を守る

月の姿はテラテラと

晝と夜との隔てなく

恵の露を垂れたまひ

果敢なき身をば守ります

此このフク島しまにつきしより

長ながの年とし月つき人ひとの聲こゑ

一いち度ども聞きいた事ことはない

鷓かもめの聲こゑや鵲うの鳥とりが

夕ゆふへの空そらに歸かへり來きて

翼つばさをやすめ朝あさまだき

朝あさひ日の登のぼるを待まちかねて

チンチン チユンチユン 騒さわがしく

さながら天てん女の音おん樂がくを

奏そうする如ごとく聞きえ來くる

此この聲こゑこそは吾わが身みをば

慰なぐさめたまふ神かみの聲こゑ

忝かたじけなしと伏ふし拜をがみ

風かぜに吹ふかれ雨あめに濡ぬれ

漸やつやく茲こゝ迄までながらへぬ

明あ日すをも知しらぬ人ひとの身みの

人ひとなき島しまに斃たふれなば

吾わが遺なきがら骸を如何いかにせむ

せめて命いのちのある中うちに

身みを躍をどらして水みな底そこへ

落おち込こみ此この世よの苦くるしみを

逃のがれむものと幾いく度たびか

思おもひ煩わづらひ居あたりしが

ハツと心こゝろを取とり直なほし

斯かくも月つき日の御おん守まもり

吾わが身みの上うへに照てる上うへは

いつかは海かい路ろの風かぜが吹ふき

助たすけの船ふねの現あらはれて

戀しきスマの故郷へ 歸られる事もあらうかと

氣を取り直し手を拍つて 天地の御恩を感謝しつ

際限もなき海原を 眺めて又もや生かへり

いつしか淋しさ悲しさも 歡喜の涙となりかはる

人は心の持ちやうで 安全地帯の此島も

地獄の底と感じたり 天國淨土と感じつつ

悲喜交々の生涯を 送りし吾ぞ奇びなれ

ああ惟神々々 神の御靈の幸倍て

今日の生日の生時に 三五教の神司

初稚姫のお弟子なる 數多の司に助けられ

又もや戀しき御主 無事なお顔を伏し拜み

久し振にて故郷に 歸り行くこそ嬉しけれ

嬉し涙は胸に満ち 心はいそいそ飛び立つ思ひ

夜か現か幻か 吾と吾が身がはかられぬ

深き恵のキヨの湖

浪間を迂り歸り行く

スマの館へ歸りなば

主人の妻のサーベルさま

嬉し涙を湛へつつ

手足に取りつきし噛みつき

喜びたまふ事だらう

私は元より獨身者

ようまアお歸りなさつたと

訪のう妻は有りませぬ

思へば思へば味氣なき

憂世を渡る獨身者

憫みたまへ惟神

神の教の神司

心に積りしありたけを

一つも残さず吐き出して

救ひを願ひ奉る

三年振にて海の上

目無堅間の船に乗り

歸りて行くぞ有難き

主従二人が謹みて

此世を救ふ大神の

御前に感謝し奉る

ああ惟神々々

御靈幸倍ましましてよ

伊太「アハハハハ、矢張アンチーさまも一人は淋しいと見えるな、

家へ歸つて精の無い私

門に迎へる妻はない。

と云ふ筆法ぢやな。それや私も同じ事だ。折角宣傳使様のお伴して、功名手柄を

現はし家に歸つた所で、考へて見れば妻もなし、ほんに思へば思へば淋しいもの

だよ。お前も三千彦さまの夫婦連れを見て羨うなつて來たのだな。併しこの伊太

彦雙手を上げて賛成だ。ヤア是で俺も一人の知己を得たものだ。同病相憐れむと

云ふ事があるからアンチーさま今後は私と堅い握手をして互に力にならうぢやな

いか。お前と私の私交上の事だから別に先生の許しを受ける必要もなし、三千彦

さまや、眞純彦さまに氣兼ね要らぬ。一つ日英同盟でもやらうぢやないか。なあ

アンチーさま」

アンチー「ハイ、有難う、何分宜敷く願ひます。私も何時迄も御主人の家に御厄

介になつて居るのも詮りませぬから、何とか國へ歸つたら身の振り方を考へねばならないと思ふて居ます」

伊太「ヤア、そりや感心だ、さうなくてはならぬ。もし三千彦さま、私は同性の女房を持ちましたから、何卒宜敷く御交際を願ひます、アハハハハ」
(大正一二・三・二九 舊二・一三 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

第一八章 船待(一四九三)

スマの濱邊の青芝草の上に胡床をかき、湖水の波を眺めて缺伸をきざみ乍ら雑談に耽つて居る二人の男があつた。此二人はバーチルが家の僕アキス、カールであつた。

アキス「おい、カール、昨日から今日で三日が間、毎日日案山子か何かの様に湖の面ばかり眺めて頬邊を蟆子に咬まれ、待つてるのも宜い加減のものぢやな

いか。まるで夢でも見て居る様だな、俺ヤもう斯んな事ア嫌になつた。さつぱりアキスだよ」

カール「何と云つても御主人が三年も行衛が分らず、何時カールか、歸らぬか分らないのだからな。奥さまがあつても主人が居らなけりや矢張アキス見たやうなものだ。然しまあアキス狙ひが出て來ぬので、まア結構だ。此頃奥さまは神經興奮して主人が歸つて來るから、迎へに行け迎へに行けと尻に火がついた様に仰有るものだから、かう來たものの、奥さまは夢でも見たのだらうかのう。本當に御夫婦仲の良いものだつたが、ああ鰥鳥となると何とはなしに淋しうなつて來てチツとは氣も變になつて來やうかい。奥さまは旦那様が漁に行つたきり、番頭のアッチーを連れて、十日経つても二十日経つても姿をお見せ遊ばさないの、到頭出られた日を命日として鄭重な葬式を遊ばし、石塔までお拵へになつた位だから、もう旦那様は歸らぬと締めて居られると思つて居つたのに、此頃は何かイソイソとして旦那様が歸つて來ると仰有るが本當に困つて了ふわ」

アキス「それでも今年で三年にもなるのに後添ひも入れず神妙に貞淑を守つて居

なさる所は本當に見上げたものだよ。何と云つてもスマキつての財産家だから種々の男が色と欲とで言ひ寄り、初めの間は淋しからうとか、留守見舞だとか云つて出入りする罪深い奴が澤山あつたが、誰も彼も皆エツパツパを喰はされて、此頃は到底駄目だと締めて性悪男の影も見ない様になつたのは、まだしもの幸だ。併し乍ら大變な神経質ぢやないか。あの一年祭の法事を勤められた時、俺等も一緒に旦那様の石碑の前で祭典を行ひ、奥様が一生懸命に泣聲を出して口説いてゐた時は本當に側に居る俺等も涙が零れたよ。夫婦の情と云ふものは斯んなものかと感心したよ。本當に貞淑な女だなア」

カール「うん、さうさう、俺もその時には本當に涙が零れたよ。やがて三年祭が出て来るのだが、あの時の様な滑稽は今度はあるまいね。奥様が一生懸命に石塔に向つて仰有るのには、もし、旦那様、貴方は可愛い妻子を振り棄てて私がお諫め申すのもお聞き遊ばさず、番頭と一緒に性凝りもなく殺生をしておいで遊ばした。その天罰と申しますか、何と申すか知りませぬが到頭貴方は魚の爲に尊い命を奪られたぢやありませんか。もし貴方に靈があるのなら何とか證を見せて

下さい」とそれはそれは人目も憚らずお泣き遊ばした時は本當に側に居るのも苦しい様だつた。そして所、旦那様の石塔がガタガタと動き出した。俺は吃驚して魂が宙を飛ぶ様になつて居た。それでも奥様は泰然自若たるもので、「旦那様、貴方は石塔になつてからも私の事を思ふて下さいますと見えまして、只今石塔がお動き遊ばしたのは、全く性念がお在りになるのでムいませう。何卒一言女房と云つて下さい。お願いでムいます」と泣いて口説かれた時は本當に氣の毒で堪らなかつたぢやないか。後から考へて見れば石塔が動いたのは丁度その時、地震があつたのだ。あの時、ケルの家もタク公の家もメチャメチャに壊されて了つたぢやないか。その時は本當に旦那様の石塔が動いたのかと思つて、どれ丈け俺は肝を潰したか分らなかつたよ。後で思つて見れば實に滑稽だつたな」

アキス「うん、そんな事があつたね。然し餘り氣の毒で、地震で動いたのだと云ふ事も出來ず、奥様は一生懸命に矢張り石塔が奥様の誠に感じて動いたのだと信じてゐるのだから、本當にお憐いものだ。然しどうだらうな、本當に旦那様がお歸りになるのだらうか。昨日の日の暮れ頃に海賊船が七八艘、向ふの方を通りキ

ヨの港みなとに行いつたきり、漁船ぎよせんも通とほらねば船ふねらしいものは、此方こちらに來こないぢやないか。奥様おくさまの話はなしによれば立派りつぱな船ふねに乗のつて澤山たくさんの人ひとに送おくられて歸かへつてこぎと仰おつしや有あるが、まるで雲くもを掴つかむ様やうな話はなしぢやないか。この炎天えんてんに頭あたまを曝さらされてはやりきれないわ。木の蔭かげでもあれば辛抱しんばうが出來できるのだが、見渡みわたす限り木き一本いっほんもない此濱邊このはまべに居ゐるのは、もうアキスだ。何處どこか友達の處ともだちにでも行いつて悠ゆうくり休きう息そくして歸かへらうぢやないか

カール「それだと云いつて、もしや、ひよつと旦那様だんなさまが歸かへられたなら、それこそ大變たいへんなお目玉めだまを喰くらはねばならぬよ。あれ丈だけ奥様おくさまが喧やかましく狂人きちがひの様に仰おつしや有あるのだから間違まちがひなからうと思おもふよ」

「俺おれも何なんだか歸かへつてこぎる様な氣持きもちもするなり、歸かへられぬ様な氣きもするなり、變へんな氣きになつて來きた。もしや氣きが違ちがふのぢやあるまいかな。餘あんまり炎天えんてんに照てらされたので頭あたまがカンカンする様やうになつたのだから可怪をかしいものだぞ」

斯かる所ところへ一人ひとりの男をとこ、ヒヨロリヒヨロリと千鳥足ちどりあしに眞赤まっかな顔かほし乍ながら歩あゆみ來きたり、男をとこ「エ、ベランメー、貴様きさまは毎日まいにち日日ひにち此暑このあついのに、斯こんな處ところに屁太へたりやがつて、

何を^{なに}して^{して}け^けつ^つか^かる^るの^のだ。何^{なに}程^{ほど}湖^こ水^{すい}を^を眺^{なが}め^めて^て居^をつ^つて^も、滅^めつ^つた^たに^に魚^{さかな}は^はお^お前^{まへ}の^の前^{まへ}へ^へ跳^とん^んで^で来^くる^る氣^き遣^{つか}ひ^ひは^は無^ない^いぞ。空^{そら}飛^たつ^つ鳥^{とり}が^がお^お前^{まへ}の^の前^{まへ}へ^へパ^パタ^タリ^リと^と落^おち^ちて^て来^くる^る筈^{はず}も^もな^なから^らう。何^{なん}だ、用^{よう}も^もな^ない^いの^のに^に荒^{あらい}男^{をとこ}が^が毎^{まい}日^{にち}日^ひ日^{にち}缺^{あく}伸^{くび}ば^ばつ^つか^かり^りし^しや^やが^がつ^つて^て氣^きの^の利^きか^かない^い野^や郎^{らう}だ^だな。此^{この}頃^{ごろ}は^はチ^チツ^ツと^と逆^の上^ほせ^せて^て居^ある^るの^のだ^だな。お^お前^{まへ}の^の宅^{うち}の^の女^{をんな}主^{なし}人^{しゆじん}が^が變^{へん}な^な事^{こと}を^を口^{くち}走^{はし}る^るもの^{もの}だ^だから、狂^{きちがひ}人^{びと}が^が傳^{でん}染^{せん}し^しよ^よつ^つて、毎^{まい}日^{にち}日^ひ日^{にち}斯^こんな^{んな}處^{ところ}に^に烏^{からす}の^の嚇^{おど}し^しの^の様^{やう}に^に來^きや^やが^がつ^つて、何^{なん}だ。措^おけ^お措^おけ、そ^それ^れよ^より^りも^も俺^{おれ}の^の所^{ところ}へ^へ來^きて^て酒^{さけ}の^の一^{いっ}杯^{ぱい}も^も飲^のんだ^だ方^{ほう}が^が面^{おも}白^{しろ}い^いぞ。此^{この}テ^テク^クさ^さま^まは^は朝^{あさ}から^ら晚^{ばん}ま^まで、バ^バラ^ラモ^モン^ンさ^さま^まか^から^ら結^{けつ}構^{こう}な^な御^お手^て當^{あて}を^を頂^{ちやう}戴^{たい}し^{して}三^{さん}五^ご教^{けう}の^の宣^{せん}傳^{でん}使^しや^や信^{しん}者^{じや}を^を探^{さが}し^し廻^{まは}つ^つて^て居^ある^るの^のだ。何^{なん}でも^{でも}今^け日^ふ明^あ日^すの^の中^{うち}に^にキ^きヨ^よの^の港^{みなと}へ^へ着^つく^くと^と云^いふ^ふ事^{こと}だ^だが、其^そ奴^{いつ}でも^も取^とつ^つ捉^{つか}ま^まへ^へて^て見^みよ。結^{けつ}構^{こう}な^な御^ご褒^{ほう}美^びを^を頂^{いた}い^だて、甘^{うめ}え^え酒^{さけ}が^が鱈^{たら}腹^{ふく}飲^のめる^るの^のだ。チ^チツ^ツと^と俺^{おれ}の^の宅^{うち}へ^へ出^でて^て來^きて^て酸^すツ^ツぱ^ぱい^い酒^{さけ}の^の一^{いっ}杯^{ぱい}も^もや^やつ^つて^て一^{ひと}働^{はたら}き^きす^する^る氣^きは^はな^ない^いか。こ^こん^んな^な所^{ところ}へ^へ屁^へ太^た張^ばつ^つて^て居^ある^るも^も氣^きが^が利^きか^かね^えー^や」
ア^アキ^ス「お^おい、テ^テク、貴^き様^{さま}は^は毎^{まい}日^{にち}日^ひ日^{にち}酒^{さけ}に^に酔^よつ^つ拂^{ばら}つ^つて、ど^どう^うし^して^て其^{その}金^{かね}が^が出^で來^きる^るか^かと^と思^{おも}つ^つたら^らバ^バラ^ラモ^モン^ンの^のス^スパイ^{パイ}を^をや^やつ^つて^てる^るの^のだ^だな。そ^それ^れで^では^はス^スパイ^{パイ}酒^{さけ}で^でも^も飲^のめる^る筈^{はず}だ^だ。然^{しか}し^し人^{にん}間^{げん}と^と生^うま^まれ^れて^て犬^{いぬ}の^の様^{やう}な^な事^{こと}は^はせ^せぬ^ぬもの^{もの}だ^だな」

テク「何、犬とは何だ。馬鹿にするない。そんな事申すと、貴様を三五教の信者と申し立て、關所へ「恐れながら……」と密告するが如何だ」

アキス「ヘン、そんな嚇し文句を喰う様な俺かい。俺の主人はバラモン教の立派な信者だ。その宅に奉公してる俺だぞ。いつもバラモン教の宣傳使が何だか難かしいお教を旦那様の靈前に唱へに來て下さる位だから、そんな事云つたつて、お取り上げになるものかい」

テク「やア、そいつア失敗つた。それぢや物にならぬわ。然し乍ら貴様に云つて置くが、ひよつとしたら風の吹き廻しで此磯端へ三五教の奴が漂着するかも知れぬから、その時俺の所へソツと知らせに來て呉れ。さうすりや澤山の御褒美を戴いて、うまい酒を鱈腹飲まうと儘だからなア」

アキス「俺は酒は嫌ひだ。もとより下戸だからのう。そんな人の嫌がる事をして金を貰ひ、酒を飲んだ所が腸を腐らす許りで、何の得る所もないから、まア御免蒙つとこかい」

テク「ヘン措きやがれ。唐變木奴、酒の趣味の分らぬ數の子舌では話がないわい。

馬鹿らしい、これから一つ濱邊を迂路ついてよい鳥を見つけ出して酒錢を拵へよう。まア貴様等は其處で悠くり酒麴の背を干して居るが宜からうぞ」

カール「構ふて呉れない。お金が欲しけりや奥さまに何程でも俺は頂戴するのだ。チツと貴様とは境遇が違ふのだからな」

テク「ナナナ何だ。虎の威を借る古狐奴、主人が何程金持だつて、それが何になる。貴様はド甲斐性の無い、「ヘーヘー、ハイハイ」と首陀の家に、こき使はれ五斗米に腰を屈する卑劣な奴だ。此方は獨立獨歩の御主人様で十日に十人口だ。こんな大家族を支へて行く丈けの腕前があるのだからな。へん、チツと身魂の製造が違ふのだから、餘り馬鹿にして貰ふまいかい」

アキス「アハハハハ、獨身生活をし乍ら十人口の大家族だなんて、何、馬鹿吐きやがるのだ。俺だつて百日に百人口だ。十人口の家族よりも百人口の家族の方が餘程世帯が大きいぞ。よい加減に酒喰ひは、ここを立去つて呉れ。熟柿臭くて鼻が曲りさうだ、八百屋店でも廣げられ様ものなら堪りきれないからのう」

テク「エー、こんな没分曉漢に係り合つて居つても鏗一文にもならないわ。此テ

クさまも一つテクテクと其處邊中をテクツて見て、犬ぢやないが棒に當つて見よ
うかい。酒も酒も分らぬ奴だなア
と惡垂れ口を吐き乍らヒヨロリ ヒヨロリ濱邊傳ひにキヨの港方面さして足許危
く歩み行く。

アキス、カールの兩人はテクの後姿を見送つて、時にとつての慰みと手を拍つ
て笑つて居る。

アキス「テクテクとテクの棒奴がやつて來て

グデングデンと舌を捲きつつ。

千鳥足ヒヨロリヒヨロリと濱傳ひ

酒の肴を漁りつつ行く

カール「いつとてもテクの棒奴がスパイをば

勤めてスツパイ酒を飲むなり。

バラモンの俺はスパイと偉さうに

法螺吹き散らしスパイ屁を放る

アキス 待ち詫びし主人の君は歸りまらず

家に歸りて如何に答へむ。

あてもなき主人の君を待ち詫びて

暑さに悩む吾ぞ果敢なき

カール どうしても主人の君が歸りますと

云ひきり玉ふ奥様の口。

口ばかり歸る歸ると云つたとて

向むかふみずなる湖うみに影かげなし
□

アキスア 今け日も亦また空むなしく待まちし信あは天う翁どり

羽はばたきするも心こころ曳ひかるる。

鶺鴒うのやう様に首くびを傾かたげて待まつ二人ふたり

只ただ海うな風かぜの音おとのみぞ聞きく
□

斯かく歌うたふ折をりしも遙はるか向むかふの水すい面めんに霞かすみの間あひだから小ちひさき白しら帆ほが浮うかんで居ゐるのが目めに
つついた。アキスは手てを拍うつて打う喜よろこび、

アキスア 有あり難がたし向むかふに見みゆる白しら帆ほこそ

主ある人の君きみの御み船ふねなるらむ
□

カール 船見れば主人の君と思ひ込む
その喜びは水の泡ぞや

アキス 今日で三日船の姿も見ざりけり
何は兔もあれ床しくぞ思ふ

カール 頼みなき船を眺めて吾主人
歸りますぞと思ふ果敢なさ

アキス 何となく心の勇み來るを見れば
主人の君と信ぜられける

カールカール 〇 あの船ふねにもしも主人あるじの在ましまさば

吾身わがみの疲れつか頓とみに癒いゆべし。

さり乍ながら竿さをにて星ほしをがらつ様やうな

果敢はかなき夢ゆめを見みる人ひとぞ憐あはれら

アキス 〇 何故なにゆゑか白帆しらほの影かげは懐なつかしく

思おもはれにけり心勇こころいさみてら

カール 〇 眞帆まほ片帆かたほ揚あげて通かよふ此湖このうみは

量はかり知しられぬ魔まの湖うみと聞きく。

吾々われわれが迷まよふ心こころを推おし量はかり

醜しこの魔神まがみの圖はかるなるらむら

アキス 『待ち詫びし船の姿を眺むれば

半心は安まりにける。

吾主人もしも居まさぬその時は

一つの首を汝に與ふる』

カール 『面白い自信の強い其言葉

アタ邪魔臭い首を貰ふか』

アキス 『此首は一生使ふ吾寶

うかうか渡す馬鹿があらうか。

吾主人乗ります船と知りしより

かたき誓ひを立てしものぞや』

カールまこと 誠まことならば吾われも喜よろこび手てを拍うつて
雀踊すずめまじりを舞まふて見みせなむら

アキスこころたの おひおひに近ちかづく船ふねの影かげ見みれば
心こころたの樂たのしくなり増まさり行ゆく。

かたい事こと云いふぢやなければ彼あの船ふねは
主人あるじの君きみが屹きつと度ま在まします。

もし之これが違ちがふた時ときは約やくそく束そくの
首くびをお前まへに渡わたす覺かくこ悟こだら

カールまへ ほんにまアお前まへの強つよい自じ我が心しんに
俺おれも呆あきれて物ものが云いはれぬ。

あの船ふねにもしも主人あるじが在ましまさば
お餅もちを搗ついて大祝おほいはひせむむ

アキス 村中むらちゆうに酒さけや肴さかなに餅配もちくばり

十日とをか二十日はつかと祝いはひつづけむ。

奥様おくさまが俺おれに確しつり云いはしやつた

主人あるじの顔かほは望月もちつきの神かみ

斯かく二人ふたりは半信半疑はんしんはんぎの念ねんに驅かられ、近ちかづき來きたる船ふねを眺ながめて首くびを鶴つるの如ごとく延のばし
て、もどかしげに待まち倦あくんで居ゐる。白帆しらほの形かたちは次第しだい々しだいに大おほきくなつて舳へさきに立たつ
て居ゐる人の影かげさへ肉眼にくがんにて認みとめ得うる迄まで近づちかづいて來きた。二人ふたりは手てをつなぎ磯端いそばたにキ
リキリ舞まひをして、何なんとはなしに心勇こころいさみ跳とび廻まはつて居ゐる。空そらには巨鳥きよてうが一文字いちもんじに羽はね
を擴ひろげ微風びふうをきつて、いと鷹揚おうやうげに前後ぜんご左右さいうに自動飛行機じどうひかうきの演習えんしふをやつて居ゐる。

(大正一二・三・二九 舊二・一三 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第四篇 猩猩々潔白

第十九章 舞踏(一四九四)

酷熱こくねつの太陽たいやうは、脳天なうてんから火ひを浴あびせるやうに照てりつける。スマの濱邊はまべの小芝草こしばぐさは、暑熱しょねつに堪たへ兼ねて喉のどを乾かわかし、何れいづの葉はもキリキリと渦うずを巻まひて、針はりのやうになつて居ゐる。アキス、カールの二人ふたりはサーベル姫ひめの命令めいれいに依よつて炎天えんてんの太陽たいやうを浴あびながら、朝あさから晩迄ばんまで沖おきを眺ながめて當あてもなき主あるじの歸かへり來くるを夢路ゆめぢを辿たどる心地こちちで待まつて居ゐる。

遙の沖合に白帆が、ポツと目に映つた。二人はこれこそ主人の歸り來る船であらうか、但しは他人の航海船だらうかと、半信半疑ながらも稍望を屬して居た。白帆は刻々に近より來る。二人は手を繋いで磯邊の芝草の上に、まだ分らぬ主人の歸國を、喜びながらダンスをやつて居る。心のせいか頭上に飛ぶ諸鳥も二人のダンスに和して、主人の歸國を祝する如く思はれ、上下一致拵舞雀躍の光景を誰憚らず呈して居る。

二人は汗塗になつて息を喘ませ、少時息をやすめて沖を見て居る。忽ち沖合より七八艘の船、垢染だ帆を上げ、見る見る内に白帆の船を前後左右より取り圍んでしまった。茶色の帆は七ツ八ツ、白帆は一ツ互に追つ追はれつ浪靜かなる湖上に蝶の舞ふ如く活動を初めて居る。

アキス「おい、カールもう駄目だ、又違つたやうだ。あの白帆をあげたのは何うやら三五教の宣傳使が乗つて居る船らしいぞ。さうして垢染だ帆を上げて居る船はバラモンの捕吏の船だ。旦那様がお乗り遊ばして居る船ならばバラモン信者だから、滅多に追ひかける筈がない。お前どう思ふか」

カール「どうも合點が行かぬぢやないか、折角ながらもう締めて暫く、アヅモス山の木蔭へでも這入つて暑さを凌がうぢやないか。いつ迄もこんな所に居つては日射病に罹つて仕舞ふよ。アアあれ見よ、白帆が見えなくなつたぢやないか、まさか沈没したのぢやあるまいなア。暑いから歸らうぢやないか、アヅモス山の木蔭迄」

アキス「それでも主命に背く譯には行かない。「心頭を滅すれば火も亦自ら涼し」と云ふぢやないか。一つ此處で歌でも詠んで心を練り直し、元氣をつけて見ようかい。先づ兼題として夏の歌で、先づ俺から初めて見よう」

アキス「夏は

人間にとりて

休むべき時ではない

むしろ一層強く

働くべき時だ

見よ

日は天に輝き

雷霆轟き

人間の周囲にある

草も木も

此時に孳々として

盛んに生長し繁茂しあるに

人間の目安閑として

ひとり

徒然として

避暑に耽り

遊惰にこの好日を

銷過することが出来やうか

國祖の大神は

開闢かいびやくの太初はじめより今日こんにちに至いたる迄まで
一日いちにちも

片時かたときも秒間べうかんも

休養きうやうせずごじんに吾人ごじんのため

働はたらきたまふではないか

眞しんに

天地てんちの間あひだに流行りうかうする

この孟然まうぜんたる

至大しだい靈活いれいくわつの一氣いっきを

感得かんとくするものものにありては

勞働らうどうこそ

却かへつて無上むじやう唯一ゆゑいつの安息あんそくである

蓋けだし

眞しんの安息あんそくは

彼の臍帯によりて

母體と氣息を通過する

胎兒のそのの如く

自然法界の靈運に

順應する生活

活動の中に存する而已である

カールなるほど「成程そいつは面白い、萬木萬草のせつせつと繁茂する夏はよいシーズン

だ。人間は夏が来れば冬の来る事を望み、冬が来れば又夏の来る事を希望する、

勝手な厄介な代物だ。俺も一つ夏の歌を詠んで見よう、

夏の日なつひは

決して暑いものではない

またしても またしても

吾人ごじんの心こころに燃もえつく

名利肉樂みやうりにくらくの欲火よくくわが熱あついのだ

生うまれながら

吾人ごじんの心中しんちゆうに燃もえてゐる

貪瞋癡愛どんしんちあいの

毒焰どくえんがあついのだ

四時しじ永久とこしへに

吹ふきわたる

聖靈せいれいの涼風りやうふうを納いれて

かの欲火よくくわと

毒炎どくえんとを

消けすことを礙さまたぐる

密ひそかに

鎖とぎされた

心の頑壁こころ ぐわんぺきそのものが

清涼せいりやうなるべき夏なつを

さながら焦熱せうねつぢしやく地獄と

感ぜかんしむるのだ

吾人ごじんは聖靈せいれいの涼風りやうふうに

吹ふかれて

天國てんごくの春はるに進すすむべきのみだ

アキス、アハハハハ、如何いかにも夏なつらしいなつかしき歌うただ。併しかし乍ながら口くちでは強つよい事ことを云いつて居をるものの、矢張やはり暑あつい時ときは暑あついなア。この芝草しばぐさもたうとう屁古へこ垂たれたと見みえて、錐きりのやうに縮ちぢかんだぢやないか。旗はたを捲まき矛ほこを納をさめて、炎熱えんねつぐん軍ぐんに追撃つめげきされ、山寨さんさいに立たて籠こもつたと云いふ體裁ていさいだ。ほんたうに夏草なつぐさの先生せんせい、このアキスも同どうじ情致やういたしますよ。俺おれも何なんだか俄にはかに急性退屈きふせいたいくつえん炎えんが勃發ぼつぱつしさうだ。エ、氣分きぶん直なほしに秋あきの歌うたでも詠よんで見みよう。

涼すずしい秋あきが來きた

そして何處どこともなしに

もの寂さびしい

遠とほき近ちかき四よ方もの山やま野のに

錦にしきを織おり出だした佐保さほ姫ひめの姿すがたは

滿まん目もく光くわう耀えうとして

心こころの駒こまも

いいやに落おち付つく

紅あかや萌も黄えぎの色いろあでやかな

楓かへでは

日に夜ちやに其その美びを發はつ揮つきし

萬ばん丈じやうの衣ころもを晒さらすに似にたり

山やま奥おくに妻つま呼よぶ

小さ男を鹿しかの聲こゑは

偕かいらう老らう々らう々らうと聞きこゆれど

何なんとなく悲ひてう調てうあり

小さよぎぬた夜た砧おとの音おともまばらになりて

霜しもの夜よを艱かこつか

日ちやぼ鷄ぼの謳うたふ聲こゑも

いとど憐あはれを催もよほし

四よも方のた田たの面もは

黄こがね金のなみ波なみを漂ただよえ

御みよ代のふうき富ふうき貴きを誇ほこりつ

鍬くはと取とりし農のうふ夫ふの

書かき入いれ時じき期きとはなりぬ

アア去されど

自しぜん然かい界かいの太たい陽やうは

光ひかり益ます々ます強つよくして

その愛熱衰へあいにつおとろ

秋霜烈日の輝きしゅうさうれつじつ かがや

斜に萬木萬草をななめ ばんぼくばんさう

悩ませしへたげ滅盡し了へねばなや けつじん したへねば

休止せない勢であるきゅうし いきはひ

アア地上の草木はちじやう さうもく

熱に遠ざかりねつ とほ

光りに害はれひか そこな

枯れ朽つることありともか く

夕の蟲の數々はゆふへ むし かずかず

聲を揃へて果敢なげにこゑ そろ はか

世を歎くともよ なげ

尊き大神のたふと おほかみ

愛善と神熱とあいぜん しんねつ

あたたか
温みの籠もれる

しんくわう
神光を十二分に與えられた

ごじん
吾人は所謂

ばんぶつ
萬物の靈長だ

てんち
天地の花だ果實だ

えいゑん
永遠に咲き匂ふ

てんかい
天界と地上の花だ

かみ
神の生宮

てんにん
天人の前身だ

い
否な天人の靈身と

しぜんかい
自然界の肉身の相應神たる

ごじん
吾人には

あき
秋も無ければ

ふゆ
冬さえも來らない

只永遠ただえいゑんに花咲はなさき匂におひ

鳥謳とりうたひ蝶舞てふまひ遊あそぶ

春はるの日ひと

萬木ばんぼく萬草ばんさうの繁しげり榮さか行く

天惠てんけい的てきの夏なつと計ばかりだ

去されば吾人ごじんは

秋あきも冬ふゆも苦くにはならない

主すの神かみの内流ないりう的てき神格しんかくに

恵めぐまれた生いける身魂みたまたる以上いじやうは

永遠えいゑん無窮むきうに

天國てんごく地上ちじやうの花はなだ

劍つるぎをかざして萬有ばんいうに迫せまる霜柱しもはしらも

冷つめたき空そらの殘月ざんげつに照てる恐おそろしさ

吾われはこの慘憺さんたんたる光景くわうけいをみて

天人てんにんの白しろき柔やはかき

温情をんじやうの籠こもる

肌はだへと感かんずるのだ

又またピユウ ピユウと吹ふき荒すぶ

けたたましい木こがらし枯おとの音おとも

天津あまつをとめ乙女をとなの奏かなづる

笙しやうの音ねとぞ聞きく

アア面おも白しろきかな

天國てんごくの春はるよ

人間にんげんの世界せかいの秋あきよ

カールなるほど成程なるほど、偉えらい馬力ばりきだ。甘うまい事ことを云いふなア。併しかしお前まへにそれだけの覺悟かくごがあるのか、ちつと怪あやしいものだなア

アキスとアキスだから、兔とも角秋かくあきの歌うたを詠よんで見みたまでだ。總すべて詩人しじんと云いふもの

は空想を描いたり、上手に嘘をつくもの、三十五萬年未來の桃中軒雲右衛門だつて、武士道鼓吹だとか、勸善懲惡だとか聖人らしい事を云つて居るが、其内實はお師匠さまの女房を横領して平氣で演臺に立つて居るのだからア、近頃雨後の筍のやうに、ムクムク頭を上げだした道學先生だつて、バラモンの宣傳使だつて、皆裏面に這入つて見ればよい加減なものだよ。却て俗人の方がどの位正しいか分らぬからア。偽善者や惡人の尊まれる闇の世の中だもの、俺だつて腹の底を叩けば矢張偽善者の仲間かも知れないよ。

カール「ウンさうすると俺も矢張り偽善者かなア。何だか自分の心が憎らしうなつて來た」

アキス「オイ、あれを見よ、何時の間にか澤山の船が見えなくなり、唯一艘此方に向つて慌しく漕いで來るぢやないか。矢張りあれは、旦那様の御船かも知れぬぞ。

來るか來るかと濱へ出て見れば

心嬉しき船が来る」

カール「沖の浪間に白帆が見えるヨ」

あれは主人の居ます船。ア、コラコラ」

と頓に元氣回復して、二人は又もやダンスを初めかけた。船は八挺櫓を漕いで船首に白浪を立て乍ら宣傳歌の聲と共に近より来る。

(大正一二・三・三〇 舊二・一四 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

第二〇章 酒談〔一四九五〕

初稚丸は白帆を疊んだまま、漸くにして磯邊に着いた。アキス、カールの兩人

は雀躍りし乍ら、尻を巻つて遠淺の海をバサバサと待ち兼ねて走り行き、船に食ひつき、中を覗き見れば髯蓬々と生た男が二人、外に眉目清秀の宣傳使や美人が乗つて居るに打ち驚き、思はず大聲を上げて、

アキス「ア、旦那様、ヤ、番頭様」

と云つた切り、早くも嬉し涙に暮れ、後は一言も發し得ず、船の後へ廻り遠淺を幸力限りに押して行く。漸く一同は玉國別を先頭に、順々に上陸した。

玉國「ヤ、イールさま、其外御一同、御苦勞で亙いました。サア是は私の心だけだ。お酒なと食つて下さい」

と懐より若干の金を取り出し渡さうとする。

イール「旦那様、決して決して御心配下さいませ。初稚姫様から澤山の賃を頂いて居りますから、此上頂いては冥加につきませ、お志は有難く頂きます。何卒

お納め下さいませ」

玉國「宣傳使が一たん突き出したもの、何と云つても元に戻す事は出来ぬ。何卒受取つて貰ひたい」

イール「左様なれば御辭退申すも却て失禮、有難く頂戴致します」

と押し頂き、直ちに海面に向ひ、

イール「龍神様、お蔭で無事に送らして頂きました。何卒これから歸り道も長う
ムいますれば、キタの港に歸れますやう御守護を願ひます。これは幣帛料として
差上げます」

と云ふより早く、湖中に向つてバラバラと投げ込んで仕舞ひ、一同に別れを告げ
潔く櫓權を操り、欸乃を唄ひ乍ら歸り行く。

玉國「アア船頭と云ふものは信心の強いものだなア。本當に正直なものだ。寡欲
恬淡にして少しも貪る心のないのは感じ入つたものだ。あの船頭の純潔な心を見
るにつけ、自分達の心が恥かしくなつて來た。いや吾々はまだまだ修養が足りな
い。ああ神様、有難き教訓を頂きました。惟神靈幸倍坐世」

と感謝の涙に暮れながら無事の着港を祝した。

バーチルは、アキス、カールの二人の手を取り、
バーチル「お前は下僕であつたか、よう迎ひに來て呉れた。奥はどうして居るか」

アキス「ハイ御壯健でゐらつしやいます。坊様も極めてお元氣でゐいます」
カール「何だか二三日前から神懸のやうになられまして、時々妙な事を仰有いますが、實に感心致しました。旦那様がお歸りになるからスマの濱まで行つて來いと、それはそれは喧しう仰有いますので、私が此處に三日立ち待ちをして居ました。ようまア歸つて下さいました。嬉しうムいます」
バーチル「ああさうであつたか、それは不思議の事だ。兔も角もこの先生のお伴して一時も早く吾家に歸り、悠くりと休息をして戴かう。サア早く御案内を申せ」

兩人は一時に、

「ハイ、然らば皆様御案内致しませう」

と早くも先に立つて歩みかけた。向ふの方より一人の男、大手を擴げて走り來り、男「オイ待つた待つた、此奴等は三五教の宣傳使だ。神變不思議の魔法使だ。貴様の主人はバラモン教でありながら、三五教の魔法使を連れて歸ると云ふ叛教者だ。バラモン教に對しての、プロテスタントだ。イヤ、バーチルスだ。オイ、バーチル一寸調べる事がある。キヨの港の關所迄一寸來い」

アキス「貴様は泥酔漢のテクぢやないか。グツグツ吐すと此鐵拳がお見舞申すぞ」
テク「ヘン此方の體は三葉葵の紋が體一面について居るのだ。指一本でもさへるならさへて見よ」

玉國別は携へもつた瓢箪の口をあけて、テクの鼻の先につきつけ、微笑しながら、

玉國「お役目御苦勞でムいますな。暑氣拂ひに一寸召し上つたらどうですか」

テク「エへへへ。三五教の宣傳使でも一寸話せるわい、や大に氣に入つた。世の中は斯うなくては、人間は渡れないものだ、「酒なくて、何の己が宣傳使かな」だ。まづまづ一杯頂戴仕らう」

とホクホクしながら瓢の口から息もつかず、喉をゴロゴロ鳴らせながら胃の腑のタンクに臨時灌漑し、瓢を逆さにして掌の上に二つ三つ舞踏させながら、滴る二滴ばかりの酒を御叮嚀にゲソゲソと舐て俄に態度をかへ、
テク「ヤどうも、飛び切り上等の醍醐味を頂戴致しまして、テク實に乾杯の至りでムいます。瓢ぶりに、どうした拍子の瓢箪やら、スコタンやら、コンタンやら、

邯鄲夢の枕のやうな、嬉しい心持が致しますわい。私是からずつと改心をして貴方のお弟子にして頂き、ドツサリドツサリ瓢箪酒を、この甘い甘い、瓢箪酒を、チヨコチヨコ、サイサイ呑まして頂く儀にはゆきますまいかな、譯にはゆきますまいか。本當に氣の利いた先生だ、イヤ氣に入つた先生だ。專制主義のバラモンよりも四民平等主義の、四民平等人類愛の三五教が餘程、餘程、餘程甘味がムいませわい。ウマ味がたつぷりムいます。甘味と云つたら今飲んだ酒も些と許り、チヨククラチヨツト、些し許り、少しでも澤山、ドツサリと頂き度いものでムいます。酒さへ呑ましておけば、酒の氣さへあれば、このテクも、猫のやうな柔しい、温順な、柔和な、柔順な、結構な、お目出度い人間ですよ。それはそれはお目出度い人間です。エへへへへ

玉國「アハハハハ」

バーチル「これ、テクさま私が三年振で目出度吾家へ歸つたのだから、茲一週間の許り、家の財産が無くなつても構はぬ、大祝宴を開くのだから、お前さま一つ酒の方の世話をして貰へまいかな。そして飛び切り上等の酒を何十石でもよい取寄

せて、獻立をして貰ひ度いものだ」

テク「もつとももつとも、御尤も千萬、渡りに船、追手に帆、女に男、テクに甘酒、お酒にテク、テクにお酒、酒がテクか、テクが酒か、酒の中から生れたテクぢや、いやはや承知致しました。確に承諾仕りました。ああああ何だか甘酒と聞くと喉の奴、喉の猫奴がゴロゴロと唸り出しやがった。唾の奴酒の顔を見ぬ先から門口迄お出迎へに出て来る。イヤ唾、酒のつばものも少し辛抱せ。今直ちに供給してやる。否灌漑してやる。蒸氣ポンプ装置が、いや据付けが出来る間だけ辛抱したらよからう。いや、とは云ふものの俺も辛抱仕悪くなつた。オイ先生、この外に臨時御携帯のお持ち合はせの瓢箪、瓢、ひようひようはムいませぬかな三千「アハハハハ。随分タンクと見えますな、そんなら拙者の分も進上致さう。又何れバーチルさまのお宅へ行つて新しいのと詰替ますから……大分浪の上を渡つて来たから此酒は「くたびれ」て居りますれど御辛抱下さい」

テク「ヤ、そいつは有難い、瓢箪酒は古くなる程味がよいのだ。風味があるのだ。三日も四日も揺つた酒はねんばりとして、むつくりとして口當りがよいものだ。」

ヤ有難い有難いありがた有難いありがた」

と云ひ乍らグイと三千彦の手より引手繰るやうにして受取り、瓢を額の邊りまで突き上げ尻を見て、

テク「エへへへこの瓢助の奴、随分酒を喰ひよつたと見えて、イヤ吸ふたと見えて赤い顔をして居やがる。いや赤い尻をして居やがる。恰でお猿を見たやうだ。お猿の尻は赤い。やア面白うなつて來おつた。いや尻赤い、尾も白狸の腹鼓、切れる程頂きませう。や、頂戴致しませう」

と口をポンと取り餓鬼のやうに喇叭呑みを初め出した。瓢酒の音トブ トブ トブ トブ、喉の音ゴロゴロ、キユウ キユウ キユウ、チュウー。

テク「アア、よう利く般若湯だ。醍醐味だ。命の水だ。百薬の長だ。何とまア、調法なものだなア。結構毛だらけ猫灰だらけ。餘り甘くて美味しうて、味がよう

て、開いた口がすばまりませぬよ。開いた口に牡丹餅。兔口にしんこ、四角口に羊羹、に踵、テクの口に般若湯、渡りに船、順風に帆、鑿に槌、女房に夫、

老爺に初孫、どうした拍子の瓢箪やら、甘い甘い、呑や甘い、甘い事づくめが

重^{かさ}なつたものだ。目^め出^で度^たい目^め出^で度^たい、お目^め出^で度^たい。目^め出^で度^た、目^め出^で度^たが三^みつ重^{かさ}なり
て鶴^{つる}が御^ご門^{もん}に巢^すをかける、奥^{おく}さま館^{やかた}にお待^{まち}かね。吾^{われ}等^らもスパイをすつかりやめ
て、人^{ひと}の嫌^{いや}がる探^{たん}偵^{てい}やめて、バーチルさまの御^ご厄^{やく}介^{かい}になり、お世^せ話^わによつてお酒^{さけ}
の御^ご用^{よう}を確^{しつ}り勤^{つと}めませう。エへへへ』
アキス ♪アハハハハ、此^こ奴^{いつ}は面^{おも}白^{しろ}い。酒^{さけ}の味^{あじ}のよい御^ご愛^{あい}嬌^{けう}だ、さア旦^{だん}那^な様^{さま}、早^{はや}く
歸^{かへ}りませう』

と先^{さき}に立^たち、道^{みち}々^{みち}元^{げん}氣^きよく歌^{うた}を歌^{うた}ひ、ヤツコ踊^{をどり}を踊^{をどり}りながら、夏^{なつ}の草^{くさ}野^のの炎^{えん}天^{てん}
を歸^{かへ}り行^ゆく。アヅモス山^{さん}の南^{なん}麓^{ろく}に老^{らう}樹^{じゆ}生^はえ茂^{しげ}つた一^{ひと}つの森^{もり}が見^みえる。それがバー
チルの廣^{くわ}大^{たい}な邸^{てい}宅^{たく}であつた。

（大正一二・三・三〇 舊二・一四 於皆生温泉濱屋 加藤明子録）

アキスは一行の先に立ち元氣よく歌ひ出した。

アキス「ああ有難し有難し戀に焦れた旦那さま

番頭さまと諸共に行衛失ふ其日より

今日で殆どまる三年流石平和の家中也

主人の不在となり果てて春は來れども花咲かず

夏の木立も萎れ勝ち秋の木枯吹き荒み

樹々の梢は羽衣を脱いでブルブル慄ふ如

何とはなしに家の内冷たく悲しく暮しける

サーベル姫の奥様は一人の坊さま力とし

いつ歸るとも白波の海に消えたるバーチルの

夫の君を慕ひつつ涙片手に懇ろに

問ひ弔ひを營みつつ朝は早うからバラモンの

神の御前に拜禮し主人の君の冥福を

祈らせ玉ひ日の暮は

アツモス山の御墓場

香華を手向け水供へ

山野河海の珍味物

心を籠めて奉り

夫婦の情の何處迄も

深きを面に現はして

貞女烈婦の鑑ぞと

四方に謳はれ玉ひけり

主人の家に古くより

仕へまつりし吾々は

女主人の御顔を

見る度毎に涙ぐみ

胸に迫りてハアハアと

吐息をつくも幾度か

測り知られぬ悲しみを

やうやう忍びて早三年

皇大神は此様を

憐れみ玉ひてバーチルの

家に降臨遊ばされ

サーベル姫に神懸

遊ばしまして主の君の

歸り來ますと嚴かに

告げさせ玉ひし尊さよ

餘りの事に吾々も

半信半疑の村雲に

包まれ乍ら炎天を

侵してスマの磯に立ち

主人あるじの君きみの歸かへりをば 首くびを延のばして待まち居あたる

時ときしもあれや白浪しらなみの 彼方かなたに見みゆる白帆影しらほかげ

主人あるじの君きみか他人あだびとか 神かみならぬ身みの吾々われわれは

覺さとらむ由よしも夏なつの日ひの 芝生しばふに尻しりを打据うちすゑて

戀こひしき人ひとは吾前わがまへに 歸かへりますかと待まち倦あくむ

心こころの暗やみの開ひらけ口ぐち 暗夜やみよを照てらして日ひの神かみの

東ひがしの山やまの端は昇のほりまし 下界げかいに光明くわうみやうな投げ玉たまふ

嬉うれしき時ときは來きたりけり ああ惟かむながらかむながら神々々

三五あななひけう教みをしへの御教みをしへを 四方よもに傳つたふる宣傳使せんでんし

玉國たまくにわけ別のいっかう一行いっかうに 無むじん人の島しまより助たすけられ

アンチーもろともさまと諸共もろともに 歸かへりますこそ嬉うれしけれ

サーベルひめ姫ひめは云いふも更さら 五歳いっつになつた坊様ぼうさまも

欣喜きんきやくやく雀躍あそ遊あそばして 嬉うれし悲かなしの活劇くわつげきが

奥おくの一ひとま間で遺憾あかんなく 演えんしゆつ出しさるるであります

ああ有難し有難し
バーチル一家は云ふも更

恩顧を受けし里人は
主人の君が恙なく

三年振りで吾家に
歸りましたと聞くなれば

爺々も婆々も孫連れて
お祝申しに来るであらう

門前忽ち市をなし
歡喜の聲は一時に

潮の寄せ来る其如く
館の周圍は人山を

築いて歡喜の花開き
常世の春の賑しさ

眺めて祝ふ瑞祥を
今目のあたり見る心地

心も勇み胸躍り
體は宙に立つ如く

重たき足も軽々と
知らず知らずに進み行く

ああ惟神々々
神の恵みの幸はひて

憂ひに沈む此館
地獄の様な光景も

忽ち變る天國の
彌永久の春となり

飲めよ唄への大歡喜
ああ惟神々々

神かみの恵めぐみを愼つつしみて
 遙はるかに感謝かんしゃし奉たてまつる
 朝あさひ日は照てるとも曇くもるとも
 月つきは盈みつとも虧かくるとも
 假たとへ令だい大地ちは沈しづむとも
 神かみの恵めぐみに助たすけられ
 無ぶ事じでお健まめで莞にこにこ爾こと
 歸かへりましたる吾わが主人あるじ
 その高かう恩おんは何いつ時つの世よか
 必かならず忘わすれ玉たまふまじ
 僕しもへに仕つかふる吾われ々われも
 神かみの恵めぐみを嬉うれしみて
 心こころの鬼おにを追おひ出いだし
 誠まこと一ひとつの御おん道みちに
 眞まこと心こころ籠こめて朝あさ夕ゆふに
 仕つかへ奉まつりて主ぬしの爲ため
 力ちからの限かぎり身みの極きはみ
 誠まことを盡つくし守まもるべし
 守まもらせ玉たまへ大おほ御み神かみ
 御みまへ前に祈いのり奉たてまつる

カールは又また歌うたふ。

有う爲め轉ん變べんは世よの習ならひ

とは云いふものの情なさけない

スマの里にて第一の

大物持と聞えたる

主人の君は朝夕に

漁り許りを楽しんで

暇ある毎に舟を漕ぎ

大海原に網を打ち

大小幾多の魚族を

捕獲し玉ひ里人に

惜しげもなしに與へまし

うまいうまいと舌鼓

打つ里人の聲を聞き

これが唯一の樂みと

家の業をも打忘れ

凝り固まりし漁りの

妙技は益々發達し

漁師の神と仇名され

清めの海の魚族をば

鬼の如くに驚かせ

一大得意になりまして

益々漁業に勉勵し

遂に惡魔に魅られて

レコード破りの暴風に遇ひ

山と寄せ來る荒波に

船諸共に吞まれました

浮きつ沈みつ狸々島

神の守りに救はれて

三年の憂を忍びつつ

三五教の司等に

送られ歸り玉ひけり

ああ惟神々々

神の恵みの有難さ

主人の君のバーチルよ

これから心を取直し

假令魚族の端と云へ

天地の恵みを樂しみて

悠悠遊べる生物を

必ず苦しむ事勿れ

禽獸蟲魚は云ふも更

蟲族草木に至る迄

皆神様の生身靈

宿らせ玉ふ御靈物

無益の殺生し玉ふな

カールの僕慎みて

お家の爲に眞心を

捧げて諫め奉る

ああ惟神々々

御靈幸はひましませよ

館の森に近づいて

木々の梢は青々と

主人の歸りを待つて居る

牡丹の花は廣庭に

媚びを呈して打笑ひ

腮を外した芍薬の

花は舌をばペラペラと

風のまにまに動かせつ

祝ひの酒を待ち兼ねつ

喉を鳴らして待つて居る 屋根の間に巢を組んだ

雀の群はチヨチヨとお家の榮えを祝ひつつ

軒端に匂ふ花燕子花 菖蒲の劍はヒラヒラと

刃を翳して警護する 實にも目出度き今日の日は

幽冥界より歸り来る 主人の君の甦り

龍宮城に遙々と 龜の背中に乗せられて

進みましたる浦島が 乙姫さまの玉手箱

戴き歸りませし如く その喜びは何物も

譬へむ術ぞなかるべし ああ惟神々々

神に感謝し奉る

と歌ひ乍ら一行は早くも宏大なる邸の表門に着いた。

(大正一二・三・三〇 舊二・一四 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第二章 獸婚（一四九七）

玉國別を先頭にバーチルは三年振りに戀しき吾家の表門を潜つた。四邊の光景は自分の不在にも似合はず、極めて生々として居る。庭の手入れも殊更行届き、牡丹、芍薬、燕子花、日和草、その外鳳仙花、鶏頭等が、廣庭の彼方此方に主人の不在を知らず顔に、艶を競ふて咲き誇つて居る。雀や燕は主人の歸りを祝するものの如く、殊更高い聲をして囀り出した。バーチルは感慨無量の面持にて表玄關より玉國別に従ひ、奥の間深く進み入る。

自分が久し振りに歸つて來たのだから女房のサーベルは道の四五丁も喜んで迎へに來て居さうなものだのに、どうしたものが、玄關口迄も迎へに來ないのは、何か大病でも患つて居るのではあるまいかと案じ乍ら、吾居間に宣傳使と共に進み見れば、サーベル姫は床の間に儼然として胡座をかき、兩手をキチンと合して、莞爾し乍ら控へて居る。

バーチルの姿を見るより床の間をヒラリと飛び下り、『キヤツキヤツ』と怪し

き聲を張り上げ乍ら、

サーベル「ホホホホこれはこれはお旦那様、えらう遅い事でございましたね。妾は一步お先へ参りまして僕に準備をさせ、待つてゐましたのよ。貴方も妾と三年が間、あの離れ島に御苦勞なさいましたね。もう此處へお歸りになれば何かにつけて便利もよく、何卒幾久敷く偕老同穴の契を結んで下さいませ様に願ひ申します。宣傳使様も妾の肉體を連れて歸つてやらうかと親切に仰有つて下さいませ。だが、何と云つても畜生の肉體、到底立派な貴方様のお側に仕へる事は出来ぬと存じまして海中に身を投じ、性を變じて奥様の肉體に憑りました。妾は貴方の愛して下さつた猩々夫人でゐます。第二夫人として使つて下さいませ」

「バーチル」はて、合點のゆかぬ事だな。もし先生様、奥は發狂したのではありませんまいか。怪體な事を申すぢやゝいませぬか」

玉國「いや決して發狂でも何でもありません。精神清淨潔白にして純朴無垢な猩々姫様が、貴方を慕つて精靈となり、奥様の肉體にお宿りなされたのですよ。これも因縁でゐますから仲良うお暮し下さいませ」

バーチル「何だか化物の様な感じが致します。嫌らしい者ですな。さうして奥の魂はどうなつたでせうか」

玉國「奥様とお二人ですよ。つまり一體二霊ですから之も因縁と締めて仲良くお暮しなさるが宜しい。これには何か深い因縁が此家に絡つてあるに違ひありません」

バーチル「へー………」

サーベル「妾の夫はアヅモス山の天王の森を守護して居る狸々でムいましたが、バーチルさまの父上バークスさまが妾の夫を罾にかけ命を奪られました。それ故精霊の行く處がありませぬので、バークス様の御息子、即ち此夫バーチルさまの肉體に納まりましたのでムいます。云はばバーチルさまの精霊は妾の夫でムいます。妾は眷族を引き連れ、アヅモス山の森を逃げ出し、磯邊に繋いであつた船に眷族を乗せ、漸く狸々の島に渡つて夫の來るのを待つて居りました。それ故妾の精霊が夫の精霊と通ひし爲めバーチルさまは海を見るのが好きになり、漁を遊ばし到頭漁船は難破して妾の島へ漂着遊ばす様に夫の精霊が致したのでムいます。

決して三年前から夫婦になつたのではムいませぬ』

バーチル『はてな、さうすると私は矢張り二人暮しであつたのか。何とまあ合點のいかぬものだな。いつの間にか猩猩彦の生宮となつてゐたものと見える。切ても切ても合點のゆかぬ事だな』

玉國『靈魂の力と云ふものは恐ろしいものでムいますよ。云はば貴方の肉體はバーチルさまと猩猩彦の合體、奥様の肉體はサーベル姫と猩猩彦の合體ですから一夫婦で二夫婦の生活を營んでゐる様なものです』

バーチル『思ひきや猩猩彦の肉宮と

知らず知らずに世を過ぎしける。

夜も晝も湖の上のみ憧憬れて

漁りせしも仇事でなし』

サーベル（いころ）「心（ひと）なき人の矛（ほこ）をば避け乍（なが）ら

猩猩（しやうじやうがしま）々々（しやうじやうがしま）島（しま）より魂（たま）通（かよ）はせつ。

猩猩（しやうじやう）々の果（は）敢（か）なき身（み）をば持（も）ち乍（なが）ら

物（もの）云（い）ふ人（ひと）に宿（やど）る嬉（うれ）しさ（さ）」

伊（い）太（た）彦（ひこ）「これはしたり思（おも）ひも寄（よ）らぬローマンスを

目（ま）のあたり見（み）る訝（いぶ）かしさかな。

三（み）千（ち）彦（ひこ）の神（かみ）の司（つかさ）よ心（こころ）せよ

汝（なれ）も猩猩（しやうじやう）々の身（み）靈（たま）ならずや」

三（み）千（ち）彦（ひこ）「バーチルは寶（たから）に富（と）める人（ひと）なれば

二（に）重（ちゆう）生（せい）活（くわ）苦（く）しからまじ。

さり乍ら寶貧しき三千彦は

二重生活する術もなし

デビス姫 吾とても矢張二重生活よ

神の任さしの正守護神在す

伊太彦 それならば俺も矢張同じ事

本正副の三重生活

眞純彦 世の中の人は何れも同じ事

善と悪との魂の容物

玉國別たまくにわけ 天地の誠あめつち まことの道みちを悟さとりけり

心こころより來くる人ひとの生涯しやうがい。

猩猩しやうじやうも皆みな天地あめつちの生神いきがみの

尊たふとき靈たまの分わかれなりけり。

猩猩しやうじやう姫主人ひめあるじに盡つくす誠心まごころを

見みるにつけても涙なみだこぼるる

三千彦みちひこ 人の皮かは着きた獸けだものの多おほき世よに

獸けものの皮かはを着きたる人ひとあり。

毛衣けごろもを脱ぬいで芽め出でたく猩猩しやうじやう姫

今いま更あらためて人ひとの皮かは着きる。

つまもを持もつ二人ふたりの中なかに又また二人ふたり

つまも持もつ人ひとを獸婚じうこん（重婚ぢうこん）と謂いふ

サーベルありがた有難しかみ神の大路おほぢに目覺めざめたる
道の司つかさの嚴いづの言靈ことたま」

バーチルか斯うならばただなにごと只何事もかみさま神様に
任せて世をば安やすく渡わたらむ。

猩猩しやうじやうひめつま姫妻からだの體やどを宿として
吾われに仕つかへよ千代ちよに八千代やちよに

アンチーまたおも「これは又思またおもひもよらぬ出來事できごとよ
呆あきれ果はてたる吾心わがこころかな。

さり乍ながら情なさけの道みちは同おなじ事こと
殊ことさら更きよ清きよき姫ひめの御心みこころ」

アキスおくさま 奥様と只ただ一心いっしんに思おもひつめ
猩猩しやうじやうの姫ひめに仕つかへけるかな」

カールにくたい 肉體はよし猩猩しやうじやうに在ますとても
心こころの清きよき姫ひめぞ尊たふとき」

玉國たまくにわけ別」靈界れいかいのその消息せうそくを詳細まつぶさに

教をしへ玉たまひぬ嚴いづの大神おほかみ。

鳥獸とりけものむしけら蟲族くさき草木いたに至いたるまで

皇大神すめおほかみの珍うづの靈みたまよ。

立たちて行ゆくばかりが人ひとの所作しよさでなし
誠まことを立たつる人ひとぞ人ひとなれ。

人多ひとき人ひとの中なかにも人ひとぞなき

あらぬ獸けものが人ひとの皮かは着きて。

表面うはへこそ人ひとと見みゆれど魂たましひは

獸けものの多おほき今いまの世よの中なか」

サーベル「猩しやうじやうひめはら々はら姫ひめ暫ひかく控たてまつへ奉まつる

サーベル姫ひめに口くちを譲ゆづりて」

サーベル「背せの君きみの歸かへりまししと聞ききしより

心こころ勇いさみぬ身みもたなしらに。

背せの君きみを庇かばひ玉たまひし猩しやうじやうひめ々ひめ姫ひめ

吾わが身みを宿やどと定さだめましける。

何となく身も健かになりけり

腹に力の充ち満ちしより。

狸々の姫の命の生身靈

吾身を強く守りますらむ

伊太彦「何事も神のまにまに人の身は

仕ふべき由今や悟りぬ」

サーベル姫「これはこれは旦那様、お懐しうムいます。ようまア無事でお歸り下さいました。貴方の行衛が分らなくなつてからと云ふものは朝夕アツモス山の天王の森へ参拜致し、種々と御祈願を籠めました、どうしても御所在が分りませぬので、荒波に吞まれて魚腹に葬られた事と觀念しまして、形許りの野邊の送り濟ませ、朝は天王の森に夫の冥福を祈り、夕はアツモス山の山腹の墓に参詣

し、悲しき光陰を今日迄送つて参りました。さうした所、二三日以前より俄に妾の體が重くなり、腹の中から種々の事を嘔き出し、貴方が近い中に無事にお歸りになるとの知らせ、それ故二人の僕を濱邊に出し、お歸りを待たせて居りました。妾の肉體には猩々姫とやら云ふ精靈が宿つてる様でムいますが、最前からの猩々姫の歌を聞きました、最早覺悟は致しました。何卒仲良くして添ふて下さいませ。お願いでムいます」

バーチル「ああ女房、どうやら本性になつたらしい。實の所はお前の本當の聲が聞きたかつたのだ。今詠んだ歌はお前覺えて居るかな」

サーベル「はい、妾は貴方の御存じの通り歌なんか一つも出来ませぬ。猩々姫様が妾に代つて歌を詠んでやらうと腹の中で仰有いまして、あの通り珍らしい歌を詠めたのでムいます」

バーチル「うん、さうに違ひない。到底お前の考へではあんな詩才があるとは思はなかつた。ほんに不思議なものだな」

伊太彦「さうすると奥様よりも猩々姫さまの方が餘程詩才に富んでゐられると見

えますな。いや恐れ入った。之では人間も廢業し度くなつて來る」

玉國別「伊太彦さま、お前だつてチヨコチヨコ妙な歌を歌ふが決してお前の知識の産物ぢやないよ。皆副守先生がお前の口を借つてゐる丈けだよ。人は精靈のサ

ツクの様な者だからな。アハハハハ」

伊太「精靈のサツク、へー、つまりらぬものですな。さう考へて見ると別に歌を稽

古したでもなし、直に當意即妙の名歌が浮んで來ると思つたら、矢張守護神さま

が仰有つたのですかな。さうすると私の御本體は何處にあるのでせうかな」

玉國「人間は凡て精靈の宿泊所の様なものだ。そして其精靈は一方は愛善の徳を

受けて天國に向ひ、一方は惡と虚偽との愛の爲に地獄に向つて居る。善惡混淆の

中間状態にあるのが所謂人間だ。それだから八衢人足と神様が仰有るのも決して

誣言ではないよ。どうしても人間は愛の善と信の眞に依つて所在徳を積み天國天

人の班に加はらなねばならないのだ。生き乍ら天人の列に加はつてゐるのは、あ

の初稚姫様だ。あの様な立派な御精神にならなくては到底人間として生れて來た

功能がないのだ。それで私等も早くその域に達したいと思つて神様の御用を勤め

て居るのだよ」

斯く話す所へ下女は澤山な馳走を拵へ、

下女「さア皆さま、御飯が出来ました。悠くりお食り下さいませ」
と云ひ乍ら膳部を運び来る。

(大正一二・三・三〇 舊二・一四 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第二三章 晝餐(一四九八)

玉國別一行は、鄭重なる饗應をうけ、神酒を汲み交し、主客打ち解けて、互に神恩を感謝し祝歌を歌つて此席を賑した。玉國別は杯を取り、主人のバーチルにさし、自ら酒を注ぎ愉快氣に歌ふ。

玉國別「アツモス山の神の森

下津岩根に千木高く

おほみやばしら 大宮柱太知りて
 鎮まり居ますバラモンの
 すしん 主神とあれます自在天
 おほくにひこ 大國彦の大神を
 いつきまつ 齋奉りし森林に
 かみ 神の使と現れませる
 しゃうじやうひめ 猩猩彦や猩猩姫
 いかなる 如何なる宿世の因縁か
 ふか 深き仔細は分らねど
 このや 此家の主の父とます
 たま 玉の緒の
 たふと 尊き命を奪はれて
 そのせいれい 其精靈の住所をば
 うしな 失ひ給ひ世繼なる
 たい 體に入り
 かきはときは 堅磐常磐に鎮まりて
 さと 里なる人草を
 こころ 心の底より愛しみ
 たふと 尊き人と謳はれて
 きよ 清く此世を暮しつつ
 しゃうじやうひめ 猩猩彦の精靈が
 みちび 導くままに和田の原
 たなな 棚無し舟に乗り込みて
 ひま 暇ある毎に漁りの
 わざ 業を樂しみ給ひつつ
 いんねん 因縁の綱に引かされて
 しゃうじやう 猩猩々の島へ漂着し

靈みたまの夫婦ふうふうが廻めぐり合あひ

互たがひに睦むつび親したしみて

人ひと無なき島しまに三み年とせぶり

過すごさせ給たまひし不ふ思し議ぎさよ

三あ五な教ひけつの宣せん傳でん使し

玉たま國くに別にのわけ一い行っかうは

印ツ度キの都みやこに現あれませる

大おほ黒くろ主ぬしの神かむ柱はしら

言こと向むけ和やはし印ツ度キの國くに

旭あさひ輝かがく神しん國こくと

立たて直なほさむと瑞みづ御み靈たま

神かむ素す盞さ鳴の大おほ神かみの

御み言ことかしこみ遙はる々ばると

百ももの惱なやみを忍しのびつつ

彼あ方なた此こ方なたの聖せい場ぢやうに

立たち寄より功い績さをを立たてながら

尋たづね求もとめし三み千ち彦ひこに

思おもはず知しらずテルモンの

神かみの館やかたに廻めぐり遇あひ

茲ここに師して弟いの再さい會くわいを

悦よろこび祝いはひ皇すめ神かみの

御み前まへに嬉うれしく感かん謝しやしつ

一い行っかう五ご人にん急きふ坂はんを

下くだりて漸やうく北きたの濱はま

漂へう渺べう千せん里りの埠はと頭ばぎ際は

波は濤たう眺ながむる折をりもあれ

矢やを射いる如ごとく迂すべり來くる

一い艘っその船ふねに身みを任まかせ

浪路遙なみぢはるかに進すすむ折をり 恨うらみを懐いだきしワツクスが

數多あまたの同志どうしを引連ひきつれて 船ふねの底そこより出いで來きたり

仇あだを討うたむと迫せまり來くる スワいちだいじ一大事いっかうと一行いっかうは

帶締おびしめ直なほす折をりもあれ 浪なみを迂すべつて馳はせ來きたる

一艘いっその船ふねに助たすけられ 初稚丸はつわかまると命名めいめいし

大眞人だいしんじんが浪なみの上うへ 犬いぬの背せなに跨またがりて 夜よを日ひについで浪なみの上うへ

出いで在ます後あとを慕したひつつ 左手ゆんでの方かたに横よこたはる

進すすみて行ゆけば罪つみの島しま 五人ごにんの男をとこが何事なにごとか

よくよく見みれば磯端いそばたに 何かなにか仔細しさいのあるならむ

争あらしひ居ゐると見みるよりも 船漕ふねこぎ寄よせて上陸じやうりくし

近ちかより様子やうすを調しらべむと 船漕ふねこぎ寄よせて上陸じやうりくし

五人ごにんの男をとこを救すくひつつ またもや船ふねに眞帆まほをあげ

南みなみを指さして進すすむ折をり 前途ぜんとに當あたつて賊船ぞくせんが

横梯陣わつていぢんをはりながら 初稚丸はつわかまるを攻せめ圍かこむ

其光景の怖ろしさ

船に救ひしヤツコスは

海賊船に打ち向ひ

俺は汝の頭梁株

バラモン教の目付役

ヤツコス司でゐるぞや

早く退却致せよと

八百長芝居を巧妙に

企みたるこそ可笑しけれ

茲に數多の賊船は

舳を北に轉じつつ

何處ともなく逃げてゆく

暗礁點綴する浪路

右に左によけ乍ら

いつとはなしに潮流に

船は乗り入り西南に

向つてずんずん流れ行く

雲か霞か將た山か

彼方に見ゆる黑影は

猩猩島かと怪しみつ

やうやう近づき眺むれば

數多の小猿に取りかこまれ

猩猩姫と諸共に

バーチルさまが立つて居た

これぞ正しく人の子と

御船に救ひて悠々と

還る時しも猩猩々姫

脇に抱きし稚子を

見るも無慙むざんや締め殺ころし 其身そのみは海うみに飛とび込こみて
 憐あはれや水沫みなわと消きえましぬ 吾等われら一いち同どうふりかへり
 姫ひめの情緒じやうちよをしのびつつ 悲歎ひたんの涙なみだに暮くれながら
 バラモン教けうの目付役めつけやく 海賊かいぞく兼かねしヤツコスヤ
 ハール、サポール三人さんにんを 此猿島このさるじまに捨すて置おいて
 船歌ふなうた高たかく歌うたひつつ 浪なみのまにまに歸かへり來く
 又またもや左手ゆんでに一ひとつ島じま 知しらず知しらずに吾船わがふねは
 島影しまかげ近ちかく進すすみ寄よる よくよく仰あふぎ眺ながめむれば
 嶮けはしき巖いはまの中央ちうあうに 自然しぜんの岩窟いはやうが穿うたれて
 そこに怪あやしき人ひとの影かげ 此方こなたに向むかつて手招てまねきし
 救すくひを叫さけぶ如ごとくなり 逆卷浪さかまくなみを乗のり越こえて
 船ふねを間近まぢかに漕こぎ寄よせつ 近ちかづき見みればバーチルが
 懐刀ふところと頼たのみたる 家いへの奴やつこのアンチーさま
 飛とび出だし來きたり喜よろこんで 初稚丸はつわかまるに救すくひ上げ

順風じゆんぷうに眞帆まほを上げながら 浪なみのまにまに船首せんしゆをば

東北方とうほくほうに向け乍なら スマの磯邊いそべを目當めあてとし

歸かへる折をりしもバラモンの 司つかさと唱となふる海賊かいぞくが

八艘はつさうの船ふねを率ひきゐつつ 前途ぜんとを遮さへぎる執拗しつえうさ

神かみの力ちからに散ちらさむと 天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし

嚴いづの言靈ことたま打ち出だせば 其神德そのしんとくにおそれてか

列れつを亂みだして逃にげて行く ああ惟かむながらかむながら神々々

折をりから吹ふき來くる神風しんぷうに 櫓ろ權かいを強つよく操あやつりつ

スマの岸邊きしべにつき見みれば アキス、カールの兩人りやうにんが

いと嬉うれしげに迎むかへ居をる ああ惟かむながらかむながら神々々

神かみの仕組しくみの奇くしびなる 猩々しやうじやうの姫ひめは逸いち早く

吾われより先さきに此館このやかた 主婦しゆふと在ましますサーベルの

姫ひめの體からだに憑のり依つり 靈みたまの上うへの夫婦ふうふなる

猩々しやうじやう彦ひこの生宮いきみやの 歸かへり來きたるを待まち給たまふ

斯^かかるためしは千^ち早^{はや}ふる 神^{かみよ}代^よもきかぬ奇^き蹟^{せき}なり
靈^{みたま}と靈^{みたま}と肉^{にく}と肉^{にく} 二^{ふた}組^{くみ}揃^{そろ}ふた夫^{ふう}婦^{ふう}連^づれ
無^ぶ事^じに館^{やかた}に納^{をさ}まりて 神^{かみ}の道^{おほぢ}によく仕^{つか}へ
此^{この}村^{むらびと}人^{ひと}を愛^{いづく}しみ 惠^{めぐみ}の露^{つゆ}を永^{とこ}久^{しへ}に
垂^たれさせ給^{たま}へ惟^{かむながら}神^{かみ} 神^{かみ}に誓^{ちか}ひて願^ねぎまつる
』

バ―チル 千^ち早^{はや}ふる神^{かみよ}代^よの人^{ひと}となり代^{かは}り

人^{ひと}の初^{はじ}めの嫁^{とつ}ぎするかな。

人^{ひと}は皆^{みな}猩^{じやう}々^{じやう}の子^し孫^{そん}と聞^きくからは

さながら神^{かみよ}世^よの心^こ地^ちこそすれ
』

伊^い太^た彦^{ひこ} 人^{ひと}は人^{ひと}獸^{けもの}は獸^{けもの}昔^{むかし}から

其肉體そのにくたいに差別さへつあるなり。

さりながら神かみよりうけし靈魂たましひは

人もひと猩猩しじょうじょうじう々も變かはらざるらむ』

サーベル姫ひめ』何事なにごとも神かみのまにまに仕つかへなむ

玉國たまくに別にわけ救すくはれし身みは』

玉國たまくに別わけ』玉國たまくにの別わけの司つかさの功績いさをならず

皆皇神みなすめかみの守まもりなりけり』

眞純彦ますみひこ』いざさらばこれの宴會うたげを切きり上げて

婦は下男にも下女にも構はず、せつせと神饌物の調理に熱中して居る。

三千「もし、バーチルさま、私はお察しの通り三五教のへボ宣傳使ですが、バラ

モンの大神様の神饌を拵へるのは今が初めてでムいますよ。何だか奥歯に物が、

こまつた様な気分が致しますわ。ハハハハハ」

バーチル「うつかりして居ましたが如何にも吾々は三五教の宣傳使に助けられ、

又三五教の大神様の御神徳を感謝してる者でムいますから、どうしても三五の神

様の祭典を第一に致さねばなりません。如何でせうか」

三千「さうですな。神様はもとは一株ですから、どちらにしても同じ様なもの

神代からの歴史を考へて見ますと、三五教は國治立の大神様、其外諸々の神様か

ら押籠められた方の神様で、自在天様とは、人間同士なら敵同志の様な者です

が、然し神様のお心は人間の心と違つて寛大なもので、少しも左様な事に御頓着

なく、自在天様をお助け遊ばさうと思つて、バラモン教を言向和す爲に吾々を

お遣はしになるのですからね。然し私では到底決斷がつきませぬから、一寸之か

らお師匠様に伺つて参ります」

バーチル「はい、それは有難うムいます。序に先祖様の靈も三五教で祭つて頂き度うムいますが、之も差支がないか伺つて来て下さいませぬか」

三千彦は「承知致しました」と此場を立つて玉國別の居間に打通り、バーチルがバラモン教を脱退し、三五教に入信し、三五の大神を祭つて貰ひ度い事、竝に祖靈祭を三五教にて營み度い事等の願を告げ、玉國別に對し先づ第一に祖靈祭に就いて教示を乞ふた。

三千「先生、人間は現世を去つて靈界へ行つた時は、極善者の靈身は直ちに天國に上りて天人と相伍し天國の生活を營み、現界との連絡が切れるとすれば、現界にある子孫は父祖の靈祭などをする必要は無いもの様に思はれますが、それでも祖靈祭を爲なくてはならないのでせうか。吾々の考へでは眞に無益な無意義なことの様に感じられますがなア」

玉國「何程天國へ往つて地上現人との連絡が斷たれたと言つても、愛の善と信の眞とは天地に貫通して少しも遲滞せないものである。子孫が孝のためにする愛善と信眞の籠もつた正しき清き祭典が届かないと云ふ道理は決して無い。天國にあ

つても矢張り衣食住の必要がある。子孫の眞心よりする供物や祭典は、靈界にあるものをして歡喜せしめ、且つその子孫の幸福を守らしむるものである。三千 中有界にある精靈は何程遅くても三十年以上居ないといふ教を聞きました。が、その精靈が現世に再生して人間と生れた以上は、祖靈祭の必要は無いやうです。が、斯ういふ場合でも矢張り祖靈祭の必要があるのですか。玉國 顯幽一致の神律に由つて、例へその精靈が現界に再生して人間となり靈界に居らなくても、矢張り祭典は立派に執行するのが祖先に對する子孫の勤めである。祭祀を厚くされた人の靈は靈界現界の區別なく、その供物を歡喜して受けるものである。現世に生れて居ながら猶且つ依然として靈祭を嚴重に行ふて貰ふて居る現人は日々の生活上において、大變な幸福を味はふことになるのである。故に祖靈の祭祀は三十年どころか、相成るべくは千年も萬年の祖靈も、子孫たるものは嚴肅に勤むべきものである。地獄に落ちた祖靈などは子孫の祭祀の善徳に由つて、忽ち中有界に昇り進んで天國に上ることを得るものである。又子孫が祭祀を厚くして呉れる天人は、天國に於ても極めて安逸な生涯を送り得られ、その

天人が歡喜の餘波は必ず子孫に自然に傳はり子孫の繁榮を守るものである。何んなれば愛の善と信の眞は天人の神格と現人（子孫）の人格とに内流して何處迄も斷絶せないからである」

三千「ウラル教や波羅門教の儀式に由つて祖靈を祭つたものは、各自その所主の天國へ行つて居るでせう。夫れを三五教に改式した時はその祖靈は何うなるものでせうか」

玉國「人の精靈や又は天人なるものは、靈界に在つて絶えず智慧と證覺と善眞を了得して向上せむことをのみ望んで居るものです。故に現界に在る子孫が最も善と眞とに透徹した宗教を信じて、その教に準據して祭祀を行つて呉れることを非常に歡喜するものである。天人と雖も元は人間から向上したものだから人間の祖先たる以上は、假令天國に安住するとも愛と眞との情動は内流的に連絡して居るものだから、子孫が證覺の最も優れた宗教に入り、その宗の儀式に由つて、自分等の靈を祭り慰めて呉れることは、天人及び精靈又は地獄に落ちた靈身に取つても、最善の救ひと成り、歡喜となるものである。天國の天人にも善と眞との向上

を望んで居るのだから、現在地上人が最善と思惟する宗教を信じ、且つ又祖先の奉じて居た宗教を止めて三五教に入信した所で、別に祖靈に對して迷惑をかけるものでない。又祖靈が光明に向つて進むのだから決して迷ふやうな事は無いのだ。否却て祖靈は之を歡喜し、天國に在つて其地位を高め得るものである。故に吾々現身人は祖先に對して孝養のために最善と認められた宗教に信仰を進め、その教に由つて祖先の靈に満足を與へ、子孫たるの勤めを大切に遵守せなくてはならぬのである。アア惟神靈幸倍坐世[㊦]

三千「はい、有難うございました。當家の主人も、それで安心致しませう。それから、も一つお尋ねがムいますが、バラモンの神様を如何いたしたら宜しいでせう」

玉國「祠の森の聖場でさへも御三體の大神様を初め大自在天様を祀つてあるのだから、別に排斥するに及ばぬぢやないか。今迄此家もバラモン神の神徳を享けて來たのだから、そんな薄情な事も出來まい」

三千「アズモス山の聖地にはバラモン大自在天様のお宮が建つて居るさうですが、此際主人に吩咐けて祠の森の様にお宮を建てさせ、あの式に大自在天様を脇に祀

つたら如何でムいませうか

玉國「一度主人を呼んで来て呉れ。宮を建てるとなると、さう軽々しくは行かぬから一應意見を聞いて見る積りだ」

三千「はい、承知致しました。直様呼んで参ります」

と、もとの神饌調理室に引返し、祖靈祭に關する玉國別の教示を傳へ、且……神靈奉齋に就いて師匠様がお尋ねし度いと仰有るから一寸來て下さい……とパールを誘ひ、玉國別等の居間に歸つて來た。

玉國「あ、パールさま、貴方はアツモスの森の天王様のお宮を、如何なさるお考へでムいますか」

パール「はい、先祖代々お祀りして來たお宮様なり、又私の精靈が眷族として仕へて居つたのですから、今俄に三五教に這入つたと云つて直に祀り變へる事は如何かと考へます。これに就いては貴方様にゆるゆるお尋ね致し度いと思つてゐました。先生のお考へは如何でムいませうか」

玉國「私の考へとしてはアツモス山の森林に新にお宮を二棟建造し、一方は三五

の大神様、一方は今の天王様を奉齋し、さうして猩々ヶ島に残つて居る小猿を、數十艘の船を用意して迎へ來り、序にバラモン組の三人も助けて歸る様にし度いもので△います。それが神様に對しても、貴方の守護神に對しても最善の方法だと考へます』

バーチル『有難う△います。實の所は最前から何卒さう願ひ度いものだと、家内とひそびそ話をして居りました。あの小猿共は皆猩々姫の子で△いますから、如何しても自分の手近に引寄せ度いのは當然で△います。私も何だか猩々の親になつた様な、妙な氣分が致します。何卒さうして下さらば、これに越したる喜びは△いませぬ』

玉國『貴方の決心が定れば直様、その準備にかかる事に致しますせう。併し乍ら今日は只大神様へ感謝の祭典をする許りですから、三五の大神とバラモンの大神を並べて祭り、下男下女の端に至る迄參拜させておやりなさるが宜しう△いませう』

バーチル『はい、何から何迄御親切なお氣付け、有難う△います。』

人の親は猿より出でしと聞きつるに

猿の親とぞなりにけるかな。

さる昔遠き神代の古より

きれぬ縁につながれし吾

玉國別 天王の森に長らく仕へたる

その神徳で人の宿かる。

肉體はよし猩々と生るとも

靈魂は清し神の御使

バーチル 有難し宣り直したる師の君の

言葉に妻も嘸勇むらむ。

人猿じんゑんと假令たとへ世人よびとは笑ふわらとも

罪つみをとり【さる】神かみとなりなむ〆

かく歌うたひ慌あはただしく神饌しんせん所に引返ひきかへし、用意ようい萬端ばんたん整へて茲ここに芽出めで度たく感謝かんしゃ祭さいを執しつ行かうする事こととなつた。玉國別たまくにわけは主人しゅじんの乞こひに依よつて祭主さいしゅとなり、天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし、終をはつて感謝かんしゃの歌うたを奉たてまつつた。

玉國別たまくにわけ 朝日刺あさひさす夕日ゆふひの照てらすアヅモスの、常磐堅磐とぎはかきはの森もりの邊へに、彌永久いやとこしへに鎮しづまり玉たまふ、大國彦おほくにひこの大神おほかみの、珍うづの使つかひと仕つかへたる、猩々彦しやうじやうひこの精靈せいれいの、懸かかり玉たまへる館やかたの主人あるじ、バートル司つかさに代り玉國別たまくにわけの神司かむつかさ、三五教あななひけうの大御神おほみかみ、バラムン教けうの大神おほかみの、珍うづの御前みまへに慎つつしみて、吾々一行われわれいつかうは云いふも更さら、バートル初はじめアンチーが、三年みつせの憂うきを凌しのぎつつ、漸やっやくここに歸かへりけるは、皇大神すめおほかみのお計はからひと、喜よろこび敬うやまひ大御惠おほみめぐみの、千重ちへの一重ひとへにも報むくい奉まつらむとして、山やま海河野種々うみかはのくさぐさの珍味うましものを、八足やたりの机代つくえしろに、所狭ところせき迄まで置き並ならべ、神酒みきは甕みかの瓶甕へみか

の腹充て立て、御水堅鹽大御饌奉る事の由を、完全に委曲に聞召し、この館の人々を初め、三五教の神司、スマの里の人々を、厚く守らせ玉へかしと、大御前に摺伏して、畏み畏み仕へ奉る 惟神靈幸倍坐世』
と歌ひ終り、感謝祭も無事に終了した。玉國別一行は美はしき閑靜な離れ座敷を與へられ、海上の疲勞を癒やすべく、師弟五人は足を伸ばして休養する事となつた。

(大正一二・三・三〇 舊二・一四 於皆生温泉濱屋 北村隆光録)

第二十五章 萬歳樂(一五〇〇)

テクは、アキス、カールと共に番頭頭になつたやうな氣持で、捻鉢巻をしながら禪一つになり倉から酒を擔ぎ出し、樽の詰を抜いて、柄杓の口からグイと一口呑んで他愛もなく喋りつづけて居る。數百人の里人は貴賤老若の隔てなく、

「バーチルさまが歸られた。旦那様の無事お歸りだ」
と目「やに」を溜めた婆アさま、鼻を垂らしたお爺さま、鼻曲り、聾、盲迄が押し寄せ来り、廣き邸内に酒樽の鏡を抜いて一生懸命に唄ひ舞ひなどして底ぬけ騒ぎをして居る。テクは得意の頂上に達し、
テク「オイ、アキス、カール確りせないか、よくお客さまの様子を調べ、落ち度のないやうに一人もお神酒を頂かぬ落伍者のないやう氣をつけるのだよ。何を云ふても俺のやうな清淨潔白の靈でないものは隅々迄氣が付かないからな。走り元、雪隠の中、物置の隅々迄も氣の付く奴でない」と誠の御用は務まらぬぞよ。ああ甘い酒だ。俺は此家の部下だ、狸々位呑み倒したつて、何と云つたつてイツミの國切つての豪家だから大したものだ。「立寄れば大樹の蔭だ。箸と親方は大きなのがよい」と云ふから、俺も今日からスパイを廢めて、バーチルさまの一番頭に自分から定めて成つたのだから、今後は俺の命令に従ふのだよ。よいか、アキス、カール、のうアキス、カール、それでよいだらう。ヨイトサのヨイトサ、好い酒、好い酒、酔うて酔うておいしうてようて、酔が廻つて、酔うて、甘うて酔うて、

ヨイヨイのテクテクだ。狸々彦しやじやひらの四つ手よのテクさまと云へば俺おれの事ことだぞ。なんばテクさまと云ふても手癖てくせは悪わるくないから、其積そのつもりで居をつて呉くれ」

アキス「ヘン、俄にわかに番頭ばんとう顔をほしよつて偉えらさうに云いふない。併しかし乍ながら今日けふはお目め出で度たい日ひだから、喧譁けんくわはやめて置おかう。今日けふ一日いちにちの番頭ばんとうだから、何なんなりと勝手かっの熱ねつを吹ふいたがよいわ。のうカール」

カール「ウンさうだ。テクが云いつて居ゐるのぢやない、振舞ふるまひ酒ざけが云いつて居ゐるのだ。酒さけと云いふものは狂水きやうすいと云いふが、ほんとに面白おもしろいものだなア。俺達おれたちの下戸げこでも一口ひとくち呑のめば氣持きもちがハキハキして來くるやうだ」

アキス「オイ、たつた一口ひとくちと云いふたが、最前さいぜんから随分ずぶん澤山どつさり引ひつかけたぢやないか。まるで牛うしか象ぞうかが、雑水ざふすゐを呑のむやうだつたよ」

カール「定きまつた事ことだよ。五升ごしやうどつくり徳利どつくりに一口ひとくちぢやほんの少々せうせうながら、ごしよごしよとやつて見みたら、俺おれの頬ほほべたにほんのりと紅くれなゐの花はなが咲さきかけたのだ、エへへへ」

アキス「オイ貴様きさまは奥様おくさまから、餘あまり圓まるい顔かほをして居ゐるので望月もちつきとか餅もちが好きすだとか云いはれたぢやないか。餅もちの好きすな奴やつは酒さけを呑のまぬものだが、貴様きさまは山川やまかは道樂だうらくだ

な。俺は酒は一滴も呑まないと云ふて赤い顔をしたり、熟柿臭い息をしたりしたのは内證で呑んで居たのだな、たうとう化を現はしやがつたな、化虎め」

カール「定つた事だい。いつも酒倉の番許りやらされて居るのだもの、樽に錐穴をあけ、麥藁を突つ込んで、チウチウと鼠鳴きをして居たのだ。そして其後へ釘を突つ込んで置くのだ。貴様は長らく俺と一緒に奉公しておきながらノ口作だなア」

アキス「併し此方の旦那様は、昔から酒許り澤山作つて賣るでもなく、二十戸前の倉に酒を蓄へて居るのは不思議と思つて居たら、矢張斯う云ふ時の間に合さうと思つて準備して居たのだな。ほんとに偉い人ぢやないか」

カール「併しアキス、旦那様と奥さまに天王の森の狸々が憑て居ると云ふ事ぢやないか。俺は一寸次の間から聞いて居たが、ほんとに不思議の事だ。貴様どう思ふか」

アキス「ウンそれが、【しやうじやうむく】（清淨無垢）の靈と云ふのだらうかい。何と云つても旦那様も奥様も人民を憐みなさるから里人の人望はよし、あん

な慈悲深い人が、なぜ三年も離島へ行つて苦勞をなさつたかと思へば、神も佛も此世に無い事かと思ふは。併しまアまア歸つて下さつて奥様は云ふに及ばず、スマの里人がどれ丈け喜ぶ事か知れないのう。何ぢや門の方が大變賑かうなつて來た。一つ調べて見ようか

と表口へ驅け出して來た。
見ればテクは大柄杓を肩にかつぎ乍ら大勢の中央に立つて、自ら踊り狂うて居る。大勢は噓し立てて居る。

テク「エーイーさても目出たや 此方の館、ヨイヨイ

三年振に御主人が 目出度お歸り遊ばした

第一奥さまのお喜び 其次坊ちやま番頭さま

アキス、カールを初めとし ヨイヨイ

イヅミの國のスマの里 老若男女がより集ひ

二十戸前の酒倉を ヨイヨイ

開放遊ばし皆さまに 呑んで呉れよと放り出した

その肝玉の太い事 ヨイヨイ

此テクさまは今日よりは バーチル館の番頭さま

バラモン教のスパイをば さつぱりこんと辭職して

お酒の倉の監督だ 皆さま勇んで下さんせ

ヨイヨイ これからテクが居る上は

これの館の米麥や お酒をどつさり皆さまに

望み通りに與へませう なに程寶があつたとて

命がなければ仕様がない ヨイヨイ

死んだと思ふた主さま 目出度家に歸られて

祝の印に皆さまに お酒を振舞なさるのだ

固く結んだ握り飯 お腹が膨れて瓢箪に

なる所までも食はしやんせ ヨイヨイ

ほんに目出度いお目出度い 天王の森の神さまが

御守護を遊ばし御夫婦を
目出度茲に顔合せ

嬉し涙をドツサリと
流させ給ふた有難さ

ヨイヨイ 其神様のお蔭にて

生れて此方一度も
味はふた事のない甘酒を

鱈腹呑んで勇ましく
舞へよ狂へよ踊れよと

神直々の御命令
こんな嬉しい事あるか

ヨイヨイ アキスやカールの番頭さま

元來肝玉小さくて
是程澤山ある酒を

番頭の職にありながら
己も飲まず人さまに

振舞ひもせず捨て置いた
冥加知らずの罰當り

ヨイヨイ テクが是から此家の

一の番頭となるからは
ケチなやり方致さない

村中上下隔てなく
睦び親しみ神様の

恵の露を感謝して
お神酒を澤山頂けよ

こんな目出度い事あるか ヨイヨイ

猩猩の彦や猩猩姫 不思議の縁で廻り會ひ

お夫婦様の體を借り これの館のお夫婦は

足が二つに手が六つつ 夫婦合して四つの足

十二のお手々を打ち鳴らし アヅモス山の神様の

御前に感謝の太祝詞 宣らせたまへる崇高さよ

ヨイヨイ 三五教の宣傳使

目の玉國別宣傳使 心まつ黒眞純彦

頭たたかれ伊太彦や お酒は樽に三千彦の

綺麗なお嬢のデビス姫 デビスかエビスか知らねども

大黒さまの福の神 降つて湧いたる此家と

酒のイツミの國人は 嘸や喜ぶ事だらう

皆さま揃ふて手を拍てよ ヨイヨイ

酔が廻つたテクさまは 息が苦しうなつて來た

皆さまこれから隠し藝を

包まず隠さず放り出して

今日の目出度いお祝に

花を咲かして下されよ

ヨイヨイ

と一生懸命に音頭を取り、數百人の老若男女が手を取り踊り狂うて居る。斯かる

所へキヨの港の關所を固めて居るバラモン軍のチルテルは數十人の部下を引率れ

馬に跨り、シトシトと門内さして進み入り、馬上に立ちて大音聲、

チルテル「ヤアヤア某はバラモン教の關所を守る、キャプテンのチルテルだ。當

館に三五教の宣傳使、玉國別以下の潛みみると、スパイの注進により召捕に向ふ

たり。ヤアヤア村人ども宣傳使の所在へ案内致せ

と唝鳴りつけて居る。これを聞くより、柄杓にテク、アキス、カールは酒をなみ

なみと汲みチルテルの鼻先に突き出した。チルテルは酒と聞くより矢も楯も耐ら

ず馬をヒラリと飛び降り、餓鬼が水を呑むやうな勢で、ガブリガブリと呑み初め

た。従ひ來れる數多の部下も群衆に交つて、吾劣らずガブ飲みを初め、肝腎の使

命を忘れ、各捻鉢巻をして、尻ふりながら、ステテコ踊を夢中になつてやつて居る。中空には迦陵頻伽、鳳凰、孔雀の瑞鳥、翼寛かに舞ひ狂うて居る。ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・三・三〇 舊二・一四 於皆生温泉濱屋 加藤明子録)

(昭和一〇・六・一五 王仁校正)

~~~~~

靈界物語 第五八卷 眞善美愛 酉の巻

終り